京都府遺跡調査概報

第 32 冊

木津地区所在遺跡

(1) 上人ヶ平遺跡

(2) 瓦谷遺跡

(3) 瀬後谷遺跡

(4) 西山遺跡

(5) 菩提遺跡

1989

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは，昭和56年4月に設立され，本年3月をもって8年になります。この間，国・京都府及びこれらの設立した公社・公団の実施する公共事業に伴う遺跡の発掘調査・研究，文化財保護の普及・啓発事業などを鋭意推進してまいりました。これらの諸事業の成果につきましては『京都府遺跡調査報告書』をはじめ，『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を刊行し，利用に供してきたところであります。

本概報は，住宅・都市整備公団の依頼を受けて行った「木津地区所在遺跡」の調査成果を収めたものであります。本書が調査地域の歴史を解明する上での一助になるとともに，ひいては京都府の地域文化の発展に寄与できることを願ってやみません。

最後になりましたが，本書を刊行するにあたり，調査を依頼された住宅・都市整備公団をはじめ，地元の木津町教育委員会ならびに調査に直接参加し協力いただいた多くの方がたに深く感謝申し上げるとともに，今後とも当調査研究センターの事業に対し，御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成元年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1．本冊に収めたのは，「木津地区所在遺跡」の発掘調査概要である。

2．木津地区所在遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
(1)上人ヶ平遺跡	相楽郡木津町大字市坂字上人ヶ平	昭和62. 4. 17 〜 昭和62. 11. 30	住宅・都市整備公団	小池　寛
(2)瓦谷遺跡	相楽郡木津町大字市坂字瓦谷	昭和62. 10. 14 〜 昭和63. 2. 25		伊賀高弘
(3)瀬後谷遺跡	相楽郡木津町大字市坂字瀬後谷	昭和62. 7. 13 〜 昭和62. 9. 2 昭和62. 11. 17 〜 昭和63. 1. 23		戸原和人
(4)西山遺跡	相楽郡木津町大字市坂字西山	昭和63. 1. 19 〜 昭和63. 2. 19		小池　寛
(5)菩提遺跡	相楽郡木津町大字市坂字菩提	昭和63. 2. 19 〜 昭和63. 3. 5		戸原和人

3．本冊の編集には，調査第1課資料係が当たった。

目　　次

はじめに……1

(1) 上人ヶ平遺跡……3

(2) 瓦谷遺跡……44

(3) 瀬後谷遺跡……61

(4) 西山遺跡……69

(5) 菩提遺跡……74

おわりに……76

挿　図　目　次

第 1 図　調査地位置図…… 2

（1）　上人ケ平遺跡

第 2 図　上人ケ平遺跡調査区配置図…… 5

第 3 図　上人ケ平遺跡３・８番地遺構平面図…… 7

第 4 図　上人ケ平遺跡SH0305実測図 …… 8

第 5 図　上人ケ平遺跡SX0307実測図 …… 8

第 6 図　上人ケ平遺跡SK0301実測図 …… 9

第 7 図　上人ケ平遺跡６・19番地遺構平面図……10

第 8 図　上人ケ平遺跡34・35・36番地遺構平面図……11

第 9 図　上人ケ平遺跡SH3608実測図 ……13

第 10 図　上人ケ平遺跡21・30番地遺構平面図……14

第 11 図　上人ケ平遺跡SH0305出土遺物実測図 ……17

第 12 図　上人ケ平遺跡SH3620出土遺物実測図 ……18

第 13 図　上人ケ平遺跡須恵器実測図……19

第 14 図　上人ケ平遺跡埴輪実測図(1)……21

第 15 図　上人ケ平遺跡埴輪実測図(2)……23

第 16 図　上人ケ平遺跡埴輪実測図(3)……25

第 17 図　上人ケ平遺跡埴輪実測図(4)……26

第 18 図　上人ケ平遺跡埴輪実測図(5)……27

第 19 図　上人ケ平遺跡７号墳(SX2111)出土鉄器実測図 ……29

第 20 図　上人ケ平遺跡SK1909出土遺物実測図(1) ……32

第 21 図　上人ケ平遺跡SK1909出土遺物実測図(2) ……34

第 22 図　上人ケ平遺跡SK0301出土遺物実測図(1) ……35

第 23 図　上人ケ平遺跡SK0301出土遺物実測図(2) ……37

第 24 図　上人ケ平遺跡軒丸瓦実測図(1)……38

第 25 図　上人ケ平遺跡軒丸瓦実測図(2)……39

第 26 図　上人ケ平遺跡軒平瓦実測図……40

第 27 図　上人ケ平遺跡遺構変遷図(1)……41

第 28 図　上人ケ平遺跡遺構変遷図(2)……42

（2） 瓦谷遺跡

第 29 図　瓦谷遺跡調査区配置図……44
第 30 図　瓦谷遺跡31・32・34・35番地遺構平面図……46
第 31 図　瓦谷遺跡31・32・34・35番地土層断面図……47
第 32 図　瓦谷遺跡74番地-B遺構平面図 ……49
第 33 図　瓦谷遺跡IKW74番地，ISR1-3・4番地土層断面図……51
第 34 図　瓦谷遺跡SE7402(井戸)実測図 ……53
第 35 図　瓦谷遺跡ISR1-3・4番地遺構平面図……54
第 36 図　瓦谷遺跡出土遺物実測図(1)古式土師器……56
第 37 図　瓦谷遺跡出土遺物実測図(2)木製品……58

（3） 瀬後谷遺跡

第 38 図　瀬後谷遺跡調査区配置図……62
第 39 図　瀬後谷遺跡21・22番地遺構平面図……64
第 40 図　瀬後谷遺跡土層断面図(東壁)……65
第 41 図　瀬後谷遺跡出土遺物実測図(1)……66
第 42 図　瀬後谷遺跡出土遺物実測図(2)……67

（4） 西山遺跡

第 43 図　西山遺跡調査区配置図……70
第 44 図　西山遺跡68番地遺構平面図……71
第 45 図　西山遺跡SX6801実測図 ……72
第 46 図　西山遺跡出土遺物実測図……73

（5） 菩提遺跡

第 47 図　菩提遺跡調査地平面図……74
第 48 図　菩提遺跡トレンチ断面図……75

図　版　目　次

（1）　上人ケ平遺跡

図版第 1　(1)調査地全景(空中写真，南東から)
　　(2)調査地全景(空中写真，上が北)

図版第 2　(1)ISR3・8bt全景(南から)　(2)SK0301遺物出土状況(南東から)

図版第 3　(1)SH0305全景(南西から)　(2)SH0305遺物検出状況(北東から)

図版第 4　(1)ISR6bt全景(南から)　(2)ISR19bt全景(南から)

図版第 5　(1)SK1909(東から)　(2)SH3620遺物出土状況(南から)

図版第 6　(1)ISR36bt　SH3608全景(西から)
　　(2)上人ケ平 6 号墳検出状況(南東から)

図版第 7　(1)ISR21bt-3全景(北東から)
　　(2)上人ケ平 5 号墳造り出し埴輪検出状況(西から)

図版第 8　(1)上人ケ平 5 号墳造り出し鶏形埴輪(頭部)出土状況(西から)
　　(2)上人ケ平 7 号墳周溝内遺物出土状況(東から)

図版第 9　(1)上人ケ平 7 号墳埋葬主体部遺物出土状況(北から)
　　(2)上人ケ平 7 号墳遺物埋納壙検出状況(北から)

（2）　瓦谷遺跡

図版第10　(1)IKW34bt全景(北から)　(2)IKW31bt河道検出状況(東から)

図版第11　(1)IKW32bt全景(東から)　(2)IKW35bt河道検出状況(西から)

図版第12　(1)ISR1-3bt全景(東から)　(2)ISR4bt全景(北から)

図版第13　(1)IKW74bt-A全景(南から)　(2)IKW74bt-B全景(北東から)

図版第14　(1)IKW74bt-B　SE7402検出状況(北から)
　　(2)IKW74bt-B　SE7402石敷の検出状況(西から)

（3）　瀬後谷遺跡

図版第15　(1)ISN34bt-1全景(南東から)　(2)ISN21bt全景(西から)

図版第16　(1)ISN22bt全景(西から)　(2)ISN16bt全景(南から)

（4）　西山遺跡

図版第17　(1)INM68bt-3全景(東から)
　　(2)INM68bt-3　SX6801検出状況(西から)

（5）　菩提遺跡

図版第18　(1)調査区遠景(北から)　(2)IBI103bt全景(南東から)
図版第19　出土遺物(1)
図版第20　出土遺物(2)
図版第21　出土遺物(3)
図版第22　出土遺物(4)
図版第23　出土遺物(5)
図版第24　出土遺物(6)
図版第25　出土遺物(7)
図版第26　出土遺物(8)
図版第27　出土遺物(9)

木津地区所在遺跡
昭和62年度発掘調査概要

はじめに

この調査は，住宅・都市整備公団の依頼を受けて，関西文化学術研究都市の開発区域内に所在する遺跡の調査で，通称，木津東部丘陵(木津町鹿背山・木津・市坂・梅谷)地で実施する発掘調査である。

この地域内では，昭和59年度から継続して調査が進められており，現在までに遺物散布地10か所，古墳推定地9か所について試掘調査及び発掘調査を行っている。

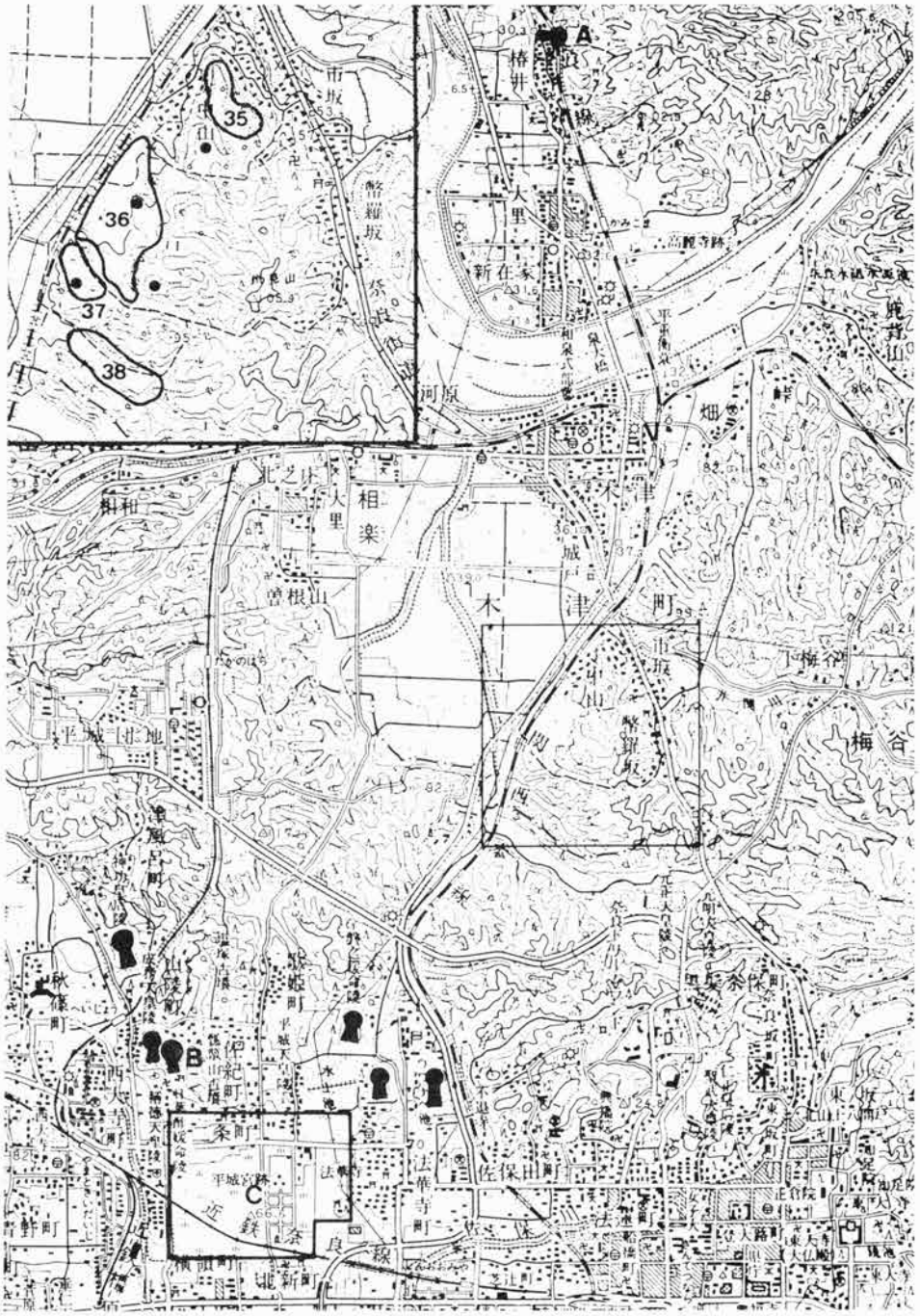
昭和62年度は，大字市坂地区で5遺跡，すなわち奈良県と境を接する瀬後谷遺跡，その北の台地に広がる上人ケ平遺跡，さらにその北で，最も広い範囲に広がる瓦谷遺跡，瓦谷遺跡の北東に位置し，南北にのびる丘陵上に広がる西山遺跡，市坂の集落と梅谷の集落の間で，東西に貫流する井関川の南に位置する菩提遺跡の調査を行った。

瀬後谷遺跡は，奈良県境と接し，24号線バイパスに向かって開く東西に長い谷部全体が，奈良時代の土器や瓦の散布地として知られている。今まで発掘調査が一度も行われたことがなく，どのような遺跡であるのかよくわかっていなかったが，今年度の発掘調査によって，奈良興福寺の創建瓦の系統をひく軒先瓦や，奈良時代の土師器・須恵器が出土したことによって，この地で瓦を焼いた遺跡が存在すると考えられるようになった。

上人ケ平遺跡は，五領池の東の一段高い台地全体が遺跡の範囲である。この台地の上には古くから上人ケ平古墳が知られていた。また，台地のすぐ南の竹藪の中には多くの布目瓦が落ちており，平城宮の瓦を焼いた市坂瓦窯が知られている。上人ケ平での調査は昭和59年度から続けられており，現在までに各時代の遺跡が数多く確認されている。

古墳時代前期には，竪穴式住居群が営まれ，土器棺(布留式期)による埋葬が行われたことが明らかになっている。古墳時代中期から後期にかけては，低墳丘で小型の方形墳や高塚を造営し，この台地は脈々と古墳の築かれる場所となる。奈良時代では，掘立柱建物や溝などによって区画された施設が確認されており，市坂瓦窯とともに平城京の造営のための瓦の生産地となることが確認されている。あたかもこの台地が，官の工房の様相を呈してきているのが現状である。

瓦谷遺跡の調査は，昭和61年度から行っており，4世紀に遡る古墳群や，古墳時代の流



第1図　調　査　地　位　置　図

35：西山遺跡，36：瓦谷遺跡，37：上人ケ平遺跡，38：瀬後谷遺跡

A：椿井大塚山古墳，B：佐紀盾列古墳群，C：平城宮跡

路跡などを確認している。

西山遺跡は，市坂の集落の南側の丘陵全体に広がる遺物の散布地である。今年度初めて調査を行い，奈良時代の甕を使用した甕棺墓が確認された。

菩提遺跡の調査は，昭和60年度に一度行っており，今年度で2回目となる(第1図)。

調査は，当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人，同主任調査員戸原和人，同調査員石尾政信，岩松　保，小池　寛，伊賀高弘が担当し，多数の補助員・整理員がこれを補助した。また，関係諸機関並びに土地所有者などからも多大な協力・援助を頂いた。記して感謝したい。(注1)

なお，本調査にかかる経費は，住宅・都市整備公団が負担した。

(戸原和人)

(1) 上人ケ平遺跡（第1・2図，図版第1）

1．はじめに

上人ケ平遺跡は，標高54～58mの丘陵上に位置し，平野部との比高は，15mを測る。地形的には，上人ケ平5号墳から3btにかけての主尾根とそこから北方へのびる2本の支尾根に分かれている。主尾根には，上人ケ平5号墳に代表される古墳群が築造されており，東端支尾根には古墳時代前期(布留式併行期)の集落が位置している。また，中央支尾根には，古墳時代前期の墓があり，各尾根ごとに特色を見出せる状況にある。一方，奈良時代に入ると，市坂瓦窯の成立とともに，丘陵上が集落及び作業場として開発され，古墳等が削平される。奈良時代の集落は，先述した主尾根中央部を中心として広がりを見せ，主尾根と中央支尾根の先端部分に，搬出できない製品等を投棄する施設と思われる土坑がある。なお，丘陵南半には，人工的な谷が走っており，瓦生産のための粘土を採集した跡と考えられる。

以下，各尾根ごとに検出遺構を概観する。

2．遺　　構

①3・8bt（第3図，図版第2-1）

先述した主尾根の先端に位置するトレンチである。尾根の西側にはJRが走っており，この部分に古墳等が存在した可能性は高い。

9号墳(SD0805)　上部は後世の削平を受けており，築造時の墳丘規模は不明であるが，周溝の最深部で計測すれば，一辺10mの方形墳となる。周溝は概して東半分の残存状態が良好で，平均幅は2.5mである。周溝の埋土堆積状況は，基本的に3層に分けられる。最下層は濁黄褐色粘土層であり，古墳築造直後に墳丘の盛り土の一部が崩落して堆積したと考えられる。中間層は黒褐色粘土層で，埴輪の大半は，この層から出土している。埴輪には，家形埴輪・蓋形埴輪・鳥形埴輪などの形象埴輪や，円筒埴輪，朝顔形埴輪などがある。なお，最下層内には，西端部で須恵器出現直後の土師器が出土し，また，南端部では，須恵器・壺と土師器・高杯が据えられた状態で出土しており，両者は，埋葬に係わる祭祀に関係するものと考えられる。墳丘は残存していないため墳高は不明であるが，他の古墳と同じく低墳丘であったと考えられる。周溝の東隅部の内外肩部にピットがあることから，墳丘へ通ずる簡単な土橋があったとも考えられる。

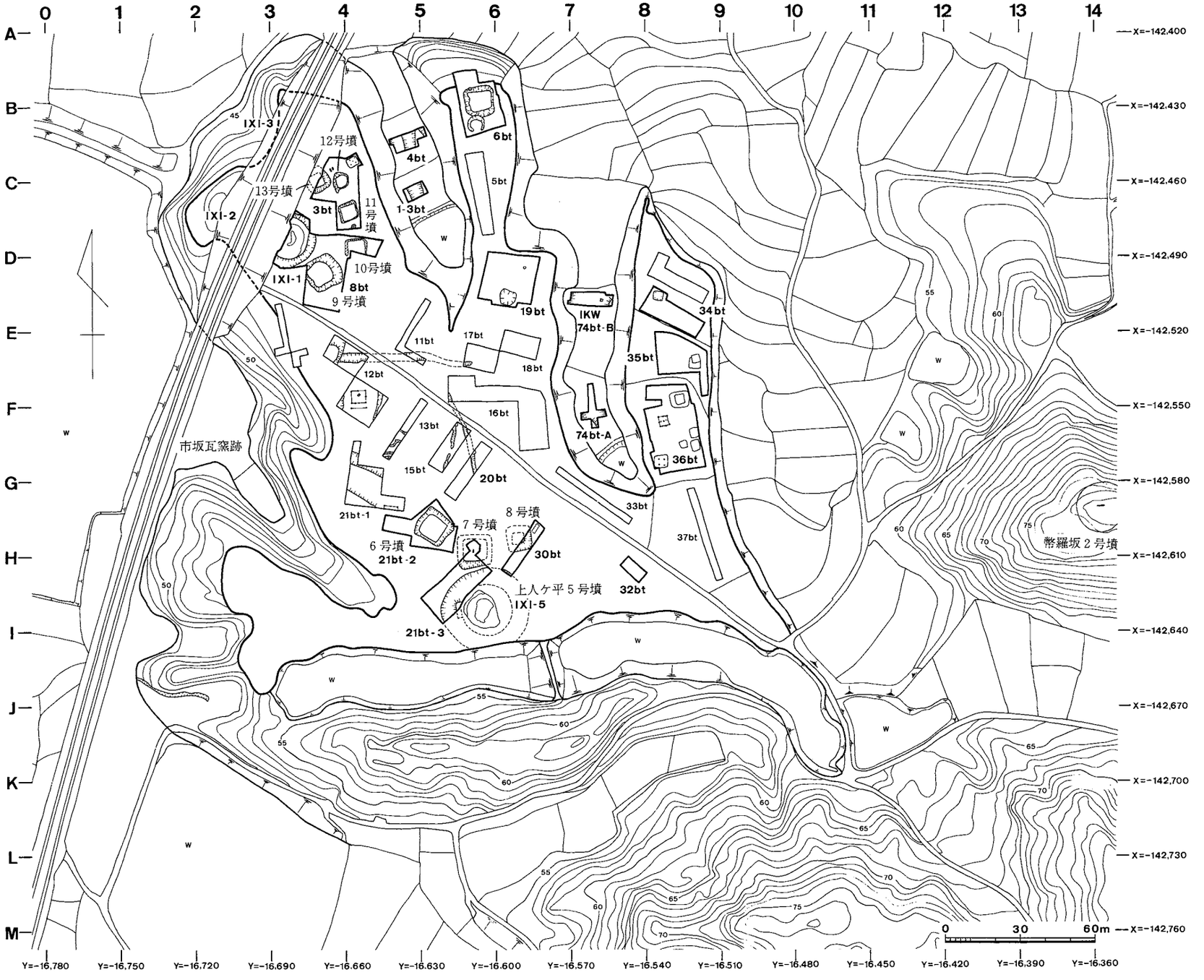
10号墳(SK0803)　深く掘り込まれた最西部(SK0803)と，15cm前後の深さで「L」字形に曲がる溝からなる。両者を結び付ける明瞭な根拠はないが，最西部(SK0803)検出の土師器・高杯及び埴輪と溝内検出の埴輪の時期が近接することから古墳として復原した。西側周溝最下層からは，土師器・高杯が5個体と同・壺が1点出土しており，溝内埋葬ないし埋葬に係わる祭祀と関連があると理解される。

11号墳(SD0302)　周溝最深部で計測すれば，一辺7mの方形墳となる。周溝の残存状況は悪く，最下層の一部しか検出できなかった。溝内から，数点の埴輪片を検出したにすぎない。基本的な溝幅は1.0mを測り，検出した古墳の中でも小規模である。

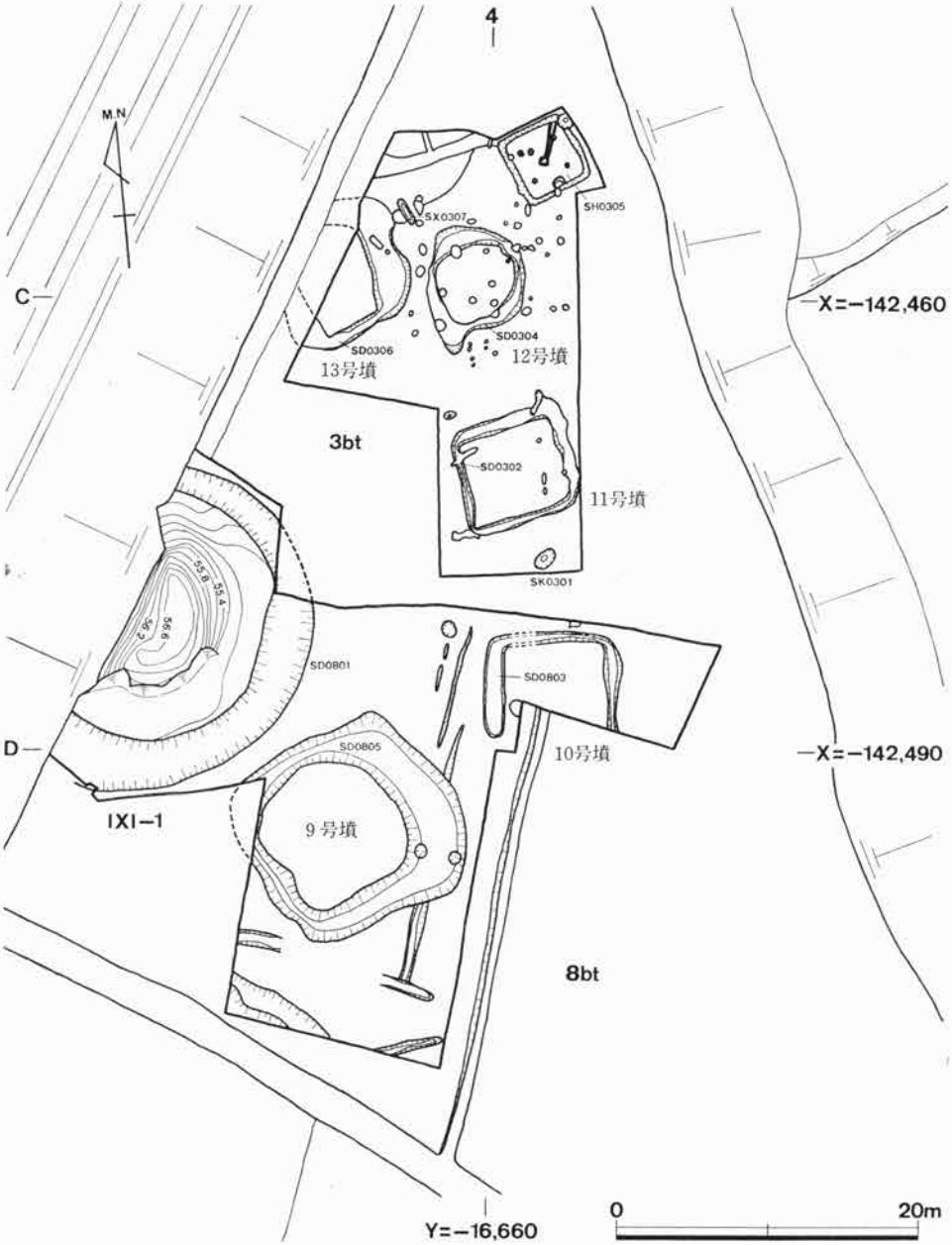
12号墳(SD0304)　残存状態は悪く，正確な墳形についても不明な点が多いが，一辺5mを測る方形墳と考えられる。周溝からは，須恵器・杯蓋(第13図8)が1点出土している。出土した須恵器から，古墳群の中でも最も新しい時期に属するとみられ，古墳築造末期であるため，墳形が正確な方形を呈していないと考えられる。

13号墳(SD0306)　トレンチ西で周溝の東半を検出したにすぎないが，一辺8.2mの方形墳と考えられる。周溝隅の一部が掘り残されており，墓道と考えられる。

土壙墓(SX0307)(第5図)　長軸1.94m×短軸0.54mの隅丸長方形プランを有する土壙墓である。検出面から底までの深さは0.5mで，下層に濁黄褐色粘質土，上層に暗褐色土が堆積している。底部北西部には，幅10cm・深さ10cmの溝状施設があり，灰褐色砂利が充塡されていることから，排水用として掘られたと考えられる。なお，土壙内両端で土師器・小型壺を1点ずつ確認している。この土壙は上層の攪乱により，棺埋納痕は明瞭でなかった。



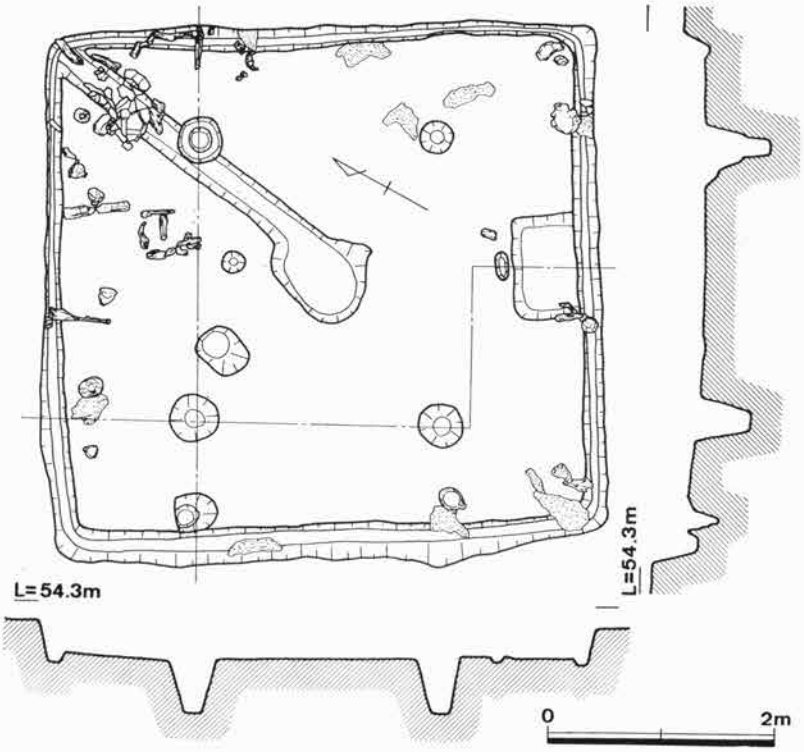
第2図　上人ケ平遺跡調査区配置図



第3図　上人ケ平遺跡3・8番地遺構平面図

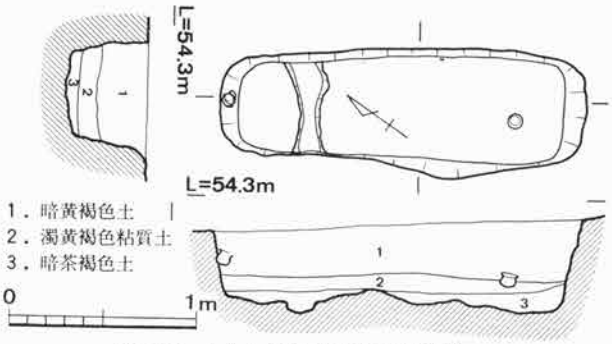
土坑(SK0301)(第6図，図版第2-2)　長径2.73m×短径1.74mの楕円形を呈する土坑である。坑内からは，長頸壺・杯・高杯・甕・鉢等の須恵器や皿・甕等の土師器が出土している。土器の大半は奈良時代に属するが，6世紀後半の須恵器も混入している。

竪穴式住居跡(SH0305)(第4図，図版第3)　3btの先端で検出した弥生時代の唯一の



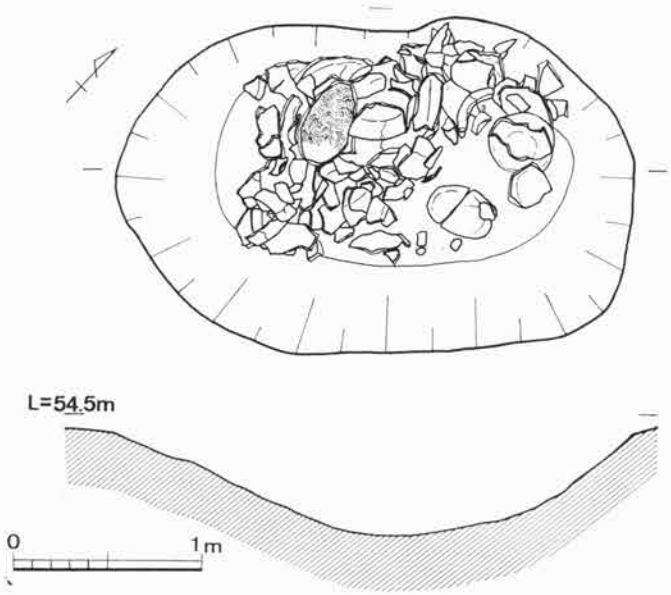
第４図　上人ケ平遺跡SH0305実測図

遺構である。一辺約7.5mの方形プランを有し，遺構検出面から床面までの深さは0.3mを測り，比較的残存状況の良好な住居跡である。床面には，四柱の柱穴が40cm掘り込まれており，周壁溝も完存している。南面には，周壁溝に接するように一辺30cmの方形の落ち込みがあり，周辺部が固いことから，出入口を想定することができる。住居跡の中央には，直径30cmの円形土坑が穿たれ，その土坑から北東へのびる幅15cmの溝を１条検出している。また，この溝の周壁溝に近い部分からチャート製の台石を確認しており，土坑・溝は，何らかの作業に関連すると考えられる。床面には，赤色に焼けた焼土とともに建築部材が炭化した状態で散乱しており，火災によって倒壊した可能性が高い。床面では，甕・鉢などの土器が合計７個出土しており，特に，鉢を６個体確認していることは，弥生時代後期の土器のありかたを考える上で重要である。なお，平野部の比高から考えて，高地性集落として捉えることもできよう。



第５図　上人ケ平遺跡SX0307実測図

②**6・19bt**(第７図，図版第４)



第6図　上人ケ平遺跡SK0301実測図

6・19btは，先述した中央支尾根に設定したトレンチである。6btでは，庄内式期に併行する土坑・奈良時代の土坑等を検出した。この土坑から，手焙り形土器が出土している。溝(SD0603)は，方形を呈する溝で，時期的には，やや先行するものの，他の方形墳と同じく，墳墓であった可能性が高い。19btでは，古墳時代前期の土壙墓を確認しており，後述する東端支尾根の集落に対する墓として考えることができる。また，奈良時代の土坑・柱穴・溝を検出した。

土坑(SK1909)(図版第5-1)　一辺6.75mの隅丸方形のプランを持ち，深さは0.2mを測る。肩部はなだらかに傾斜し，土坑底部には平坦面をもつ。土坑からは，杯・壺・皿・甕等の須恵器や鉢・甕・高杯等の土師器，軒丸瓦・平瓦・丸瓦，鉄製品等が出土している。出土遺物の大半は，残存状況が悪く，製品として供給できないものを投棄したと考えられる。軒丸瓦は平城宮6133b型式で，他の土器類との一括性を考えた場合，良好な資料である。

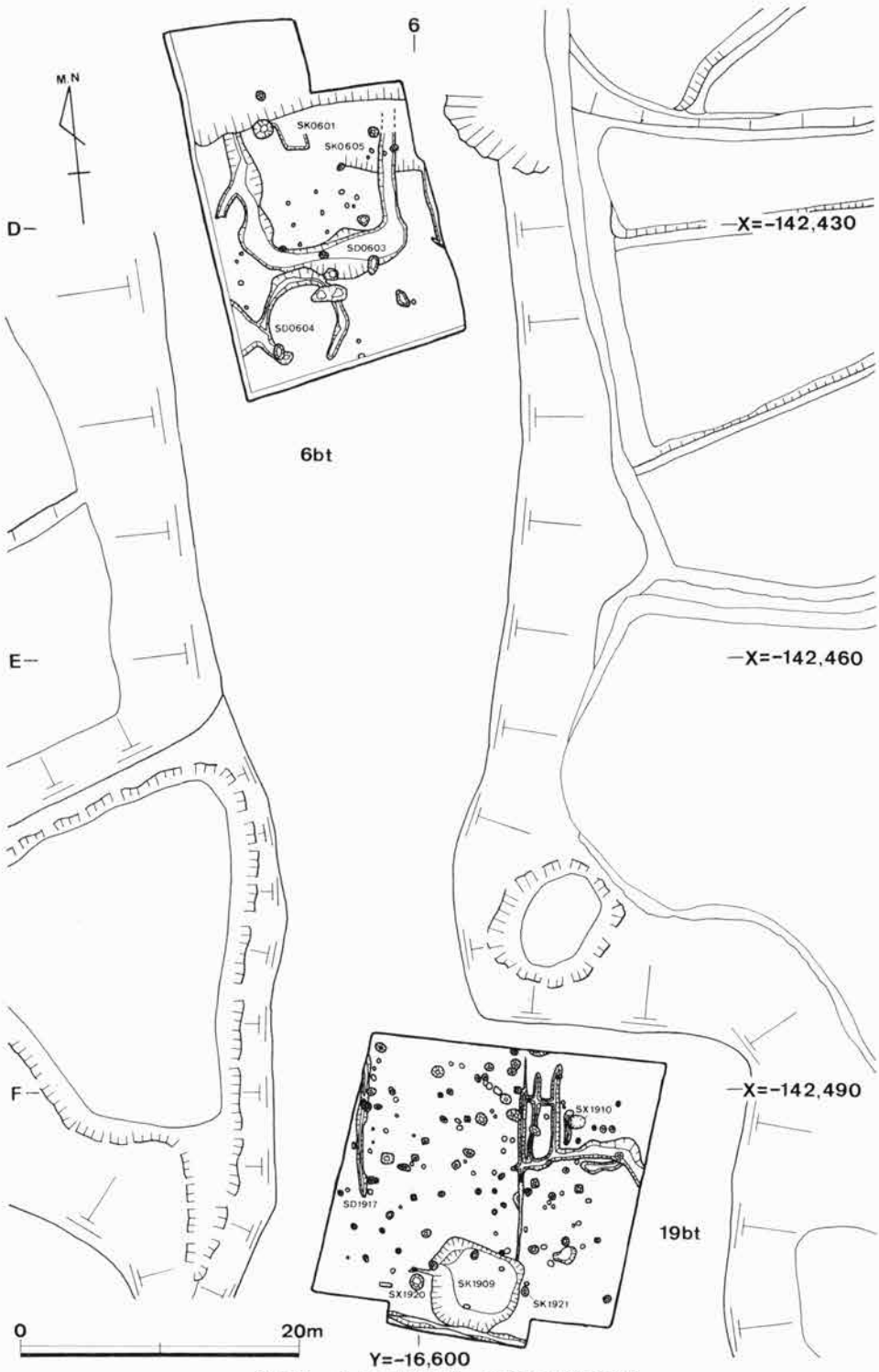
溝(SD1917)　幅0.5m・長さは10mである。溝は「V」字形に掘られており，埋土は濁黄褐色土である。溝内からは，瓦や須恵器類のほかに，鉄斧等の鉄製品もある。溝は，生活面の溜水を排水する目的で穿たれたと考えられる。

柱穴群　検出した柱穴は，基本的には円形掘形であるが，一部，方形掘形のものもある。柱穴の深さは，30〜40cmが多く，土師器・椀を埋納しているものもある。整理作業が進展すれば，掘立柱建物跡として，規模，棟数を明らかにできる。

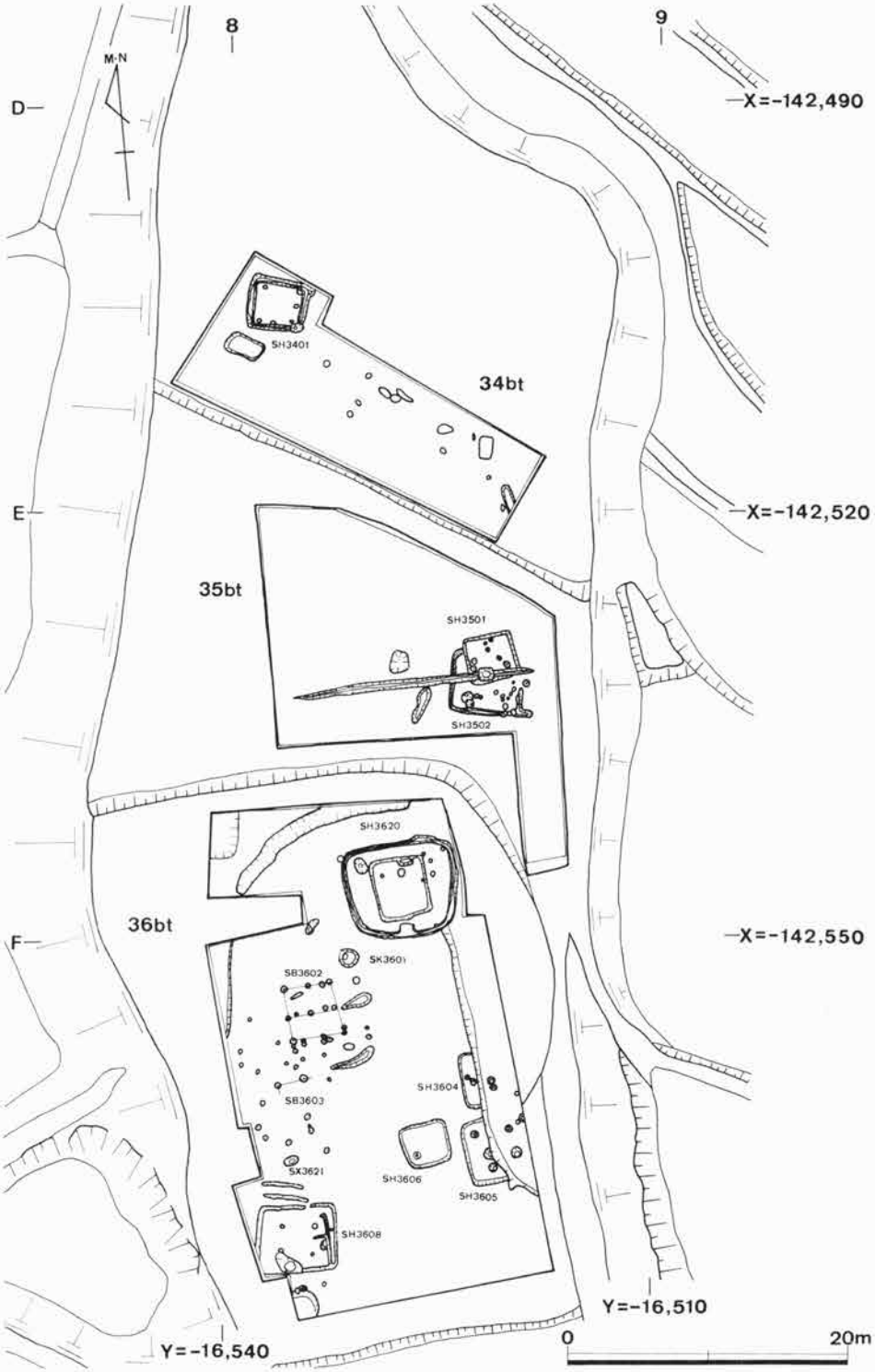
③34・35・36bt(第8図)

先述した東端支尾根に位置し，古墳時代前期(布留式併行期)の集落跡が尾根上に広がっている。

竪穴式住居跡(SH3620)(図版第5-2)　尾根中央部に位置し，南北4m×東西3mの方形



第7図　上人ヶ平遺跡6・19番地遺構平面図



第8図　上人ケ平遺跡34・35・36番地遺構平面図

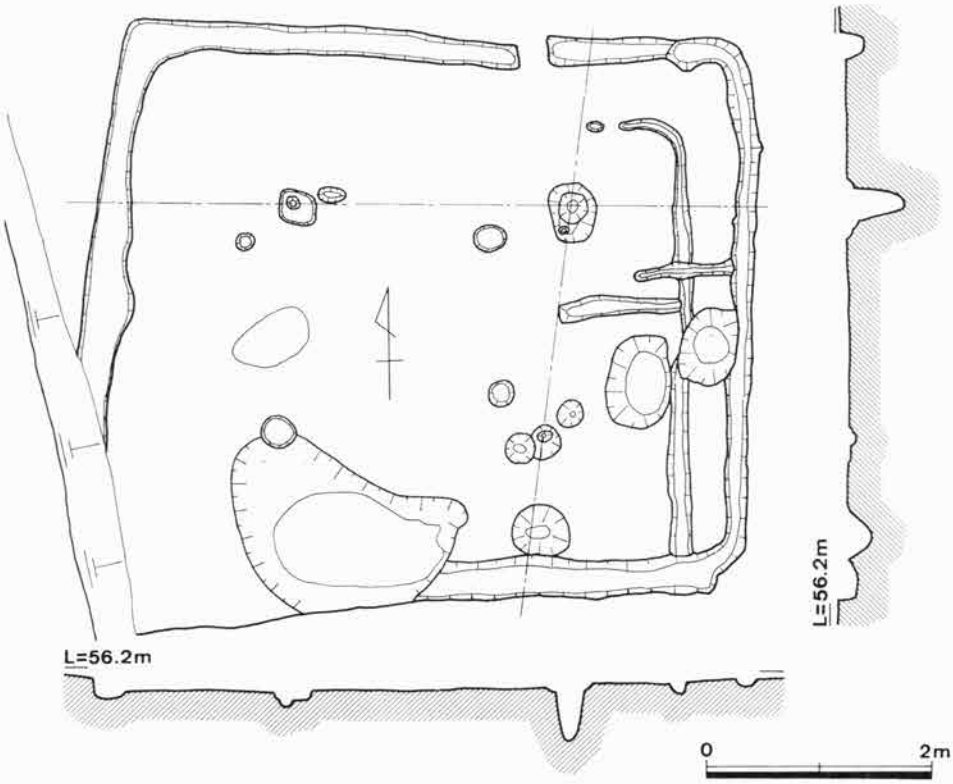
プランを有し，幅10cmの周壁溝が巡っている。床面には，四柱の柱穴はなく，木板等で柱を受けていた可能性がある。床北面には，焼土が薄く堆積しており，炉の痕跡と考えることもできる。竪穴式住居跡の周囲には，北面6m×南面5m，東西面5m・幅15cmの隅丸台形状の溝が巡っている。溝の南面中央には，0.4m×0.6mの落ち込みがあり，溝内からは，住居跡床面で検出した土器と同時期の土師器が出土していることから，住居跡と溝に何らかの関連があると考えられる。住居跡の周囲にめぐる溝の用途については，現時点では明らかではないが，床面よりも深く掘り込んでいることから，排水溝(流水の侵入を防ぐ目的)の可能性を指摘できる。しかし，周囲に巡ることなどを考えれば，住居空間を拡張する目的で穿たれたと解釈することもできる。

竪穴式住居跡(SH3604)　近世の土取りによって70%以上が消失し，南北の一部だけが残存している。一辺は3mを測り，周壁溝が巡っている。床面では遺物は出土していない。周辺の住居跡群から布留式併行期に造営されたと考えてよい。

竪穴式住居跡(SH3605)　60%以上が消失している。現存する南北面は5mを測り，周壁溝がめぐっている。床面には四柱の柱穴があり，中央部には砂利を充填した炉跡がある。床面直上から土師器片が数点出土しているにすぎない。

竪穴式住居跡(SH3606)　一辺約3.5mを測り，北辺に比べて南辺が少し短くなる台形の平面プランである。床面には柱穴をもたず，周壁溝は，幅が狭いが巡っている。

竪穴式住居跡(SH3608)(第9図，図版第6-1)　西側の谷部に隣接する最西端で検出した方形プランの住居跡である。床面には，数多くのピットが掘り込まれており，床面からの深さが50cm前後のものと20cm前後のものに分けることができる。すべての全ピットが，住居跡に伴うものとは考えにくく，深さ50cm前後のピットが，住居跡の柱穴と考えたほうがよい。床面には，周壁溝が北面と東面のみ，2条掘られており，内側の溝は，造営当初の周壁溝であり，外側は，住居空間の拡張に伴う溝と考えられる。造営当初の住居跡は，南北4m×東西4.9mの規模を有している。北面の周壁溝は残存しておらず，後世の削平を考える必要がある。造営当初の住居跡は，その規模が他の住居跡と同規模であり，床面に柱穴を持たないものが大半であることから，柱穴を穿たない方法で柱を受けた可能性が高い。東面中央には，0.8m×0.6mの土坑があり，貯蔵穴と考えられる。これに隣接する部分には，周壁溝に直交する幅0.2m×長さ0.2mの溝が掘り込まれている。一方，拡張後の住居跡は，北西・南西面の周壁溝は造営当初のものと共有しており，北東方面への拡張がみられる。規模は5.0m×5.9mで，北面には貯蔵穴と周壁溝に直交する長さ0.9mの溝が走っている。床面には，四柱の柱穴を掘り込んでいる。規模は住居跡中最も大きく，上部構造の安定をよくするために床面に柱穴を穿ったと考えられる。



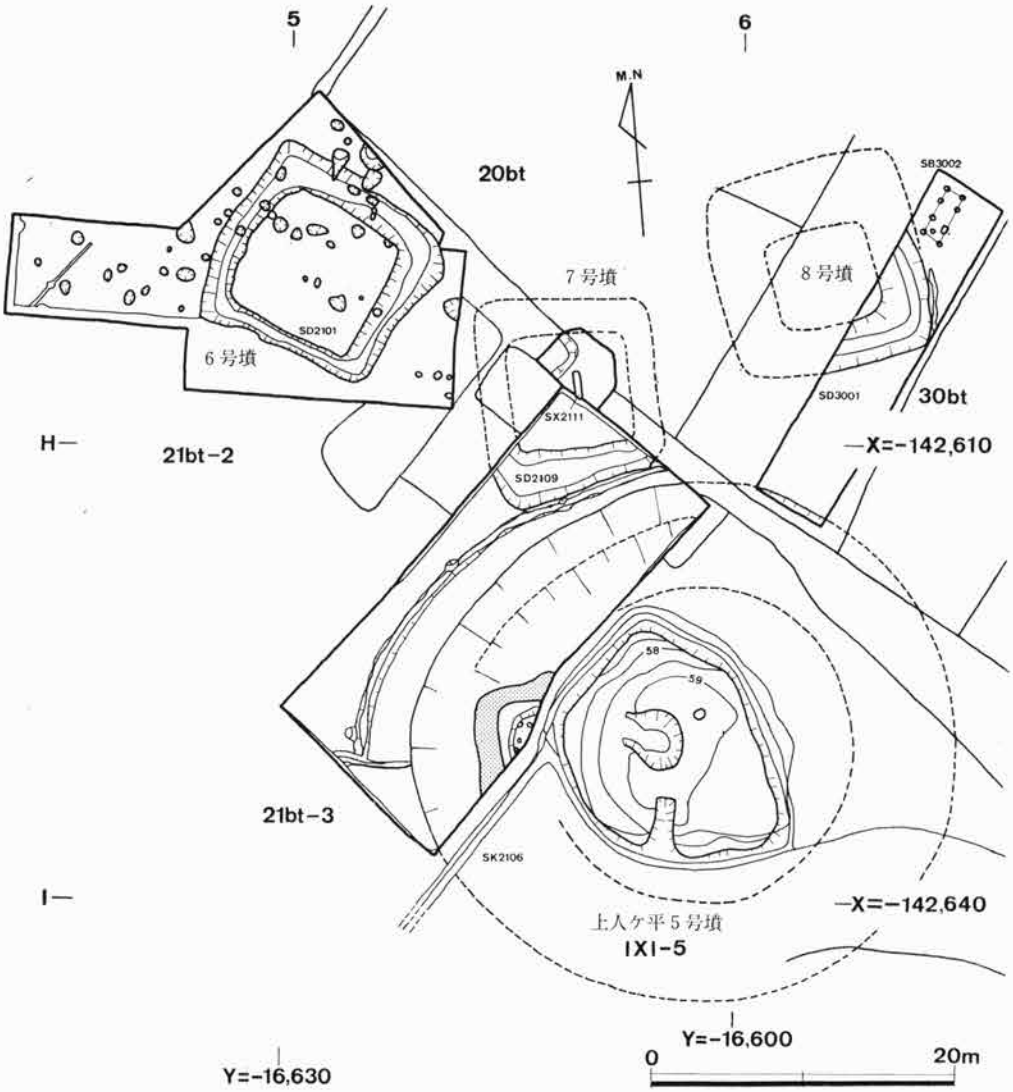
第9図　上人ケ平遺跡SH3608実測図

昨年度に検出した住居跡を含めると7基を数える。総柱の掘立柱建物跡や住居跡の周囲に溝がめぐる住居跡は，各々が特別な用途をもって造営され，尾根全域に広がる住居跡群は，小規模ながら集落と認識できる。なお，切り合い関係をもって造営されていることや，土器の年代差から短期間に廃絶したと考えられる。

④**21・30bt**(第10図)

21btは，先述した尾根の基部に当たり，上人ケ平5号墳に隣接したトレンチである。

6号墳(SD2101)(図版第6-2)　21-2btトレンチで検出した方形墳の周溝である。トレンチの北東部分には，表土下に奈良時代の土器・瓦・塼を含む包含層を検出した。この包含層は，北西部の谷に向けて流れ込む溝状を呈しており，下層の古墳の周溝を切り込む程度の流水があったと考えられる。古墳の周溝は，黄褐色土の地山を掘り込んでおり，溝の最深部で計測すれば，一辺約11mの方形墳と考えられるが，墳丘及び埋葬主体部は削平を受けて残存していない。周溝は，幅2.0～2.5mと必ずしも一定幅ではない。周溝の断面観察から，最下層は，墳丘築造直後に流れ込んだ濁黄褐色土が堆積しており，この土層内から杯身・杯蓋・甕などの須恵器が出土している。おそらく墳丘築造後に行われた祭祀と深く



第10図　上人ケ平遺跡21・30番地遺構平面図

関連していると考えられる。中層は，濁黒褐色粘質土を主体とする堆積であり，馬形埴輪や円筒埴輪が出土している。埴輪は，墳丘上に樹立されていたものが倒壊した状態で出土しており，少なくとも一定時間，周溝として機能したと考えられる。

7号墳(周溝SD2109・埋葬主体部SX2111)(図版第8-2・9)　先述した6号墳(SD2101)と上人ケ平5号墳の中間で検出した一辺約10mの方形墳である。埋葬主体部(SX2111)は，幅1.5m×長さ3.0mの規模の掘形をもち，主軸方向はほぼ北と一致しており，中央に0.4m×2.0mの木棺のラインを確認した。棺の周囲は白色粘土で覆われており，白色粘土が内傾している部分も認められる。また，後述する副室との境部は，白色粘土を充填している。

検出面から棺底部分までの深さは約0.4mあり，墳頂部を含めた削平は，ほとんどなかったと言える。周辺の旧地形を考える際有効な資料である。棺床には，ほぼ全面に赤色顔料が塗られており，床直上から鉄剣・ガラス小玉・鉄鏃が出土している。鉄剣・鉄鏃は埋葬時の状態を保っていたが，ガラス小玉は，奈良時代の攪乱を受け，広い範囲に散乱している状況であった。これらの出土地点から，頭位は北方であったと考えてよい。木棺の北方には0.3m×0.4mの範囲に白色粘土で覆われた副室がある。深さは7cmと浅く，棺の一部とは考えにくく，別の木製箱であった可能性が強い。ここからは，副葬時の状況を保った須恵器の椀や鉄鏃・鉄鎌(ミニチュア含む)・鉄斧(ミニチュア)・鉄刀先が出土している。埋葬主体部と副葬品埋納坑は，同質の白色粘土で覆われており，同時期に設けられたものである。墳丘は，先述したように削平を受けてはいるが，残存状況は良好である。築造時の地山面と盛土の境には，厚さ2cm程度の炭層が若干の凹凸はあるものの面的に堆積している。また，炭混じりの粘土が周溝内にも広がっていることから，古墳築造時に周辺部分については整地作業に伴う樹木の伐採及び燃焼行為があったと考えられる。埋葬主体部の床面は，この炭層には達しておらず，地山整形後に盛土をして，埋葬を行ったと考えられる。

周溝は，幅2.0〜3.5mに掘られ，深さは0.6mを測る。最下層は，墳丘築造直後に墳丘の一部が崩落した堆積が見られ，中間層には，朝顔形埴輪や円筒埴輪が入る黒褐色粘土が観察できる。なお，最上層には，少量ながら奈良時代の遺物が混入しており，奈良時代に造成されたと考えられる。出土した埴輪と埋葬主体部の一括資料は，古墳の築造時期を考える根拠になるばかりでなく，各々の年代観を両側面から検証できる資料として注目できる。

上人ケ平5号墳(図版第7･8-1)　上人ケ平5号墳は，昭和13年に造り出し部が調査され，昭和46年に山城考古学研究会によって測量調査が行われた。これらの調査から祭壇をもつ円墳として知られてはいたが，周濠及び造り出しにまで及ぶ広範囲の調査は初めてであり，今まで以上に古墳のアウトラインが明確になり，数値等にも若干の修正が必要となった。以下，各施設ごとに説明し，問題点の指摘も後述する。

a．墳丘　昭和13年の調査以後，墳丘の崩壊は進んでおらず，盗掘坑や墳丘南側の落ち込みも変化していない。墳丘自体は東側が著しく削平を受けており，正確な規模が一定できない要因とも言える。墳丘上には，拳大〜人頭大の礫が散乱しており，葺石で全面が覆われていたと考えられる。また，埴輪片も散乱していることから，墳丘上にも埴輪列が樹立していたらしい。

b．造り出し　墳丘中心点から西方へ北から90°振った墳丘裾部に造られており，その主軸方位から築造当初に計画的に造られたと考えられる。造り出しの上縁部には，埴輪列

がめぐり，聖域区画の目的を果たしている。埴輪列の角部には，他が直径30cmの埴輪であるのに対し，直径40cmの規模の大きい埴輪を樹立しており，造り出し角部の標式としての意味を持たせている。造り出しの角部傾斜地では，鶏形埴輪の頭部・背部が出土しており，角部に樹立されていた可能性も指摘できる。造り出しの下半傾斜面には，拳大〜人頭大の礫が葺かれており，元来は上縁部近くまで葺かれていたものが，転落したと考えられる。なお，葺石は，造り出し部の裾にていねいに葺かれ，墳丘裾には，葺かれていなかった可能性がある。

c．周濠　周濠の外側肩部のラインは，造り出し部分ではやや不整形になるが，基本的には墳丘裾に沿っており，円形を呈している。周濠は，外堤から幅1mの間は，検出面下より30cmと浅く掘り込まれており，テラス状の広がりがある。造り出し部では裾部とテラスの肩部が一致しており，祭壇としての造り出しを意識してテラスを掘り残したと考えられる。このテラス内側肩部から墳丘裾の間は，さらに深く掘り込まれ，4mを測る。周濠は，土層断面の観察から，堆積時期を3期に大別できる。最下層は，濁暗茶褐色粘土を主体としており，基本的に埴輪等の遺物は含まないが，墳丘側では，転落した葺石が点在している。この層は，墳丘側で深く堆積しており，古墳築造後に盛土が流れ込んだと解釈できる。中間層は，黒褐色粘土を主体としている。出土した埴輪のほとんどが，この層中からのものである。埴輪の出土地点は，概して周濠最深部とテラス側肩部に分けられ，後述する外堤にも埴輪列があったと考えられる。最上層には，埴輪とともに奈良時代の遺物が入っており，奈良時代の造成に伴って周濠が埋め戻されたと考えられる。

d．外堤　周濠の輪郭が，造り出しの影響で，やや不整形に掘られているのに対して，外堤は，先に述べた7号墳(SD2109)との間で極端に変形している。外堤は，幅0.4m・深さ0.2mの溝によって区画されており，造り出し部分で幅3mを測り，7号墳との間では幅0.9mの規模をもっている。21-3btトレンチでは，全面で溝を検出しているが，30btには溝はなく，削平を受けたと考えられる。外堤は，区画溝によって認識できる程度の高さであったと考えられる。各古墳の聖域区画の概念上，主にこの部分だけが集中的に造られた可能性もある。

⑤30bt

上人ケ平5号墳の北側に設定したトレンチで，5号墳の周濠の一部，8号墳(SD3001)と掘立柱建物跡(SB3002)を検出した。

8号墳(SD3001)　周溝の一部を検出したにすぎず，古墳の規模については，全容は不明である。しかし，周溝の幅が先述した7号墳とほぼ同規模で，主軸線も概ね一致することから，一辺10mの方形墳である可能性が極めて高い。墳丘は，一部を確認したにすぎな

いが，7号墳と同じく残存状況は良好で，埋葬主体部の存在も充分考えられる。墳丘の盛土内には，黒褐色土(炭層)は含まれておらず，この点から考えれば，盛土前に周辺一帯の伐採・燃焼は，7号墳のように行われなかったと言えよう。周溝は，幅3.2m・深さ1.0mである。溝内堆積状況は，他の古墳と同じく，最下層に濁青灰色粘土，中間層に埴輪を多く含む黒褐色粘土，最上層に奈良時代の遺物を包含する濁黄褐色土が見られる。

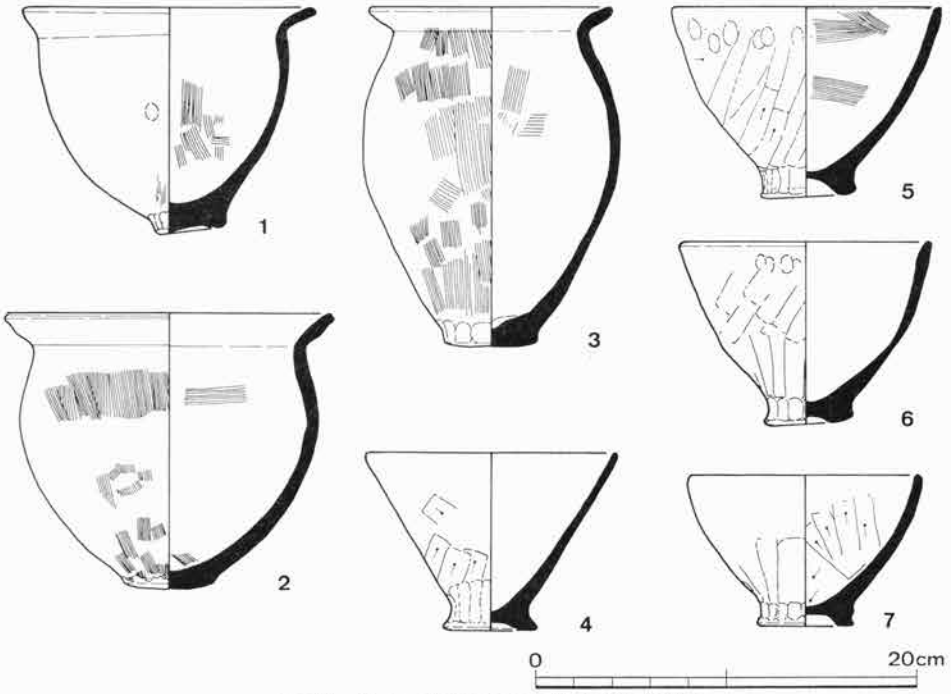
掘立柱建物跡(SB3002)　建物跡は，真南北から約30°東へ振り，1間×3間の小規模なものである。可能性としては北西方向へ1間分広がる余地がある。柱穴検出面から，奈良時代の瓦が出土しているが，他の建物跡は，南北方向に主軸方向をとることから，時期設定については，今後の課題である。

3．遺　　物

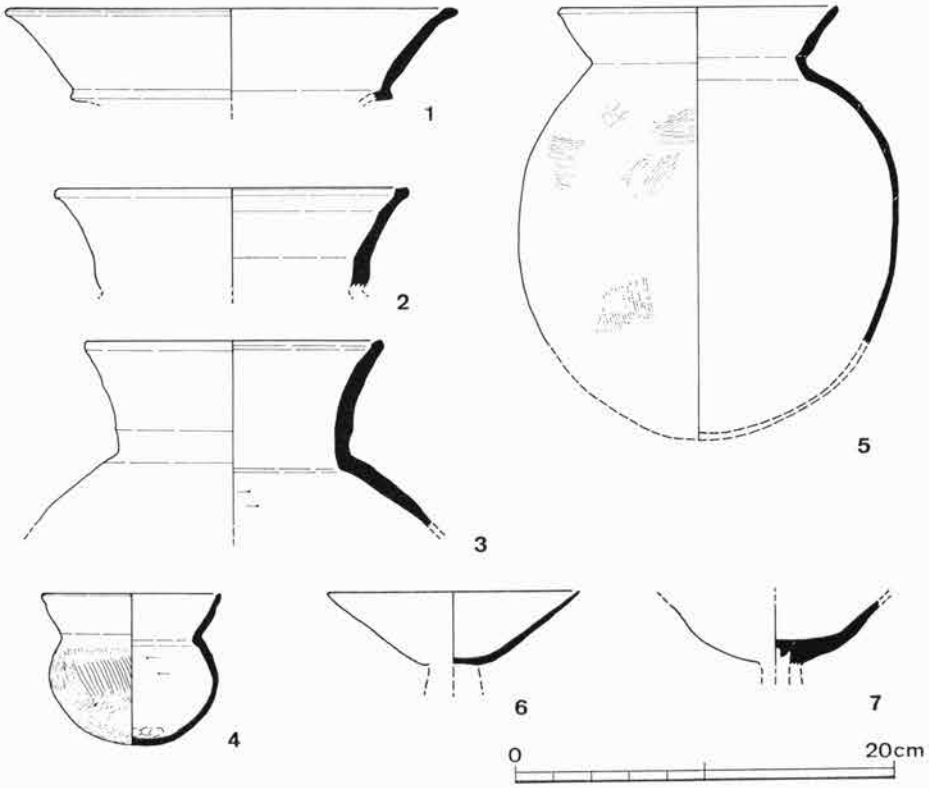
①竪穴式住居跡(SH0305)出土遺物(第11図，図版第19)

竪穴式住居跡の床面直上から完形に近い状態で出土したものである。

甕　1は，輪台状の底部から内湾し，あまり肩が張らない胴部をもつ。頸部で屈曲し，口唇部に面をもつ。外面は，一部に縦ハケメが観察でき，底部側面をナデている。2は，平底の底部から内湾し，やや肩の張った胴部をもつ。頸部の屈曲はゆるく，口唇部に面をもっている。外面は縦ハケ，内面は横ハケで調整しているが，摩滅のためその範囲につい



第11図　上人ケ平遺跡SH0305出土遺物実測図



第12図　上人ヶ平遺跡SH3620出土遺物実測図

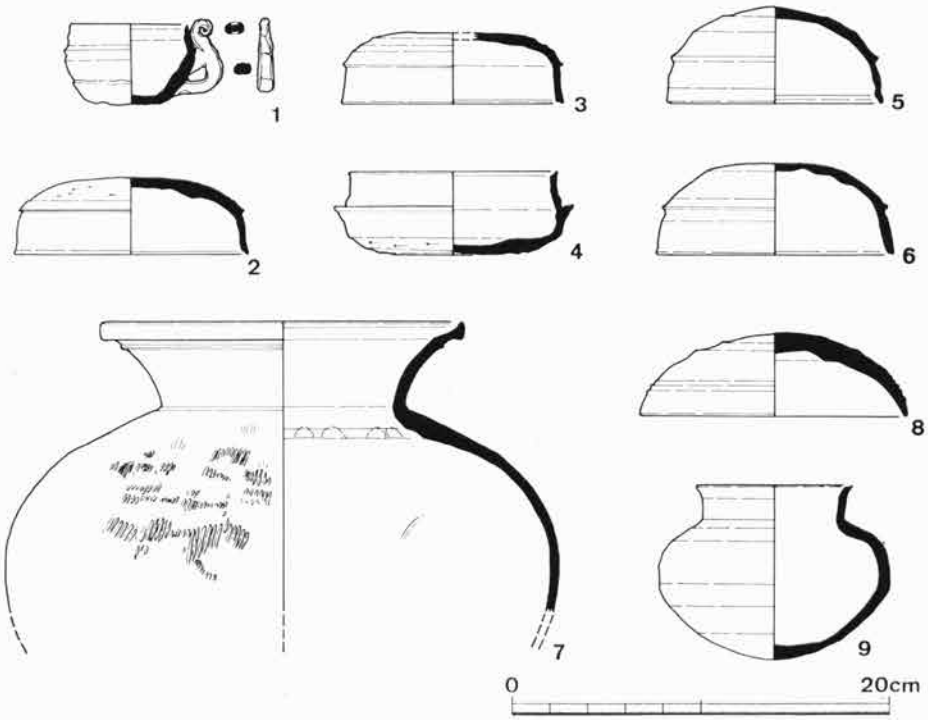
ては不明である。3は，平底の底部から楕円形状の胴部を呈し，器高のほぼ中間で最大径をもつ。頸部は屈曲し，口唇部は丸くおさめる。内外面ともにハケメで調整している。特に，底部側面のナデは顕著である。

鉢　4は，輪台状の底部から，直線的に開く胴部をもち，口唇部を丸くおさめている。外面は，下方へのヘラケズリの後，ナデ調整している。底部側面に縦方向のナデが明瞭に残る。5・6・7は，輪台状の底部から内湾する胴部をもつ。口唇部は，5が面をもち，6・7は丸くおさめている。外面はヘラケズリで整形し，ナデ調整をしている。内面は，5がハケメ，7がヘラケズリ整形後，ナデ調整している。これらの土器の共通点は，底部側面に明瞭なナデが残ることで，同一製作者によると考えられる。時期は，ハケメ調整やヘラケズリ，底部の形態から畿内第Ⅴ様式後半に比定できる。

②竪穴式住居跡(SH3620)出土遺物(第12図，図版第20)

竪穴式住居跡の床面直上で出土したものである。

壺　1は，二重口縁の壺で外湾する頸部から若干肥厚する口唇部に至る。2は，外湾する頸部と肥厚する口唇部をもち，頸部内面には稜線が入っている。3は，頸部で屈曲し，



第13図　上人ケ平遺跡　須恵器実測図
（1：7号墳，2～7：6号墳，8：12号墳，9：9号墳）

直立したのちやや外湾し，内面肥厚する口唇部をもっている。外面は，残存が悪く観察できないが，内面は，横方向のヘラケズリが見られる。

小型丸底壺　4は，丸底の底部から球体を呈する胴部をもち，頸部で鋭く屈曲し，内湾する口縁部をもつ。胴部外面は，1次調整で細い縦ハケを施し，2次的な粗いハケメがある。内面は，横方向のヘラケズリが全面に見られ，底部には指頭圧痕が残存している。

甕　5は，底部を欠いているが，胴張りの球胴を呈している。頸部で屈曲し，外湾気味の口縁部をもつ。口唇部には面を持ち，胴部外面はハケメ調整を施し，内面は，一部ヘラケズリが観察できる。

高杯　6は，脚部を欠いている。杯部底面は平らで，直線的にのびる口縁部をもつ。残存状態が悪く，調整は不明である。7は，6に比べて器壁が厚く，杯底部も広く，外反度が鋭い。杯部と脚部には尖頭状の孔があり，乾燥時に付いたと考えられる。これらの土器は，布留式併行期の中でも古い段階のものである。

③古墳出土遺物（土器）（第13図，図版第20）

古墳出土土器には，土師器・須恵器があるが，各古墳の年代設定の根拠になり得る資料

を中心に記述する。

把手付椀　1は，平底の底部から外反し肩部で屈曲し外傾する口縁部をもつ。肩部に稜が入る。把手は，椀の底部・肩部・口縁部の3か所ではりつけ，上端は螺旋状に巻き込んでいる。

杯蓋　2は，平らな天井部から下垂し内傾する口縁部をもつ。肩部の稜線は明瞭で，天井部をヘラケズリで成形する。3は，杯身4とセットである。形態的特徴は，3と同じであるが，稜線の突出率は高い。5は，丸い天井部をもち，内傾する肩部と尖頭状の口唇部をもつ。肩部稜線は突出するが，天井部と口縁部の屈曲はない。6は，丸い天井部で肩部で若干屈曲する。8は，丸い天井部から内傾し，尖頭状の口唇部をもつ。肩部稜はない。

杯身　4は，平らな底部をもち，直立し内傾する口縁部をもつ。受け部は水平にのびる。

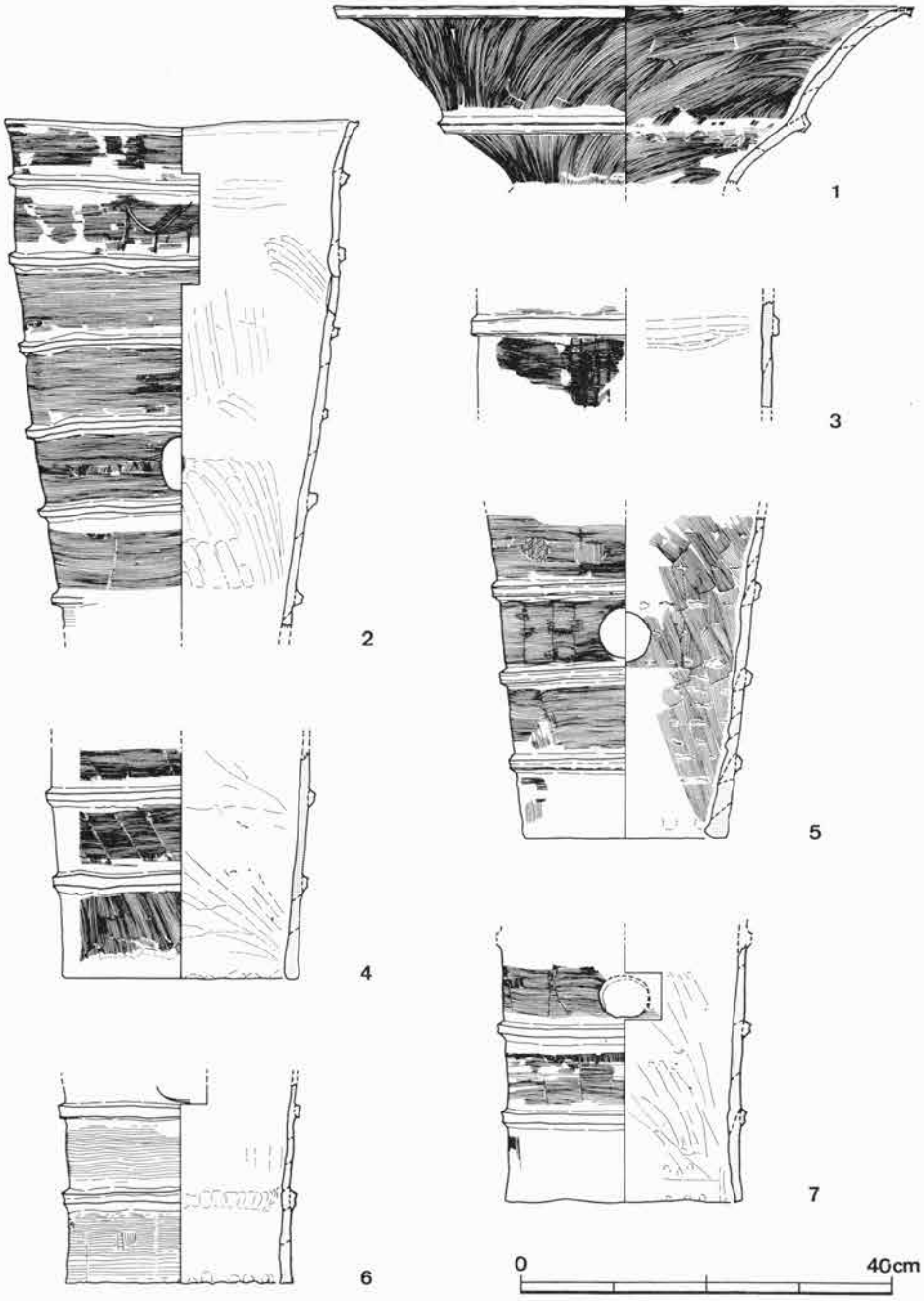
甕　7は，肩の張った球状を呈し，頸部で屈曲し，外反し肥厚する口縁部をもつ。口縁端部下に稜が入る。外面は平行タタキ，内面は，青海波文をナデ消している。

壺　9は，肩が張り，頸部で屈曲し，直立する口縁部をもつ。端部は外反する。1・3・4はTK208前後，また，2・5・6・7は，TK 47前後に比定できる資料である。(注2) 8・9は，TK 10前後に比定でき，この時期で造墓行為は終末期をむかえる。把手付椀は，初期須恵器の可能性がある。

④古墳出土遺物(埴輪)(第14～18図，図版第21・22)

朝顔形埴輪　第14図1は，口径63cmを測る。円筒部との接合部で鋭く外湾・屈曲し，突帯を有する擬口縁で，若干屈曲する。内外面とも粗いハケメで調整する。擬口縁内面の凹部については，ハケメが入らない。他の朝顔形埴輪の口縁部径は37cm前後であり，群を抜いて大型の埴輪と言える。この資料が出土した5号墳からは，口径35cm前後の埴輪もあることから，埴輪樹立の基準か，祭場標式として樹立された可能性がある。なお，円筒部分の破片も出土しているが，全体の形状や大きさは不明である。第16図3は，直立する円筒部から頸部で屈曲し，比較的緩く外反する上部をもつ。頸部直上に突帯を1条有し，内外面とも縦ハケで調整し，上端部は方形に処理している。頸部には1条の突帯がめぐり，円筒部には3段分の突帯が残存している。突帯の断面形態は，台形で突出率も低い。外面はB種横ハケ，内面はナデで調整している。円形の透かし孔は，頸部の突帯間から2段目と4段目に穿たれている。同4は，上部のみの残存で，焼成温度過熱のため著しく歪んでいる。外面は縦ハケ，内面は基本的には横ハケで調整している。上端部はつまみ上げで処理している。

円筒埴輪　第14図2は，口径38.4cm・残存器高55.2cmを測る大型の円筒埴輪である。残存する部分で突帯は6段観察できる。突帯は，各段により若干の差異があるものの，断

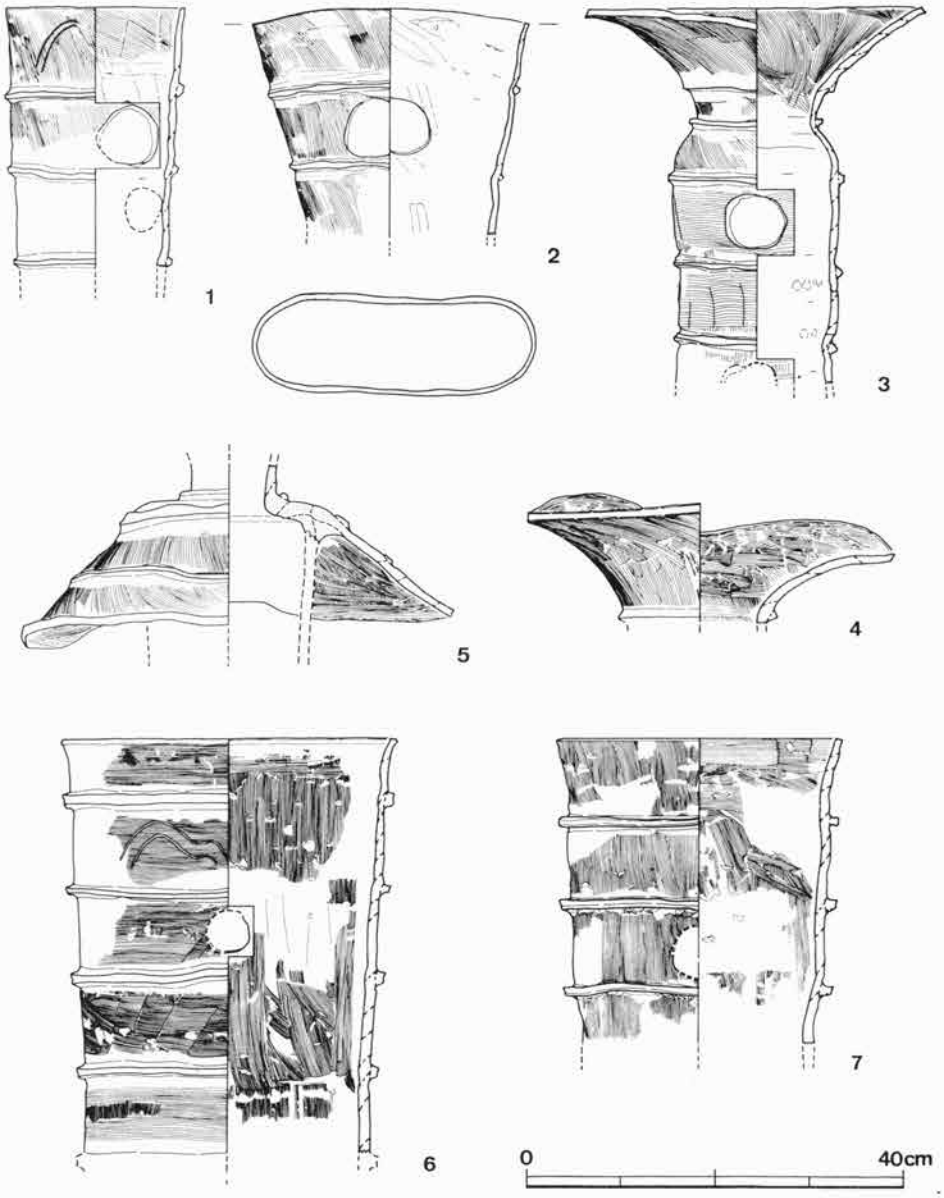


第14図　上人ケ平遺跡　埴輪実測図 (1)（1～7：5号墳）

面形態は台形を呈している。外面調整は，1次調整を縦ハケで行い，2次調整は，器表面でハケの原体を停止させるB種横ハケである。内面は，粘土接合痕を残さないほどていねいにナデている。円形透かし孔は，上縁から4～5段の突帯間に施されている。1～2段

の突帯間には，複雑な線刻が施されている。線刻の構図から「舟」ないし「家屋」を表現しているとも考えられる。同３は，上縁部と基底部が欠損しているが，突帯断面が扁平な台形を呈し，２次調整の横ハケが観察できる。突帯直下には，縦11条・横４条の線刻が施されている。縦横の線刻は，切り合いをもち，網代状線刻とでも呼称すべきものである。同４は，円筒埴輪の基底部で，最下段と２段目の突帯が残存するにすぎない。突帯の断面形態は，扁平な台形を呈し，上方を若干凹状に処理している。外面は，最下段が縦方向のハケで，２段目が原体を停止しながら行うＢ種横ハケである。最下段は，１次調整のみで２段以上は２次調整を行っている。一方，内面は，粘土の接合痕が残るものの，比較的ていねいなナデで調整している。基底部は，埴輪内面を肥厚させ入念に押さえ込んでいる。同５は，最下部の突帯から３段が残存する円筒埴輪である。突帯の断面形態は，台形を呈しており，突出度は低い。外面の調整は，１次調整が縦ハケであり，２次調整がＢ種横ハケである。２次調整は，突帯と筒部接合稜まで及んでいる。内面は，接合痕が残るものの，ていねいな斜めハケで調整している。円形の透かし孔は，最下段から３段目に２か所ある。基底部は，端部内面に粘土を貼り付け，押さえ込んでおり，ハケメ調整はしていない。同６は，基底部から２段目まで残存している。突帯の断面形態は，扁平な長方形を呈している。外面は１次調整の縦ハケの後，２次調整のＢ種横ハケを施している。内面は，基本的にはナデ調整であるが，突帯及び基底部には明瞭な指頭圧痕が残っている。円形の透かし孔は，基底部から３段目にある。同７は，最下段の突帯から３段分が残存しており，突帯の断面形態は，扁平な台形を呈している。外面は，１次調整を縦ハケ，２次調整をＢ種横ハケで調整している。内面はナデ調整を施している。円形の透かし孔は，３段目に穿たれており，基底部の調整は，指頭圧痕が観察できる。

第15図１は，上縁部から３段目の突帯まで残存するもので，円筒部は，基部から上縁にかけてほとんど広がらない形態である。突帯の断面形態は，突出率の高い台形を呈している。外面は１次調整の縦ハケのみ施しており，２次調整作業を省略している。一方，内面は，原体を停止させる右上がりの斜めハケで調整しているが，円筒部下半は，ナデ消しを行っている。円形透かし孔は，上縁部突帯下に穿たれており，最上部には２本の平行線刻が入る。同２は，上縁部から３段目の突帯間が残存しているもので，焼成温度過熱のため円筒が極端な楕円形を呈している。突帯の断面形態は，突出率の低い台形を呈している。外面は，１次調整の縦ハケのみを施し，２次調整は行っていない。内面は，粘土接合痕が残らず，ナデ調整である。円形透かし孔は，上縁から２段目突帯間に穿っている。同６は，基底部から直立する円筒部をもち，上縁部で外反する。上縁部から５段分の突帯間が残存している。突帯の断面形態は，突出率の高い台形を呈しており，ていねいにナデ形成して



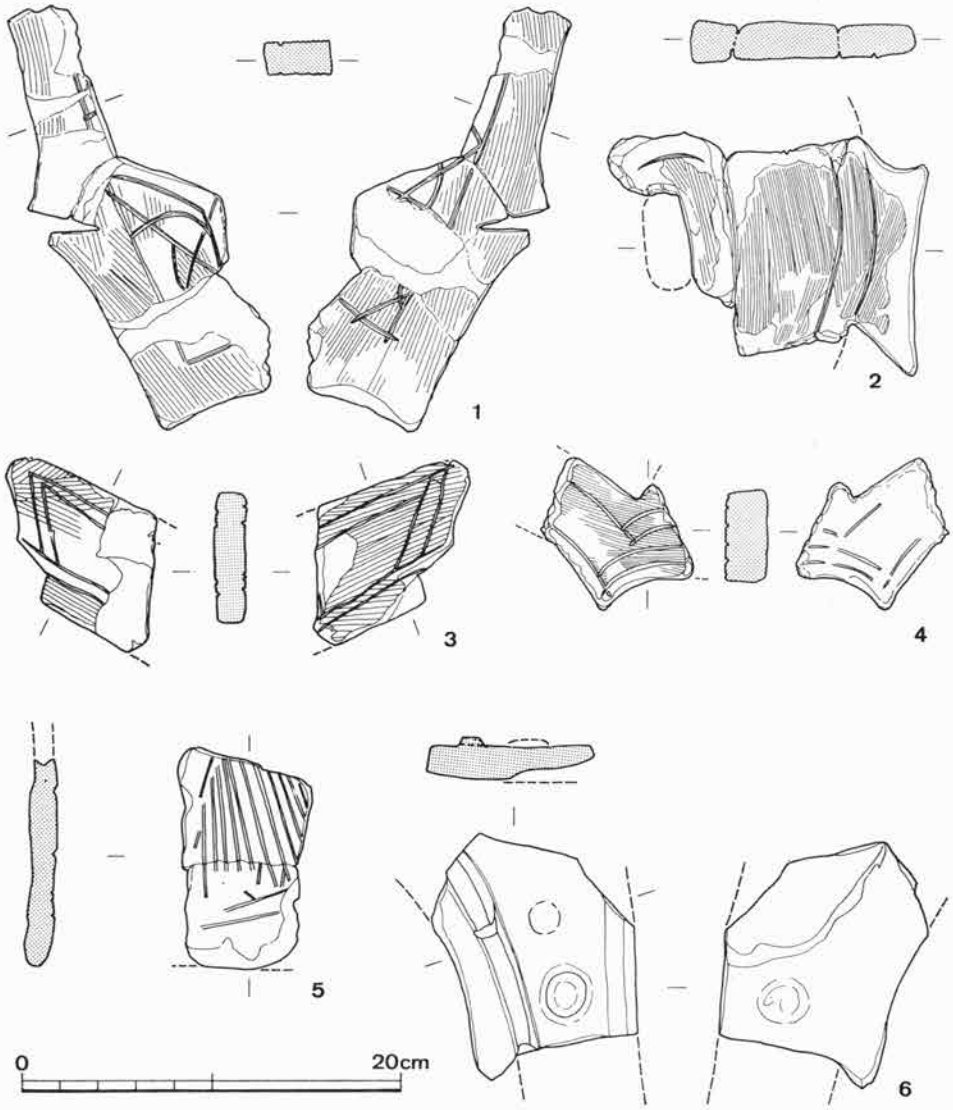
第15図　上人ケ平遺跡　埴輪実測図 (2)
（1～5：9号墳，6・7：8号墳）

いる。外面は，1次調整が縦ハケ，2次調整が横ハケである。一方，内面は，基本的にはハケメ調整しているが，一部についてはナデで調整している。2段目の突帯間には「〽」形を2つ重ねた線刻がある。極めて抽象的な表現であり，何を表わすのかは不明である。同7は，上縁部から3段目までの突帯間が残存している。突帯の断面形態は正方形に近く，3段目の突帯は上縁部をつまみ出しており，突出率も高い。外面は，精緻な縦ハケで調整

しているが，須恵質埴輪であることから，1次調整の縦ハケで最終調整したと考えられる。内面は，上縁部については，断続的な横ハケで，下半は，基本的には右下がりのハケメで調整している。円形の透かし孔は，上縁部から3段目に穿たれている。なお，上端部は，方形におさめており，同一古墳から出土した6と酷似する処理法であるが，外面の調整技法に相違点があるのは，時期差を表現するのではなく，調整の差と解釈すべきであろう。

蓋形埴輪　第15図5は，笠部と基台が残存している。笠部外面には，吊り部接合部と笠部に3条の突帯がめぐっている。調整は，縦ハケで行っており，内面は斜めハケで行っている。端部は，方形に処理している。蓋形埴輪には，十字形の立ち飾りを持つものと，本例のように，吊り部を有するものに分類でき，各々の樹立地を明らかにできれば，更に形態の意義が明らかになろう。

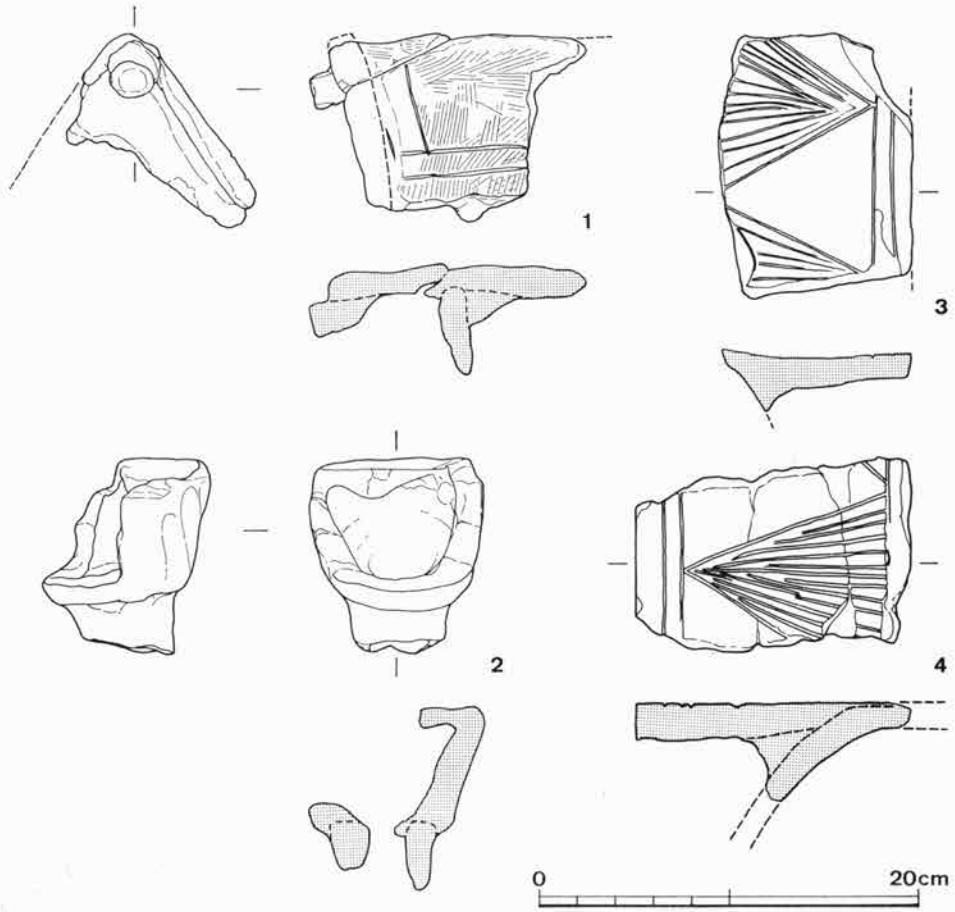
第16図1は，十字形立ち飾りの一部で，残存高は22cmを測る。立ち飾りの外縁は，ほぼ完存に近い状態で残存しており，軸部から外湾し中央部にはヘラにより切り込みが入る。切り込み上部は直上で突出し，屈曲した後直線的に外方へのびる。ヘラにより外縁を切り出しており，切痕はシャープである。一方，内縁は，粘土接合痕での剝離が目立ち，旧状を知ることはできない。立ち飾りの器表面は，全体的に外縁のラインに沿ったハケメが施されており，精緻である。表裏面の線刻は，基本的には同じ文様形態をとる。まず，外方へ直線的な線を描き，それと直交する短い線刻がある。縦横の区画内に直線・弧文を複数線刻しており，規則性に乏しい。元来，立ち飾り表裏面は，規則的で，精緻な文様構成が主流であるが，本資料の場合は，退化した文様と解釈してよい。同2は，外縁の一部と内縁近くの方形の切り込みがわかるのみである。外縁は，ヘラ切りによって成形されているが，粗い端面である。また，切り込み部は，外縁に比較して直接的でシャープである。一方，内縁近くの方形の切り込みは，隅丸を呈し粗いものである。表裏面は，1に比較して面が広いために数回の切り合いをもってハケメ調整されている。表裏面には，円形を描く2本の円形線刻が観察できる。同3は，立ち飾りの最上部分で上縁，外縁，下縁がシャープなヘラケズリによって成形されている。特に外縁は，下縁端で直交し，外方へのび段をもっている。表裏面とも，軸部方向へのハケが数回にわたり行われている。また，線刻は，上縁，外縁，下縁に沿って行われており，基本的に2本が単位となっている。下方線刻が直線的に描かれ，外・上方の線刻は，一本の線刻である。同4の外縁は，曲線に切られる下縁と直線的な外縁からなる。一方，内縁は外縁に沿うように切り込まれている。表裏面は，2，3回のハケで調整している。線刻は，基本的に外縁と内縁に平行して描かれ，二重の線刻を基本としている。同5は，下縁の一部にヘラ削り痕が残るにすぎない。表裏面とも縦方向の直線を少し角度を変えながら線刻しており，それらとほぼ直交する2，



第16図　上人ケ平遺跡　埴輪実測図 (3)
（1・3：9号墳，2・4～6：5号墳）

3本の線刻で縦方向の線刻を終わらせている。器面には，部分的にハケメが残存しているが，摩滅のため正確に観察できない。しかし，線刻文の残存から考えるとハケメ調整後にナデ調整を施している可能性もある。なお，立ち飾りにするには複雑な線刻であり，盾形埴輪の一部の可能性もある。第17図2は，吊り部で，上面中央部は，ていねいに円形の穿孔が施されている。先述した蓋形埴輪とは焼成など差異があるが，基本的な調整は変わらないと言える。

家形埴輪　第17図1は，家形埴輪の天井部である。残存状態は悪く，全体の形状は不明

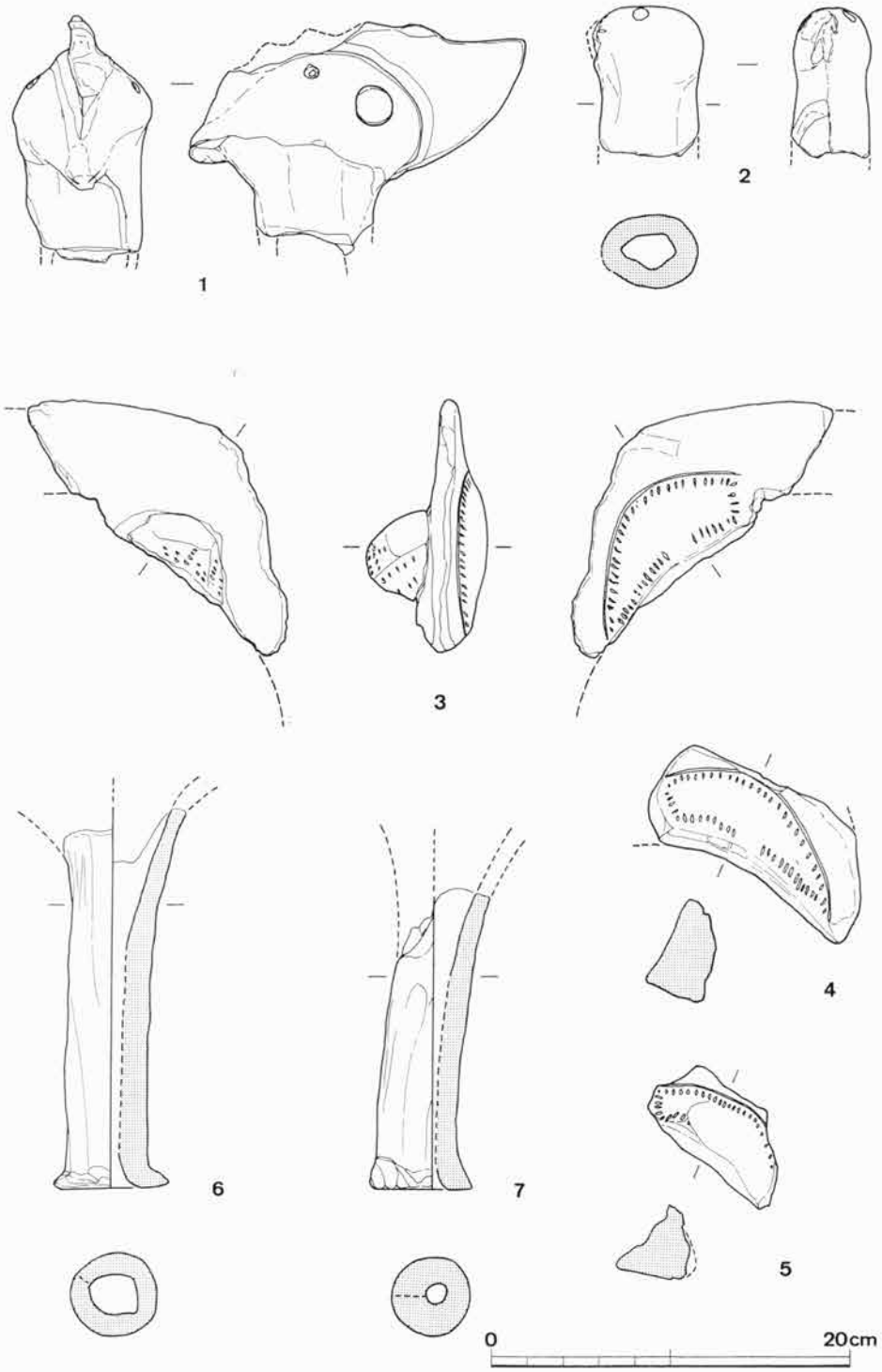


第17図　上人ヶ平遺跡　埴輪実測図 (4)
（1：9号墳，2～4：5号墳）

であるが，切妻造りの構造をもつ。棟木は，断面形態が円形を呈しており，屋根との接合には，粘土塊を充填し補強している。破風板は剝離しており，その形状については不明であるが，剝離痕から幅2cmを測り，比較的大きいものを想定できる。天井部には網代を表現するように，粗いハケメが縦横につく。屋根先端部分には２条の線刻が施されている。他に，屋根・壁などの部材も出土しており，複数個体樹立されたと考えられる。

盾形埴輪　第17図３は，三角形の線刻内に放射状の線刻が入る。これらが盾形埴輪の端部を飾る文様の一単位となり，最上から下端まで連続して線刻されたと考えられる。それらの文様帯は，外縁に２本の線刻で区画されている。同４は，基本的には３と同じ形状であり，同一個体の可能性が高い。なお，盾を表現する面は，基部の円筒埴輪の形態に規制されず，平面的につくられており，盾形埴輪の編年研究に重要な資料となる。

鶏形埴輪　第18図１は，頭部上端の一部を欠いているが，後頭部・目部は比較的残存状



第18図　上人ケ平遺跡　埴輪実測図 (5)
（1～5：5号墳，6・7：6号墳）

態がよい。頭部は，ていねいにナデており，下半部は，ナデ痕が顕著に残っている。なお，頭部は中空に仕上げられている。

鳥形埴輪　第18図２は，円頭部からほぼ直線的に垂下する頸部をもつ。口唇部は欠損しているものの，目部は残存しており，全体的にていねいに仕上げられている。比較的厚い中空体を呈している。

馬形埴輪　第18図３は，馬形埴輪の鞍部である。上部の平坦面から屈曲する端部をもっている。鞍部分の表現はヘラ先端部を刺突することにより行っており，表裏ともていねいに刺突している。同４・５は，細片資料のために充分観察できないが，胎土，焼成，色調が３と酷似する点が多くみとめられ，同一の馬形埴輪と考えられる。同６・７は中空の円筒状を呈しており，基底部は平坦な面をもち外方へ肥厚させている。全体にナデ痕が顕著に残存し，焼成は，３～５の鞍部同様，良好と言える。

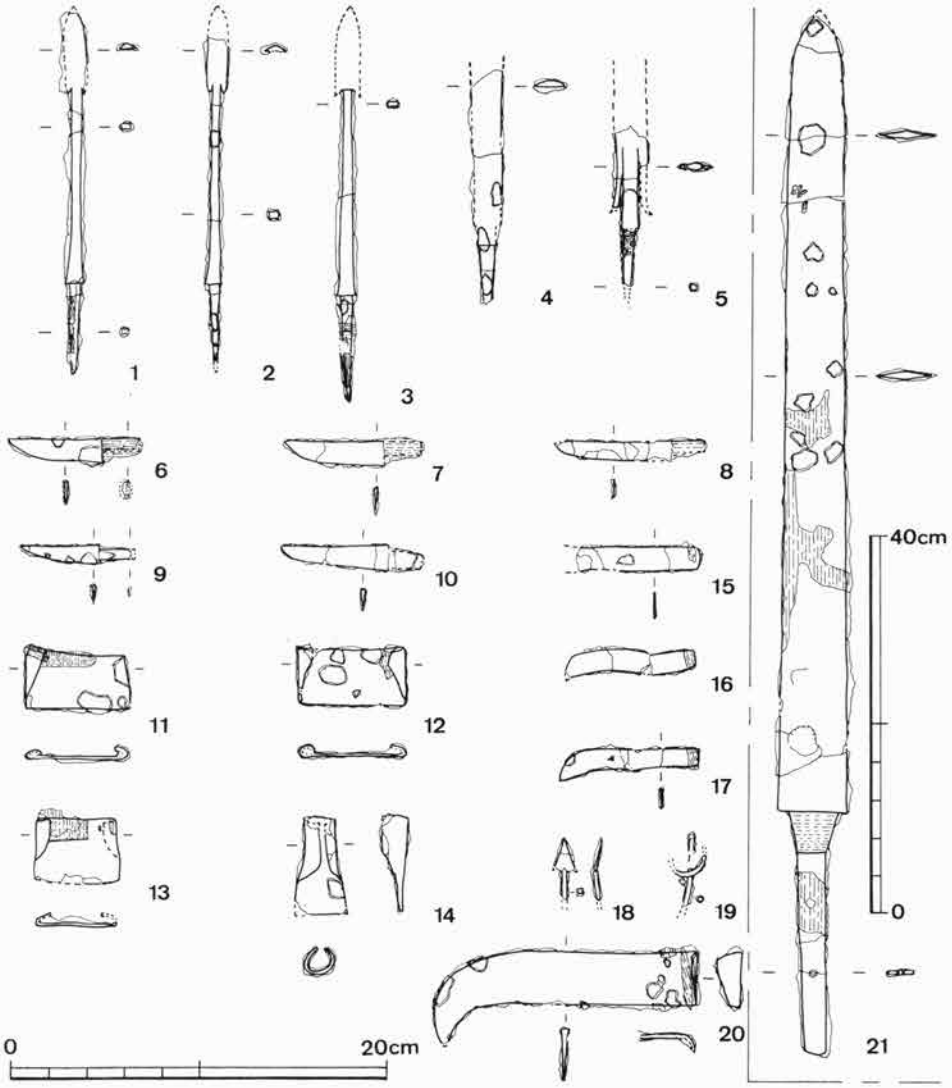
器種不明埴輪片　第16図６は，外縁と内縁がヘラ切りにより形成されており，特に外縁は弧状を呈している。器面にはハケメ調整痕が観察できないが，残存状態を考えると，若干の調整があったと考えられる。一面には，円形浮文があり，その外方には外縁に平行するように断面台形の突帯がはりつけられている。また，他面には，円形浮文こそあれ，突帯はなく，表裏での装飾性に差違のあったことが認められる。

以上の埴輪は，出土量のごくわずかであり，これらから全古墳の年代観を表現することは厳密にはできない。ただ，ここでは各古墳出土の代表的な埴輪を図示することを目的としているので，ある程度の年代観はわかると考え，以下にその概観を記したい。

円筒埴輪は，上人ケ平５号墳の軟質のものと，他の方形墳の須恵質のものに分類できる。軟質の埴輪は，基本的に第１次調整を縦ハケで行い，第２次調整を横ハケで行っている。特に横ハケは，工具を器面上で静止(回転を中止)した，いわゆるＢ種横ハケである。内面調整は，斜ハケかナデで行っており，横・縦ハケが確認できる。突帯の形状は，断面台形を呈し，透かし孔は円形である。一方，方形墳群出土の埴輪は，第１次調整を縦ハケで行い，第２次調整は施していない。内面は，部分的には斜ハケで調整しているが，ナデによる調整が多く見られる。かつての上人ケ平５号墳の調査報告では，黒斑を有する円筒埴輪の出土が記されているが，今年度の調査では検出しておらず，広義の年代設定は，黒斑をもたないと解釈してよい。これらの観察にもとづき，両者の新旧関係を考えた場合，上人ケ平５号墳出土埴輪が先行し，他の方形墳出土円筒埴輪が後出すると考えられる。なお，後出する方形墳群の全体にあっても，突帯の形態や調整技法等から前後関係が見られる。

（小池　寛）

⑤７号墳主体部(SX2111)出土鉄器・ガラス製品(第19図，図版第23)



第19図　上人ケ平遺跡7号墳(SX2111)出土鉄器実測図

鉄剣1口・鉄製刀子5本・鉄鏃・鍬先3個・鉄斧1個・鉄鎌1個・ミニチュア鉄鎌3個・用途不明鉄製品2個・ガラス小玉46個が出土した。

鉄剣(21)　棺内右手側で出土した。全長560mm・刀身425mmとやや小ぶりである。刀身の断面は菱形を呈しているが，鎬の有無は不明である。関部は，刃部と茎部との境に5mm程の明確な段差をつける。茎部の関にとりつく台形の部位には繊維質が認められる。

鉄製刀子は棺内から1本，副室から4本出土している。棺内出土のものは9で遺骸の左胸の位置から出土した。残存長60mmで，茎先が欠損している。副室出土の刀子は鍬先や，斧，ミニチュア鎌とともに把手付椀に重なって出土した。6と7の大きさはほぼ同じで，

全長は6が73mm，7が75mm，刃部は6が52mm，7が53mm，片関，平造り，柄部に木質が残存する。8は，両関，平造りで，柄部には柄材が残存する。8は，残存長79mmを測る。形状，木質の付着状態から，刀子と判断した。片関，平造りと思われる。一括して出土しており，編年研究上，重要な資料である。

鉄鏃　平根式2本，尖根式3本に大別できる。平根式は2本とも銹化欠損が著しい。5は，全体の約1/2を欠損しており，柳葉式である。刃部下方両側に35mmの切り込みを入れ下半下端を外反させた腸快をもつ。箆被は，関箆被で箆代には木質，樹皮が残存する。4は，1/3が欠損し，銹化が著しい。全体の形状は先端のほうに最大幅をもつ。柳葉式と思われ，腸快は鈍角の段差で5のような切れ込みは認められなかった。箆被は，関箆被である。尖根式は，棺の下方で先端を下に向け，束になった状態で出土した。頭部の欠失したものがほとんどであるが，完全に復原されるものが1点，頭部先端を欠くものが1点，頸部まで完全に復原できるものが1点である。いずれも長頸箆被柳葉式で，短い腸快をもち，箆被は関箆被である。1の箆代には木質，繊維質が残存し，3には木質，樹皮が残存する。

鋤鍬先　副室から3個出土している。11は縦32mm・刃幅56mm，12は縦29mm・刃幅57mm，13が縦34mm・刃幅42mmである。いずれも厚さ1.5mm程の鉄板の両端を折り曲げたもので，11と12は横：縦＝2：1の横長で，13はほぼ1：1の正方形を呈する。いずれも木質が残存し，木鍬の先端が5〜10mmほど，挿入されていたと考えられる。

鉄斧（14）　副室から1個出土している。鉄板の上部を折り曲げ，袋部を作ったもので，縦52mm・刃幅28mmと極めて小型である。また，袋部には木質が残存する。

鉄鎌（20）　全長140mm・幅30mm，基部の側縁全体を上方に折り曲げ，刃部先端を内側に約90°湾曲させた形態をとる。刃部は湾曲の始まる部位まで直線にのびる。基部には，木質が残存する。

ミニチュア鎌　副室から刀子に混じって3個出土した。16と17がほぼ完形で，全長は，16が70mm，17が74mmを測る。最大幅は16が12mm，17が11mmである。厚さはともに1mmと薄い。17の背は，湾曲が始まる部位まで直線に走り，刃部の中央が「く」の字に突出する。基部には木質が残存するが，折り曲げはない。16は，基部から1/3直線にでたのち外反しつつ，内湾する。基部には木質が残存し，折り曲げはない。15は，先端の湾曲部を欠失していると思われ，残存長67mm・最大幅14mm・厚さ1mmを測り，背は直線である。基部に木質が残存し，折り曲げはない。

用途不明鉄製品　棺内頭部位置より出土した。18は，三角形の底辺に断面が四角形の線材がとりつく形で，一見三角形式の鏃のようである。19は，断面が丸のY字形で，円弧を描く線材に直線の線材の端が接着されている。18・19ともにガラス小玉が出土した範囲に

おさまることから，装身具の残片の可能性がある。

ガラス小玉　棺内頭部位置周辺で合計46個出土した。多くが散らばった状態で出土したが，数個に連なった状態が観察できた。小玉の大きさは，直径が2.2〜2.5mm・厚さ1.5〜2mmで，淡緑色を呈している。（中井英策）

⑥土坑(SK1909)出土遺物(図版第24)

土坑内一括資料には，椀・杯・皿・甕・高杯・甑等の土師器や杯・平瓶・摺鉢等の須恵器の他，瓦質の製品がある。

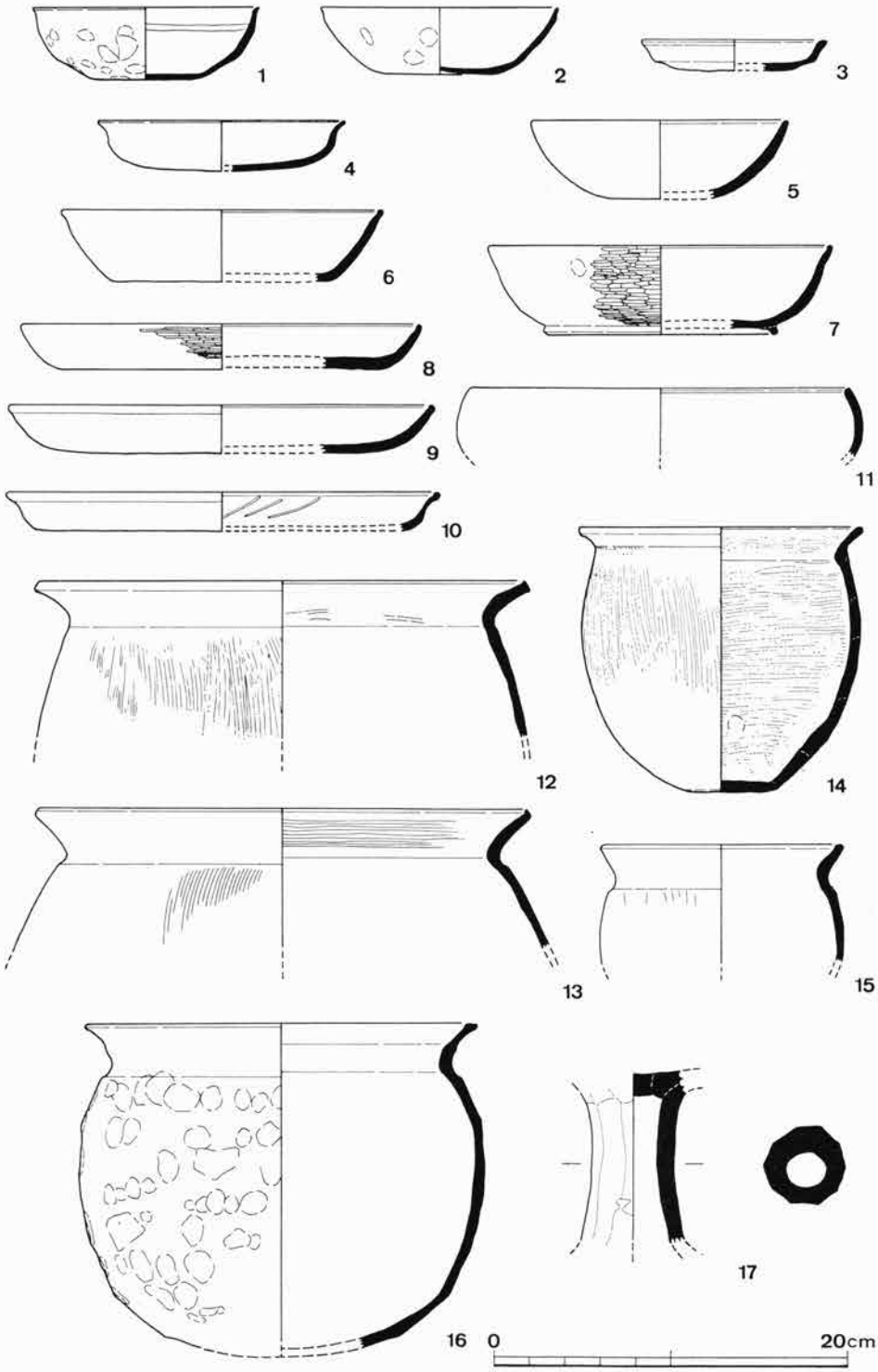
a．土師器(第20・21-16図)

椀　1は，平底の底部からゆるやかに内湾し，外方へのびる形態を呈し，尖頭状の口唇部をもつ。外面は指頭圧痕が残存し，内面には2本の稜が走る。2は，底部が若干あげ底である。外面の指頭圧痕はほとんど観察できない。4は，平らな底部から，直立し鋭く内湾し外方へのびる口唇部をもつ。器表面の残存は不良であるが，部分的に指頭圧痕が観察できる。5は，底部を欠くが，内湾しながら内傾する口唇部をもつ。概して器壁が厚く成形されている。

杯　6は，平らな底部から外反し，肥厚する口唇部をもつ。全体の成形はていねいである。器壁は薄くつくられている。7は，断面形態が方形の高台をもち，平らな底部をもつ。口縁部で内湾度が大きくなり肥厚する口唇部をもつ。外面は，指頭圧痕が残存するものの，ていねいなヘラミガキで調整している。

皿　8は，平らな底部をもち若干内湾し，肥厚する口唇部を有する。底部の器壁は厚く，口縁部は全体的に厚く成形されている。外面は，ていねいなヘラミガキを施している。9は，平らな底部から内湾し，肥厚する口唇部をもつ。口唇部は，内外面ともに肥厚し著しい成形痕が残る。10は，広く平らな底部から鋭く内湾し，外反したのち口唇部にいたる。口唇部は，内外面ともに肥厚し明瞭な稜線が入る。外面の調整は不明であるが，内面には放射状の暗文が入る。

甕　12は，肩の張らない胴部から頸部で屈曲し，外方へのびる口縁部をもつ。口唇部には面をもち，若干内方へつまみ上げている。外面は縦ハケで調整し，内面には一部ハケメが残っている。13は，比較的肩の張る胴部で，頸部で屈曲したのち，外反する口縁部に至る。口唇部には面をもち，内外面に肥厚している。外面にはハケメ，口縁部内面には横ハケが観察できる。14は，平らな底部をもち，内湾する胴部から屈曲する頸部に至る。口縁部は外反し，端部は丸くおさめている。15は，肩の張らない胴部から屈曲したのち大きく外反する口縁部をもつ。口唇部には面をもつ。外面は，縦ハケで調整する。16は，球形の胴部をもち屈曲したのち外反する口縁をもつ。外面には指頭圧痕が顕著に残存している。



第20図　上人ヶ平遺跡SK1909出土遺物実測図 (1)

これらの甕は，肩の張るものと，あまり肩の張らないもの，また，口唇部の形態によって3種に分類することが可能である。

甑(第21図)　16は，底部に焼成前の穿孔がある。内湾する底部と，屈曲して緩やかに内湾しながら立ち上がる胴部に2個の把手をもつ。口唇部には面をもち，若干外方につまみ出している。外面は縦ハケ，内面には指頭圧痕が残り，一部に横ハケが観察できる。

高杯(第20図)　17は，杯部片，脚柱部，脚底部片がそれぞれ出土しているが，接合できない。脚柱部は，10面の面取りが施され，内面はヘラ削りが施されている。脚の高さは比較的短い。

b．須恵器(第21図)

杯蓋　1は，平らな天井部から屈曲し，下方へ肥厚する口唇部をもつ。天井部中央には，宝珠形のつまみがつく。

杯身　3は，平らな底部から外反する杯部をもつ。口唇部は尖頭状に処理されており，外面に稜が入る。4は，3に比べ口径が若干大きい。5は，平らな底部から内湾し，尖頭状の口唇部をもつ。口径は，3・4に比べ大きい。しかし，器壁は薄く全体にていねいなつくりである。6は，高台の断面形態が方形を呈し，平らな底部から外反し，尖頭状の口唇部をもつ。これに類似するものには7・8があるが，口径に若干の差がある。9は，平らな底部から内湾する杯部をもつ。高台は，底部端に付されており，6・7と比較すれば新しい要素である。11は，平らな底部から屈曲し，外反する杯部に至る。断面方形の高台は底部端に付されている。6・7・9に比べて口径も大きく調整もていねいである。

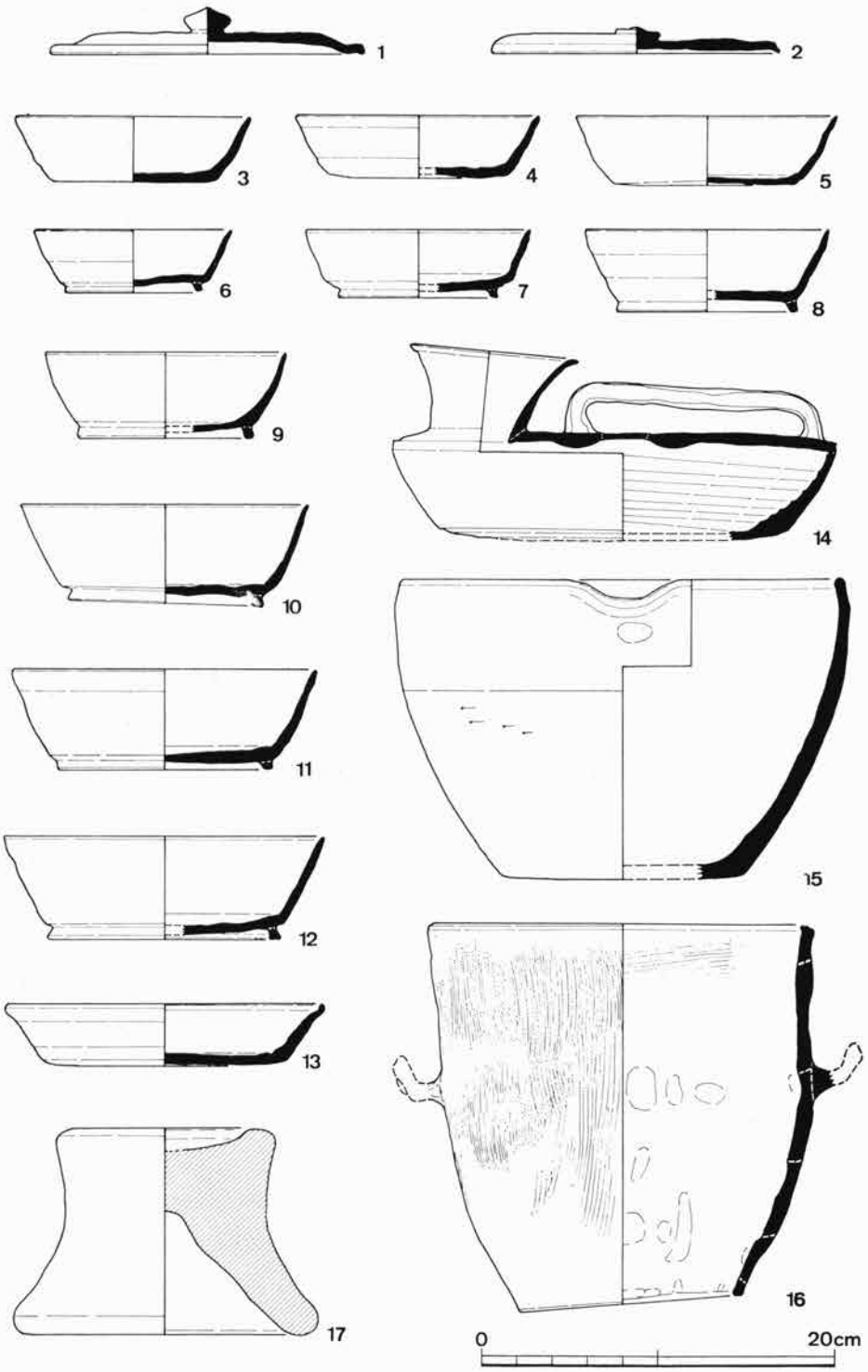
片口鉢　15は，平らな底部から屈曲して内湾しながら立ち上がり，口縁端部を丸くおさめる。外面下半をヘラ削りし，内面はナデ調整する。片口部直下には片口をひねりだす段階での指頭圧痕を留める。

平瓶　14は，扁平な体部と注口部・把手からなる。製作手法は，体部下半をロクロによって引き上げたのち，粘土を継ぎ，中央に径1.4cmの穴が残る段階までをロクロ上で成形し，別に製作した注口部口縁と，手づくねによる把手部を接合した後天井部の穴を粘土円盤によってふさいでいる。

鉄鉢形土器　11は，内傾する口縁に稜が入る。全体にていねいなヘラミガキを行い，綿密な胎土である。

c．不明瓦質土器(第21図17)

下端部で大きく開き，中央やや上位でくびれる。上端は，内面で一段低くなり，器台状を呈する。全体は瓦質になっており，瓦類の焼成に関連する道具と考えられるが，用途は不明である。全体の約1/2が残存する。



第21図　上人ヶ平遺跡SK1909出土遺物実測図 (2)

第22図　上人ケ平遺跡SK0301出土遺物実測図 (1)

⑦土坑(SK0301)出土遺物

土坑出土遺物はすべて土器であり，他の製品は入っていない。土器には，杯身，細頸壺，高杯等の須恵器や甕・椀等の土師器がある。土坑の年代を設定する場合，須恵器群がその根拠となるため，須恵器を中心に記述する。

a．須恵器(第22図)

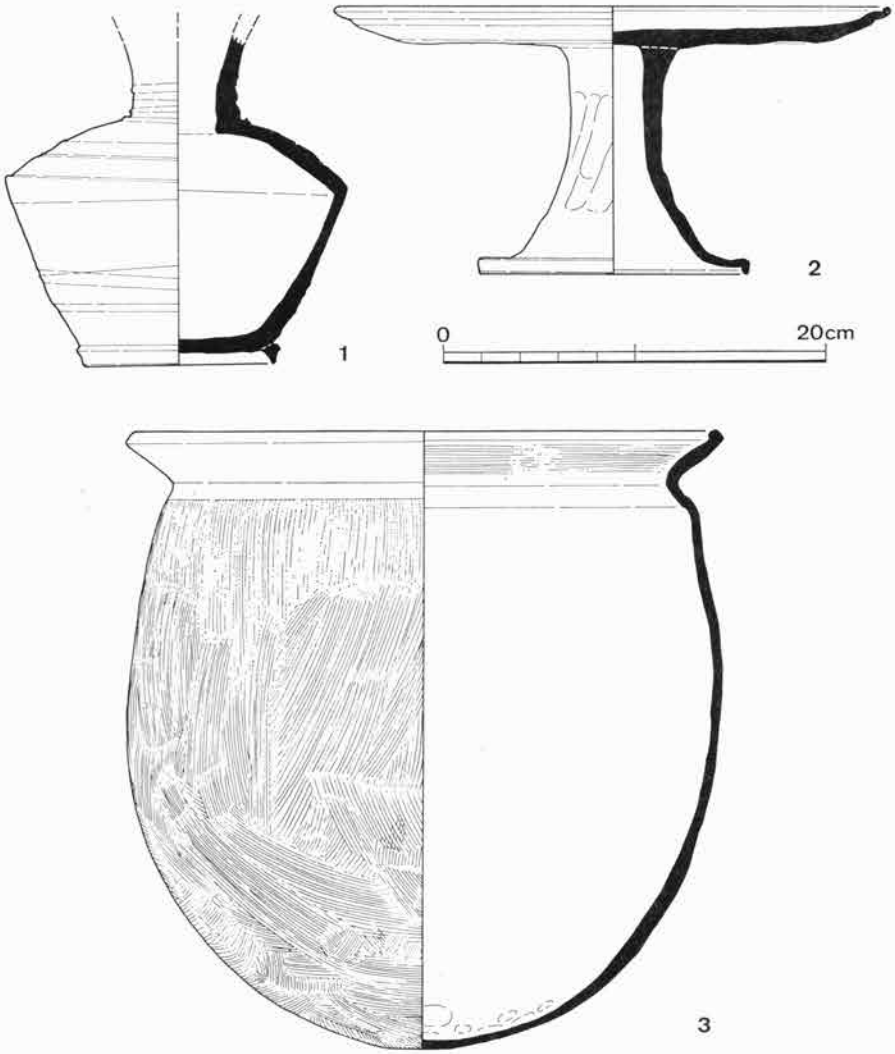
杯身　1は，平らな底部を有し，立ち上がりは短くて内傾している。受け部は，ほぼ水平にのびる。この土坑資料は，基本的には奈良時代の一括資料と認識できるが，本資料は陶色編年のTK47に比定でき，土坑掘り込みの際に，混入したと考えてよい資料である。2は，平らな底部から外反し直線的にのびる口縁部をもつ。口唇部は尖頭状であり，口径以外は4の形態と酷似する。3は，杯部については，2・4とほぼ同じ形態を呈しているが，口唇部が内面にわずかな稜をもつ特徴がある。断面形態が方形を呈している高台が底部端に付く。基本的な形態は，先述した土坑(SK1909)出土資料と同じである。

細頸壺(第23図)　1は，平らな底部から外反する胴下半部をもち，肩の張った胴部を有している。頸部では鋭く屈曲し，徐々に外湾する口縁部をもつ。底部と胴部下半部の接合部分に台形の高台がつく。最終調整は，高台下部をつまみ出している。肩部外面には3条の鋭い稜線が走る。ロクロナデ痕が器外面全体に顕著に残存する。頸部には凹線状の稜線が数条入る。内面はロクロナデである。

高杯(第23図)　2は，外湾しながら開く脚部と平らな杯部からなる。杯部は，平らな杯底部から若干，屈曲する口縁部で上方へ肥厚する口唇部をもつ。脚は，垂下する脚柱部から外反し，底端部下方へ肥厚する。基本的な調整はロクロナデであるが，脚柱部には斜め方向の指頭圧痕が残存している。

b．土師器(第22図)

甕　5は，球体を呈する胴部から頸部で屈曲し外反する口縁部をもつ。口唇部は，上方へつまみあげて肥厚する。外面は胴部上半は縦ハケ，下半は粗い横ハケで調整している。一方，内面は，指頭圧痕が部分的に残り，全体的にていねいな調整である。6は，胴部の形態は5と同じで，壁厚も薄く，焼成も良好である。7は，肩の張らない胴部を有し，頸部で鋭く屈曲し直線的に外反する口縁部をもつ。口唇部内面はつまみ上げて肥厚させている。外面は縦ハケで調整しているが，内面は残存状態が悪く観察できない。8は，7と同じく肩の張らない胴部であるが，頸部の屈曲度は7ほど著しくはない。口縁部は若干内湾し，口唇部は内方に肥厚している。胴部外面は縦ハケ，内面は横ハケで調整する。9は，基本的には7・8と同じであるが，口縁部は外湾し，断面形態が三角形状を呈することが特徴である。口縁部内面の横ハケは顕著に残存している。3(第23図)は，ほぼ完全な状態



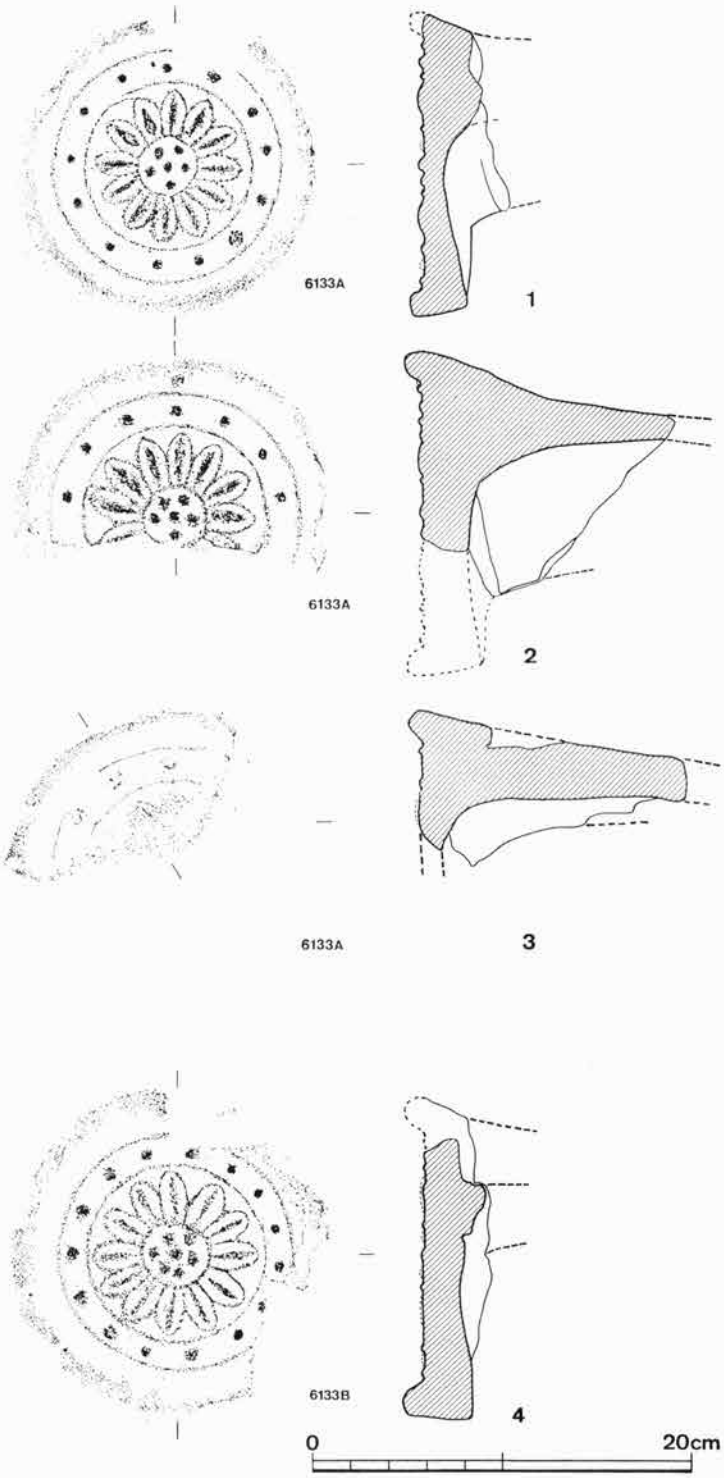
第23図　上人ケ平遺跡SK0301出土遺物実測図 (2)

で残存している。形態的には先述したものと同じであるが，頸部から胴部にかけて屈曲部をもつことが特徴である。外面は，上半が縦ハケ，下半が斜ハケで調整している。

⑧**出土瓦**(図版第25)

軒先瓦

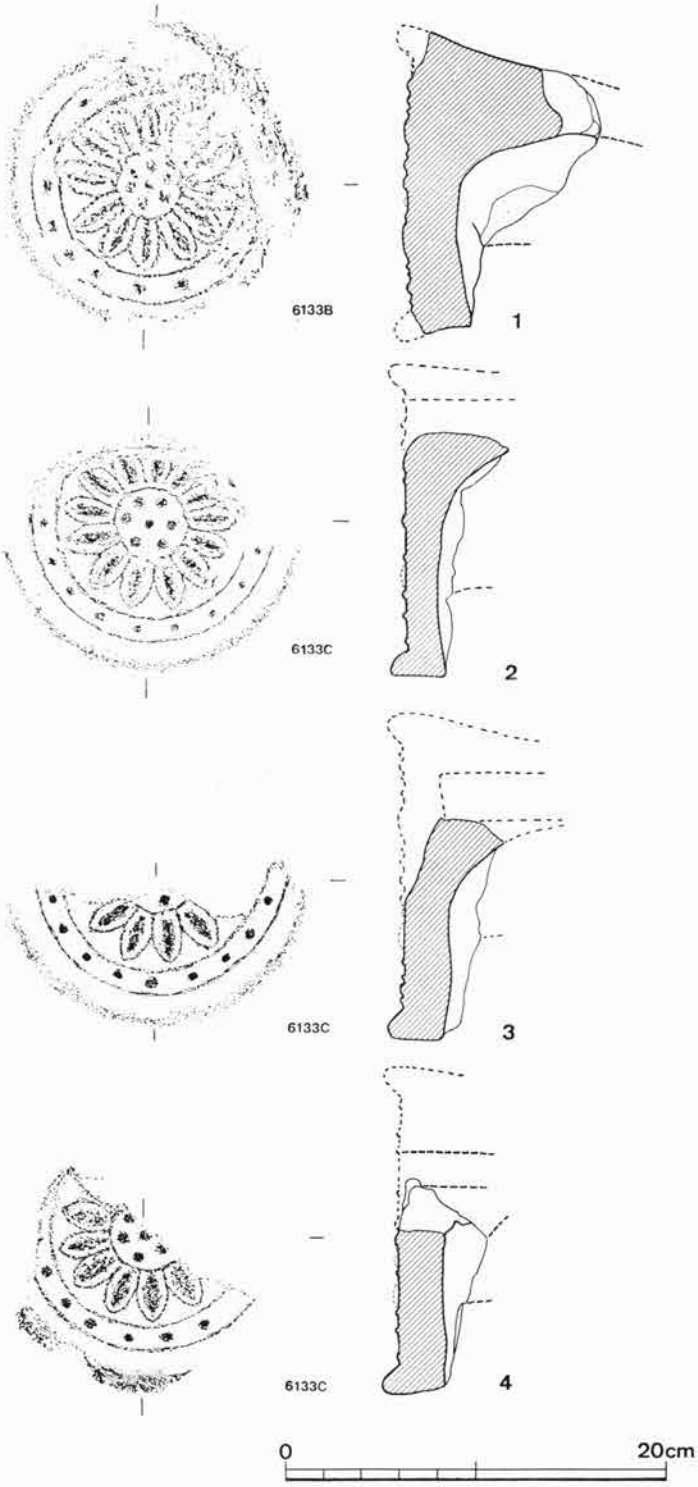
第24図１～３は，直径が16.7～16.8cmを測り，中房径3.4cmを測る。蓮子数は中央に１，周囲に５を配し，弁数は12弁で，外区に13の珠文を配する。これらの文様構成から，平城宮6133A型式と認定できる単弁蓮華文軒丸瓦である。同４は，直径が16cm前後で，中房径は3.6cmを測る。蓮子数は中央に１，周囲に６を配している。弁数は12あり，１・２・３に



第24図　上人ケ平遺跡　軒丸瓦実測図 (1)

比して粗い感がある。一方，外区は内縁に15の珠文をつけ，外縁は無文である。内外区の文様構成から，平城宮6133B型式と認定できる単弁蓮華文軒丸瓦である。

第25図1は，先述した文様構成から平城宮6133型式と考えられる。同2・3・4は，直径が15.9cm前後，中房径は4cm前後を測る。蓮子数は，中央に1，周囲に6を配している。弁数は13あり，精緻な弁を形成している。一方，外区は，内縁に12の珠文文様を付ける。型式は6133A～Cが中心であり，これは，市坂瓦窯出土の型式と一致している。出土点数は比較的少ないものの，調査地に広く散布していることから，製品を同丘陵内に集積させていた可能性がある。なお，SK1909

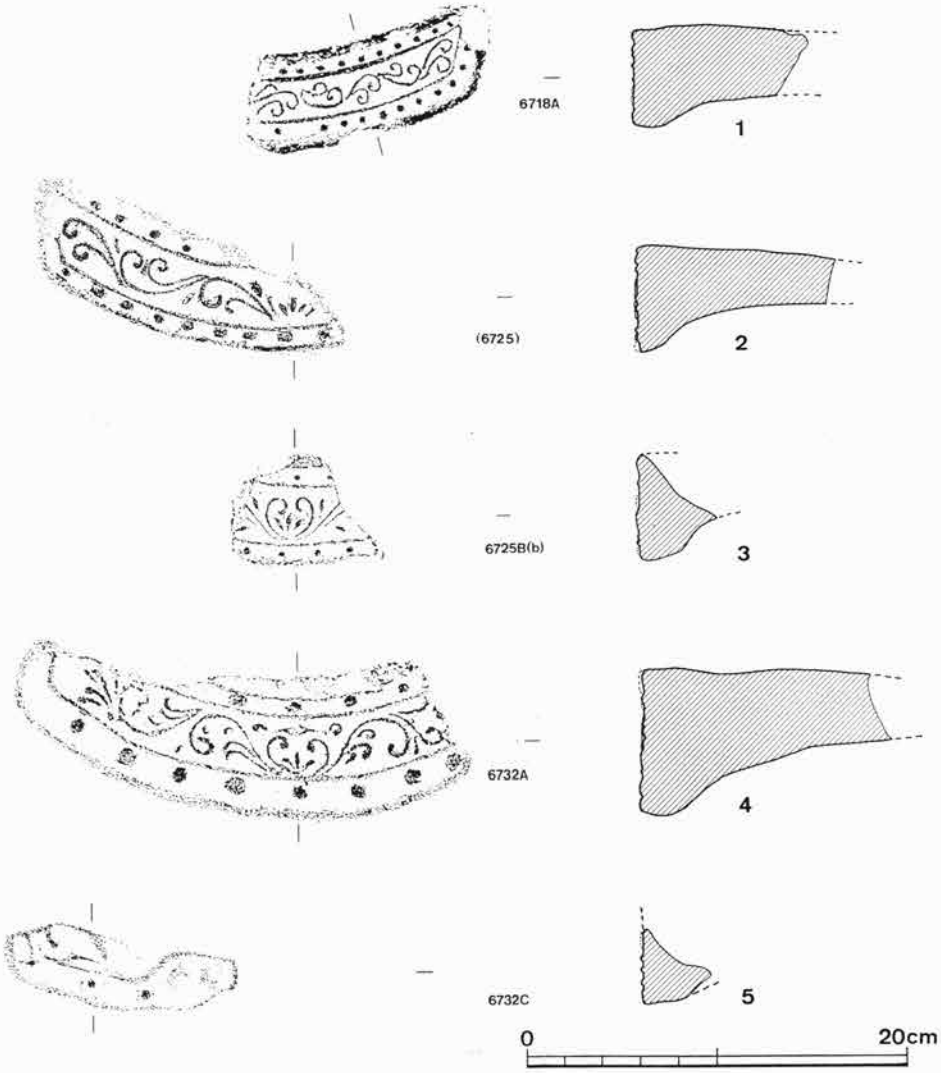


第25図　上人ケ平遺跡　軒丸瓦実測図 (2)

と共伴している軒丸瓦から，土器と瓦との時期を窺うことができる。

軒平瓦(第26図)

1は，全体の形態がわからないが，内区文様が，均整唐草文を主体とし，上外区に20の珠文，下外区に19以上の珠文，脇区に3以上の珠文があると考えられる。文様から，平城宮6718A型式に認定できる。2は，判然としないが，均整唐草文を主体とし，平城宮式の6725の可能性がある。3は，細片資料であるが，2と同じく6725型式と認定できる。4は，やはり均整唐草文を主体とし，上外区に9，下外区に9の珠文がつく可能性が高い。文様から平城宮6732A型式と認定できる。5は，残存がよくないが，平城宮6732C型式と考えて



第26図　上人ケ平遺跡　軒平瓦実測図
（1～3：19bt，3・4：SD2104，5：SK3003）

よい資料である。

4．上人ケ平遺跡の遺構変遷について（第27・28図）

上人ケ平遺跡は，先述したように，古墳が築造された主尾根とそこから派生する二本の支尾根に分けることができ，各時期によって尾根を違えて住居，墳墓を造営している。ここでは，大きく弥生時代，古墳時代，奈良時代にわけ，古墳時代を更に3分類して記述したい。

Ⅰ期（弥生時代後半）　主尾根で検出した竪穴式住居跡だけである。上人ケ平遺跡は，標高45m前後を測る丘陵上に位置しており，平野部との比高は15mを測る。また，平野部や

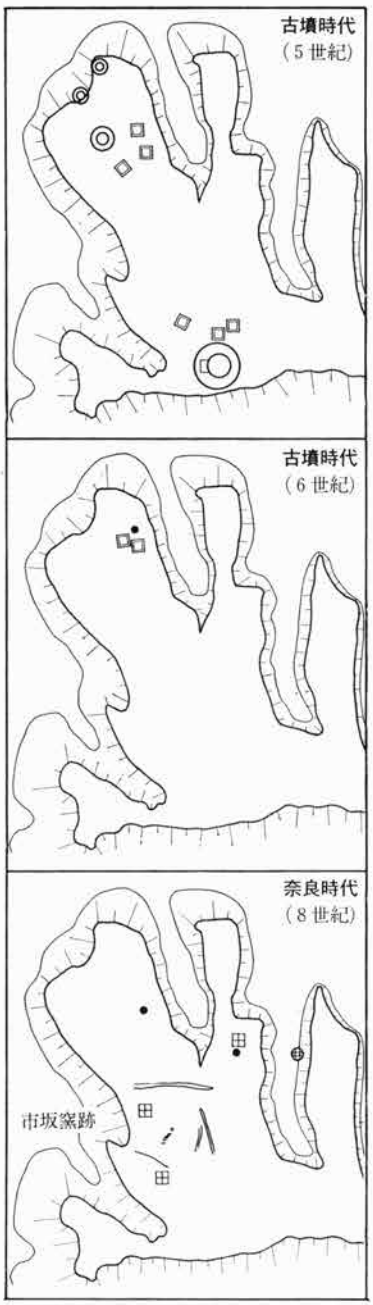
第27図　上人ケ平遺跡遺構変遷図 (1)

木津川対岸を見張らせる地勢にある。特に 3bt で検出した竪穴式住居跡(SH0305)は，最も張りだした丘陵主尾根先端に位置し，高地に位置する住居として認識できる。同丘陵は，国鉄線建設工事で大きく形状が変化しているが，丘陵上に数基の竪穴式住居跡の存在が予想され，高地性集落と考えられる。

II期（古墳時代庄内式併行）　主尾根と東端支尾根の中央に位置する中央支尾根上に築造された円形，方形の墳墓をII期とした。円形の墳墓は，中央部が攪乱を受け，周溝内の若干の遺物で判断した。方形の墳墓は，手焙り形土器・壺・甕等が土坑内から出土しており，主体部と考えることもできる。方形に巡る周溝は，墳墓を区画するためのもので，定形化する以前の墳墓として，周辺の墓制の動態を知る上で非常に重要な資料となる。

III期（古墳時代布留式併行）　I・II期は，可能性を含めても丘陵の遺構占有率は希薄であるが，III期に入ると本格的な土地利用が開始されると言える。前後関係は明らかではないが，東端支尾根に 7 基からなる集落と 1 棟の掘立柱建物が造営され，中央支尾根には壺棺墓が造られる。集落は，SH3621を除いては建て替えはなく，また，出土土器から，布留式併行期でも比較的古い段階の一時期に成立し，排絶したと考えられる。集落の中には，掘立柱建物や竪穴式住居でその周囲に溝をもつものがある。それらを中心に集落が存在したと考えられるが，その性格は，瓦谷遺跡谷部出土の木棺小口板や多数の木製品から窺える。これらの集落以外に，瓦谷遺跡を含め周辺には同時期の集落が広がり，本集落が中心的存在として機能をしていたと考えられる。なお，中央支尾根には，合口壺棺墓が一基あり，尾根を隔てての墓域と考えることも可能である。

IV期(古墳時代 5 世紀)　III期の集落が排絶し，IV期に入ると主尾根上に円形墳，方形墳



第28図　上人ヶ平遺跡遺構変遷図 (2)

■ 竪穴式住居跡　● 土壙墓
□◎ 古　墳　⊞ 掘立柱建物跡
⊕ 井　戸

が築造される。特に，上人ヶ平5号墳は造り出しがあり，他には見られない施設がある。また，出土した埴輪もバラエティーに富んでおり，まさに盟主墳と言える。それに比べ他の方形墳は，墳丘規模に比べれば樹立された埴輪は多いと言えるが，葺石，造り出し等はなく，装飾性に乏しいものである。これらの方形墳群は，墳丘規模と主軸線から少なくとも2時期に分類できる。方形墳群の築造時期は，7号墳の須恵器や埴輪から5世紀前半期から中葉となる。なお，上人ヶ平5号墳は，時期的には方形墳群より若干先行すると考えてよい。

V期　V期は，Ⅳ期の方形墳の系譜を引く墳墓が築造されるが，規模も小さく，丘陵先端部に3基を確認した。周溝内からTK47前後の須恵器が出土している。これらの方形墳以後は，土壙墓が主体となり，造墓行為が終了する。なお，V期に築造された墳墓は，小型化して造墓が終わるが，同時期の集落は検出しておらず，丘陵下段に広がる平野部に集落が存在する可能性がある。今後，Ⅳ～V期の集落が周辺で確認される可能性は高いと言える。

VI期(奈良時代)　Ⅰ～V期までは，尾根単位でまとまりをもって墳墓・住居が造営されていたが，VI期に入ると主尾根中央部を中心とし，各支尾根基部に掘立柱建物跡等の主要建物やそれを区画するための溝，土器・瓦を投棄した土坑等が造られる。建物跡は，規模の小さいものではあるが，主軸線が真北と一致することや区画溝等があることから，居住を目的として築造されたと考えてもよい状況にある。また，19番地で検出した柱穴は，現在のところ建物跡として復原するには至っていない。柱穴の大きさは小さく，簡単な建物跡と考えられる。隣接した土坑(SK1909)からは，多量の破損製品として，土器，

瓦等が入っていることなどから，搬出できない製品と搬出できる製品をこの建物内で選別したと考えることができ，一種の作業場と認識できる。これらの建物群を総括すれば，作業場，倉庫，住居が一体化した生産体制が維持されたと解釈でき，未調査部分も含め，丘陵一帯に広がる可能性も指摘できる。一方，後述する瓦谷遺跡では，上人ケ平遺跡に隣接した谷部で，正倉院の宝物を収納する唐櫃を転用して井戸枠を造っており，生活用水確保を目的にしたと言えよう。この櫃については多くの問題点を含んでいるものの，平城宮に供給していた市坂瓦窯の工房跡で検出されたことは，極めて重要な意味をもっているものと言える。すなわち，上人ケ平遺跡に隣接する市坂瓦窯は，平城宮への供給を目的として造営された瓦窯であり，官窯としての性格をもっている。

以上が，今回の調査で確認できた土地利用の変遷であるが，弥生時代の住居，古墳時代の住居・墓地，奈良時代の瓦窯・各施設と多岐にわたり土地利用がなされた当地の地勢の条件が整っていたことを示しており，山城と大和の中間地点としての重要性がその変遷により一層明確になるのであろう。今後，墳墓，建物跡の検出は十分考えられるが，当遺跡の全容が明らかになることで，山城と大和の関連が遺構，遺物を通してさらに明らかになると言えよう。

5．小　　結

上人ケ平遺跡の調査は，昭和59年から行われており，今までに一部ではあるが重要性がクローズアップされてきた。例えば，弥生時代の高地性集落の存在，上人ケ平5号墳からの出土埴輪が，佐紀・盾列古墳群出土埴輪と要素から見れば共通点が多い点，それに奈良時代の生産体制のありかた等があり，いずれをとってみても遺跡の価値は，一定の評価を得ているといえる。

今後，遺物の年代設定が充分行われれば，上述の観点から遺跡の再評価をする場合に極めて有意義である。山城と大和の間にあって，交通路の交差する地点であり，山城地域の文物と大和地域の文物が合流するところでもある。木津川によってつくり出された沖積地は，八幡市，城陽市等に広がっているが，いずれも丘陵先端部と河川との幅は狭く，生産基盤としての平坦地は広いとは言えないが，本遺跡が所在する木津町は，木津川が蛇行する部分を中心に広がりを見せており，かなり広い平坦地がある。これらの平坦地は，弥生時代以降の生産基盤としては安定した供給源として多くの人々の注目を引いたであろうし，安定した社会経済が行われたといえる。また，木津川以北に広がる沖積地は，木津町一帯に広がる平野部を源にして，多くの文化の広がりを認めてもよい条件にある。これらを総合的に考えた場合，上人ケ平遺跡が所在する一帯はまさに古代から開けた地であり，これらを基盤にして本遺跡が成立していることを忘れてはならない。一方，奈良時代に，

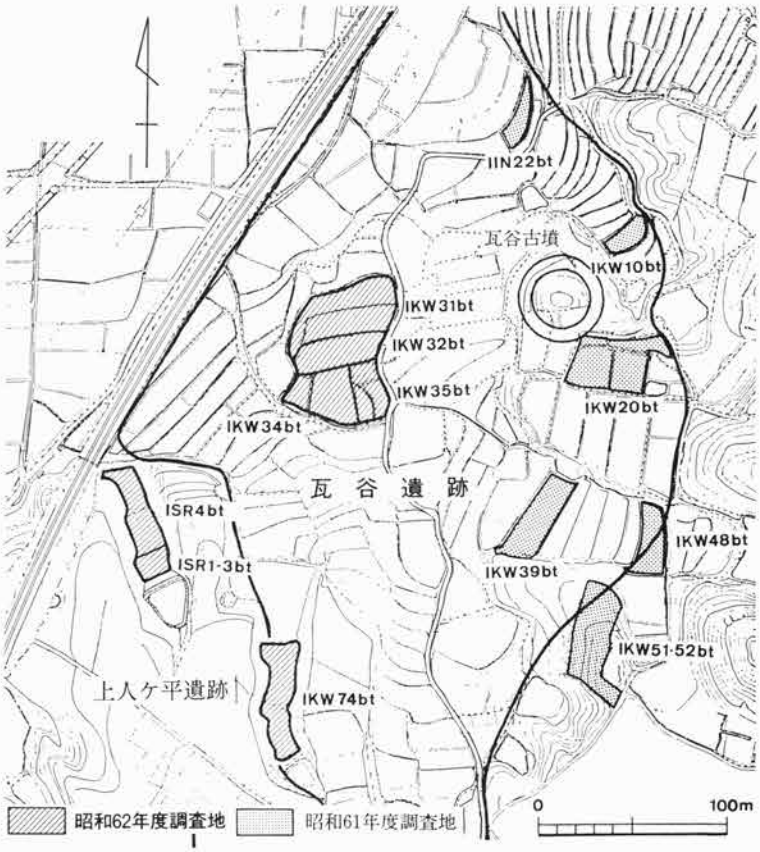
平城宮へ製品を供給した市坂瓦窯の存在は，成立要因としての燃料，粘土，傾斜地が良好な条件下にあったことを物語り，平城宮への供給ルートが整備されていたことがわかる。今後，供給と需要の関係において，軒丸瓦，軒平瓦を中心に，両者を一体化して考察して行く必要がある。特に瓦谷遺跡で出土した唐櫃は，正倉院のものに酷似している点など重要な遺物と考えられる。

上人ケ平遺跡は昨年度の試掘調査を含め，徐々にその実態がわかりつつあり，今後の調査に期待したい。　（小池　寛）

(2) 瓦　谷　遺　跡

1．は　じ　め　に

瓦谷遺跡では，３か所，８地点で調査を実施した。この遺跡の発掘調査は，昭和61年度が第１次調査で，今年度が第２次調査となる。第１次調査は，初年度ということもあって，周知の瓦谷古墳のある遺跡の東半分に主眼を置いた。その結果，小規模な方形墳と埴輪棺の群在，木棺小口板等の木製品を含む遺物が多量に包含された河道を検出した。いずれも古墳時代前期(布留式併行期)を中心とする遺構である。(注3)



第29図　瓦谷遺跡　調査区配置図

今回の調査地は，瓦谷古墳の西方約100mで，扇状地形のほぼ中央部に相当する地点（IKW

31・32・34・35bt)，及び上人ケ平遺跡(前述)の立地する台地性低丘陵を開析する小規模な2本の谷部(IKW74bt，ISR1-3・4bt)を対象とした。いずれも，遺跡の性格及びその広がりの確認を目的とする。特に，61年度検出の古墳時代の河道(流路)の下流延長部の確認，及び遺構が密集している上人ケ平遺跡隣接の谷部の状況を把握することを調査区設定の根拠としている。調査地は，いずれも沖積地で，現在は，水田・畑地(1-3・4 bt)として西に緩く傾斜する地形を階段状に耕地化している。調査区の名称は，昨年と同じく地番をトレンチ名とした。基本的には，1地番内1トレンチを原則としたが，谷部の74btでは高低2筆に各々トレンチを設定し，これにA・Bを付した。いずれも，トレンチの設定にあたっては，耕地の形状・排土処理などを考慮した。

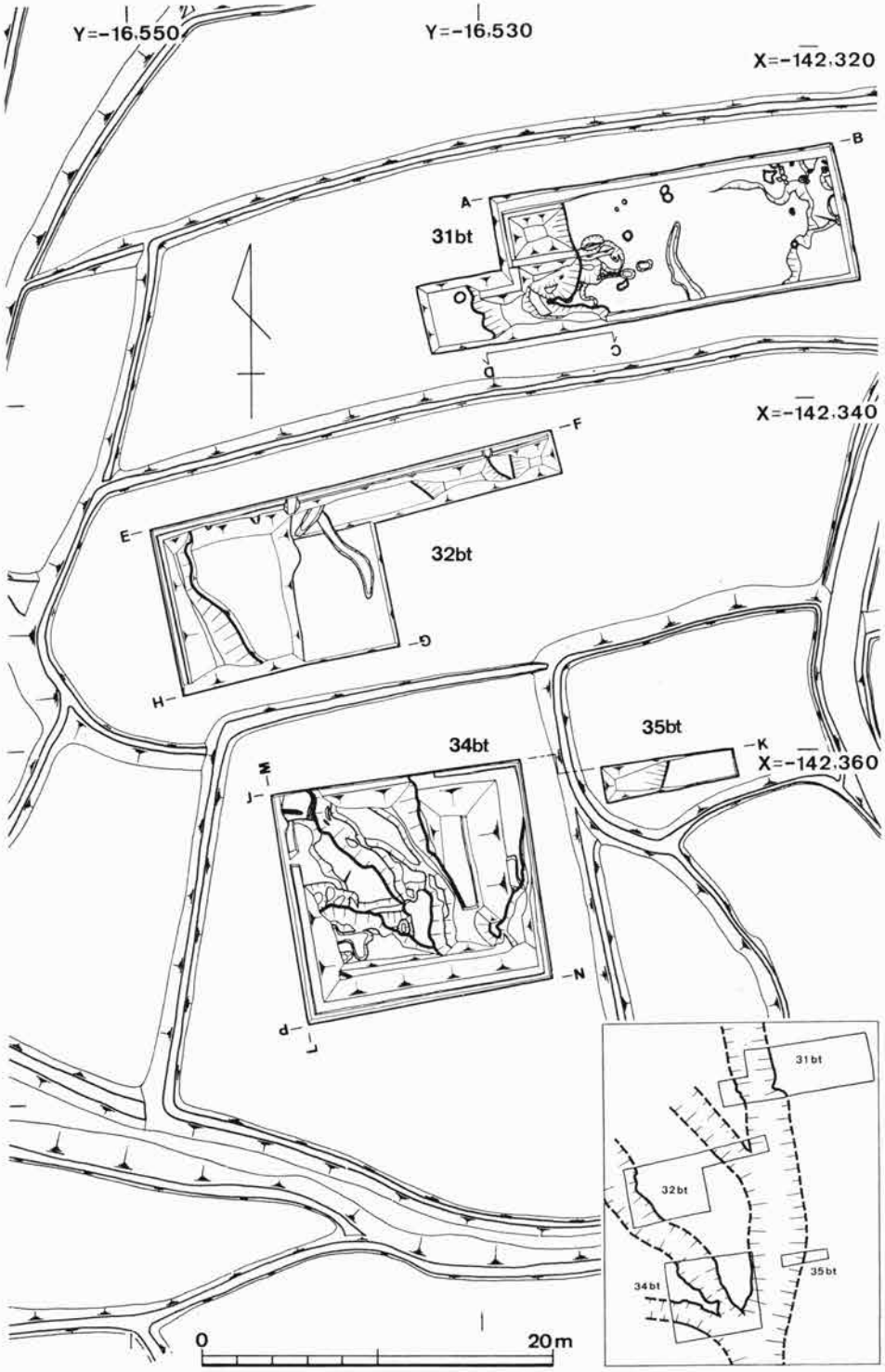
以下，各地区ごとに調査概要を報告する。

2．調 査 の 概 要

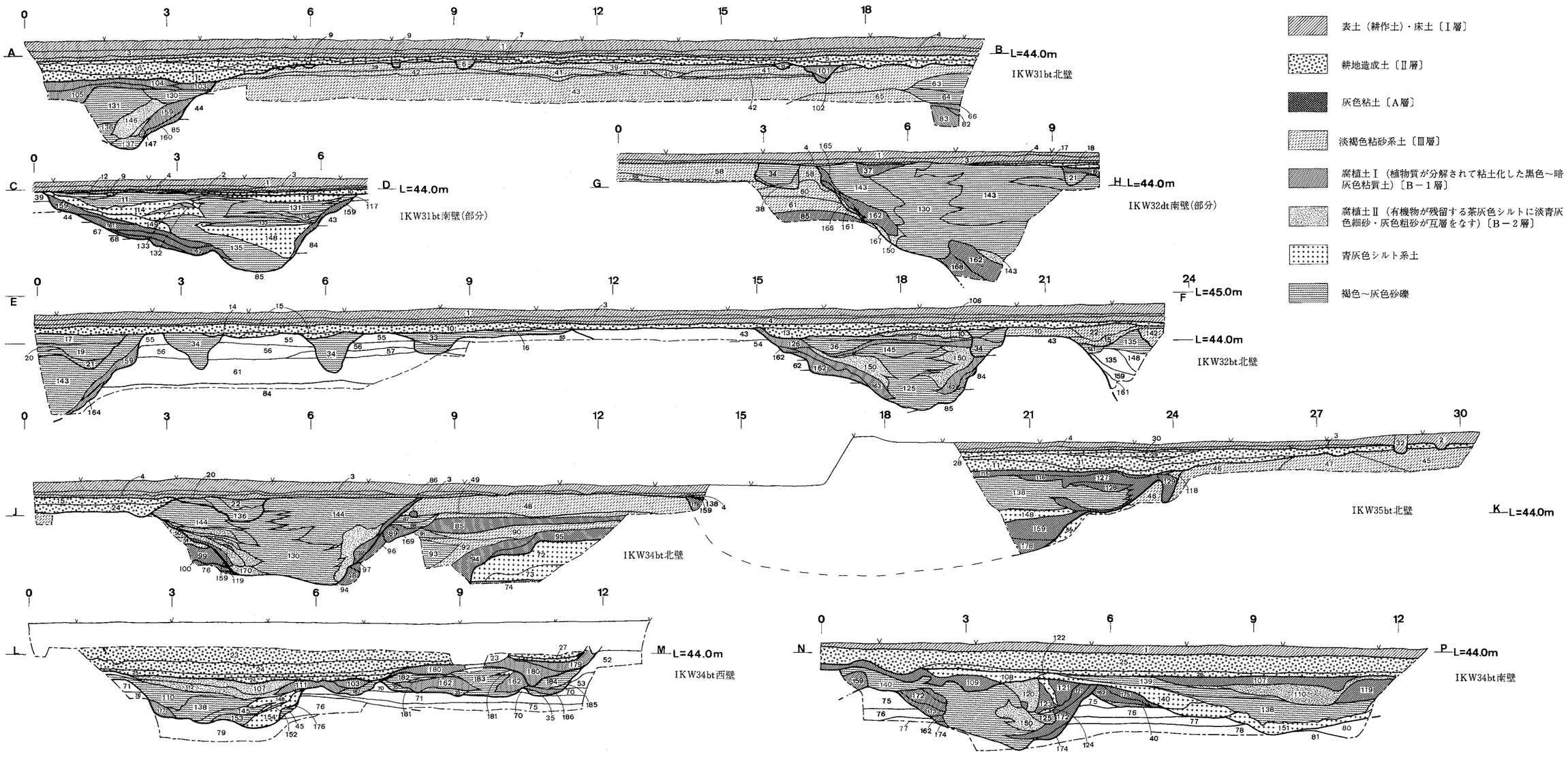
①IKW31・32・34・35bt(第29～32図，図版第10・11)

この地区では，樹枝状に分流を繰り返す河道を検出した。

この地区は，南東から北西方向にかけて緩く傾斜し，現状は，小規模な段差を設けて棚田状に造成されている(35btと31btの調査地の標高差は約1.2mを測る)。基本層序は，上位から，Ⅰ．現耕土・床土，Ⅱ．耕地造成土，Ⅲ．淡褐色系土と青灰色系土の互層となる。この内，Ⅱ層は，耕地を水平化する目的で設けられた客土で，各筆とも自然地形的に低い北西側ほど厚く数層にわたって堆積する。とりわけ，34btでの同層は，最も厚いところで1mを測り，耕地面の高さを考慮しても，造成以前に当該地の南寄りがやや窪地状を呈していたことが判明する。なお，同層から摩耗した近世陶磁器片が若干出土したが，これは古記録に残るこの地区の開発時期とほぼ符合する資料である。Ⅲ層は，おおむね堅固な土層で，丘陵部に見られる洪積層と似ているが，層厚は全体に薄く，地形に平行する堆積を基本とすることから，扇状地の堆積層と見られる。全体的に上位から，淡褐色粘砂系土，青灰色還元土の層順で堆積するが，広い範囲で黒色硬質腐植土層を間層として数面確認した。この黒色層は，いわゆる黒墨層で，水際植物の根茎が斑状に見られる。河道状遺構は，Ⅲ層上面を成立面としたかたちで検出された。それぞれトレンチごとに遺構番号を付したが，第31図右下の概念図のような連なりが想定され，全体として樹枝状に分流する平面形を呈すると思われる。また，埋土の状況や伴出遺物から，ここに示した一連の河道は，同時期に機能していたことが確認できる。内部の埋土は，観察する地点によって若干の相違があるが，基本的には共通した様相を示す。つまり，流路上縁から斜面に沿って腐植シルト系土が堆積し，その後，これを開析するように，褐色砂礫土が堆積して溝内が埋



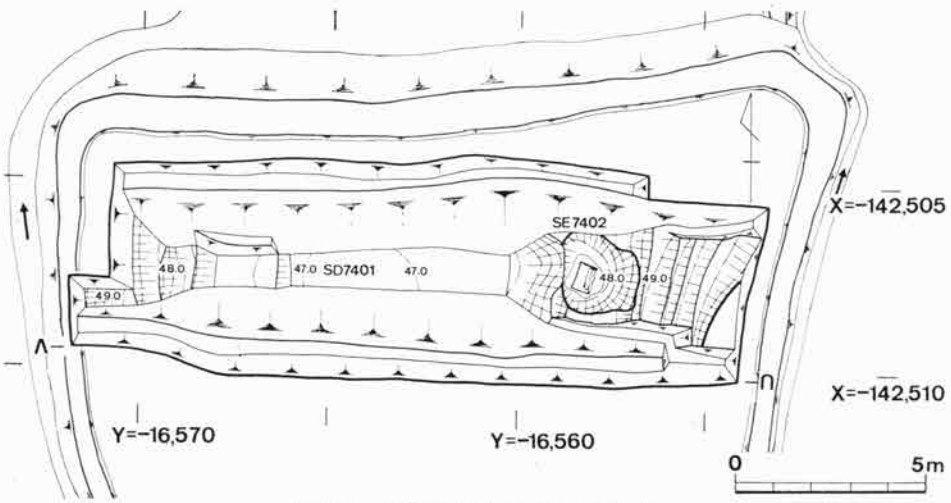
第30図　瓦谷遺跡31・32・34・35番地遺構平面図



第31図　瓦谷遺跡31・32・34・35番地土層断面図

IKW31・32・34・35bt土層名

1 黒色土（耕土）
2 黒灰色土（耕土）
3 灰色土（耕土）
4 黄褐色粘質土（床土）
5 灰褐色混礫土
6 灰褐色粗砂礫土
7 (暗)灰褐色混礫土
8 淡灰色粗砂礫
9 灰色粗砂礫
10 黄茶色粘質土（灰色粘質土混）
11 褐色粘質土
12 灰色砂
13 黄茶色粘質土(灰色砂質土・灰色粗砂混)
14 淡灰褐色粘質土
15 灰褐色粘質土
16 淡灰褐色粘質土（茶褐色粘質土混）
17 淡灰茶色砂質土（褐灰色土混）
18 淡褐灰色砂質土
19 (暗)褐灰色粘質土(灰褐色粗砂礫混)
20 淡灰褐色砂（やや粘性を帯びる）
21 (暗)灰褐色粗砂礫（黄褐色砂礫混）
22 茶灰色粘質土
23 灰褐色砂質土
24 暗褐灰色粘質土
25 暗灰褐色粘質土
26 暗黄褐色粘質土
27 暗灰褐色粘質細砂
28 褐灰色土
29 灰褐色土
30 淡灰褐色粘土
31 灰褐色土～茶灰色砂質土（黄褐色土混）
32 灰褐色粗砂礫土
33 褐灰色粗砂土（小礫混）
34 灰褐色砂（淡褐灰色粘質砂土・褐色粘質土ブロック状混）
35 灰色粗砂（やや砂質）
36 淡灰褐色砂
37 暗褐灰色粘質土（暗灰色粗砂混）
38 褐灰色粘質細砂（灰白色細砂混）
39 淡黄白色粘質土（やや砂質）
40 暗褐灰色粗砂礫土
41 淡灰褐色砂（硬質）
42 淡黄白色粘土
43 淡黄灰色粘質砂土
44 茶褐色褐礫土
45 褐灰色粗砂礫土（淡褐色砂混）
46 淡黄褐色粘質砂土
47 灰褐色砂礫土
48 淡黄白色砂質土（黄茶色土斑状混）
49 淡灰褐色砂質土（小礫混≒48層）
50 淡褐灰色粘質砂土（硬質．根茎類混）
51 褐灰色粗砂土（灰色粘質土混）
52 淡黄褐色粘質砂土
53 灰色粘質粗砂土
54 灰白色砂土（やや粘質）
55 黄茶色粘質土～茶灰色粘質土（硬質）
56 淡灰褐色粘質土（細粒子）
57 灰褐色粗砂土
58 淡褐灰色粘質土（小礫少混）
59 灰褐色砂質土
60 褐灰色粗砂土（淡褐色砂混）
61 淡黄白色粘質砂土（礫少混）
62 灰白色砂土（やや粘質）
63 淡灰褐色粗砂礫（崩落し易い）
64 灰褐色砂（淡灰色砂混）
65 淡黄白色シルト
66 暗青灰色シルト
67 淡青灰色粗砂礫
68 灰色粘砂
69 淡青灰色シルト質砂土
70 暗灰色硬粘質砂土
71 灰色粘土
72 (暗)青灰色粗砂土・青灰色砂（細砂混）・青灰色粘質砂の互層
73 青灰色粘質砂
74 (青)灰色粘土
75 青灰色粘質砂（土）
76 淡青灰色粘質砂土（淡青灰色粘土混）
77 淡青灰色砂質土（75層に近似）
78 淡青灰色粘質砂（灰色粗砂礫混）
79 灰色硬質粘土
80 灰色粘質細砂
81 灰色粗砂礫
82 暗灰色シルト
83 黒灰色砂質シルト（硬質）
84 暗緑灰色粘質砂土（黒色硬質砂土混）
85 黒褐色硬質砂土（ややシルト質）
86 黒灰色粘質土（灰色粘土混）
87 淡灰褐色砂（灰色砂混．崩落し易い）
88 暗茶灰色粘質土と黄白色細砂の互層
89 黒褐色腐植系粘質砂土（硬質）
90 灰色(粘質)砂（灰色粗砂混）
91 褐灰色粗砂
92 灰色(粘質)細砂（やや硬質）
93 淡褐灰色砂（崩落し易い）
94 黒色細砂質土
95 暗灰色粘質土
96 青灰色粘土（やや暗い色調）
97 淡褐灰色粗砂（暗灰色粘質砂混）
98 暗灰色シルト
99 暗灰色シルト質砂土（硬質）
100 (暗)灰色粗砂礫土
101 暗灰色粘質土（暗茶色土斑状混）
102 暗灰色粗砂（同色シルト少混）
103 暗灰色粘質土（灰色粘土混）
104 (暗)褐灰色砂質土（淡灰色細砂混）
105 (暗)灰色砂質土（暗灰色シルト混）
106 暗灰色シルト
107 暗灰褐色粘質土（暗青灰色土・暗褐色土混）
108 暗褐灰色粘質土（暗灰褐色粘砂混）
109 暗青灰色粘質土（黒色シルト・淡青灰色シルト混）
110 淡灰褐色粗砂・淡灰色細砂・暗茶灰色腐植系シルトの互層
111 暗灰色シルト質土（黒色シルト・灰色粘質粗砂混）
112 暗灰色腐植系シルト
113 灰色～暗灰色(粘質)砂
114 灰色粘土（やや粗砂質）
115 灰色粘質土
116 暗灰色シルト（灰色砂混）
117 灰褐色粘質土
118 淡褐灰色粘質砂土
119 (暗)灰色粘土（やや硬質）
120 (暗)灰色粘質砂土（暗灰色シルト・淡青灰色粘質細砂混）
121 (暗)灰色粘土
122 灰色粘質土
123 黒灰色砂質シルト
124 淡青灰色粘質砂
125 淡灰褐色粗砂
126 暗茶褐色粘質土（暗灰色シルト混）
127 暗灰色粘質土（黄褐色土斑状混）
128 暗灰色シルト（灰色砂混）
129 暗灰色シルト
130 褐色粗砂礫（淡褐灰～淡灰色砂混）
131 淡褐灰色粗砂（淡灰色細砂混）
132 淡褐灰色細砂
133 淡灰褐色細砂
134 淡褐灰色粘砂（同色粗砂混）
135 淡褐灰色砂
136 茶褐色砂礫
137 灰色粗砂礫
138 淡褐灰色粗砂礫（灰色砂・暗灰色シルト混）
139 灰白色砂（灰色粘質砂混）
140 褐灰色粗砂礫
141 褐灰色粗砂（暗褐灰色土混）
142 茶灰色粘質土（茶灰色砂混）
143 淡褐灰色粘質細砂（同色粗砂礫縞状混）
144 暗茶灰色腐植系粘質細砂・灰白色細砂の互層
145 淡褐灰色砂礫
146 灰色シルト（暗灰色シルト・灰色砂混）
147 灰色粘質細砂
148 青灰色粘質砂
149 淡青灰色シルト質粗砂
150 暗茶灰色腐植系シルト・灰色粗砂・淡青灰色粘質細砂の互層
151 (青)灰色粘土
152 淡褐灰色砂
153 灰白色砂（粗砂）
154 灰色シルト質細砂
155 黒灰色粘砂質シルト（根茎類多い）
156 (暗)茶灰色粘質細砂（淡灰色砂混）
157 淡茶灰色粘質細砂
158 暗(茶)灰色粘質砂土
159 暗灰色シルト（やや硬質）
160 暗灰色砂質シルト（礫混）
161 暗灰色シルト質土
162 黒灰色シルト
163 暗(青)灰色シルト質粘土（淡灰色細砂混）
164 (暗)灰色シルト（小礫混）
165 暗灰色粘質土（淡灰色粘質細砂混）
166 暗灰褐色粘質粗砂土
167 淡青灰色粘質砂
168 灰色砂
169 (暗)灰色粘質砂土
170 灰色シルト・淡青灰色シルト・暗灰色シルトの互層
171 黒色硬砂質シルト
172 黒灰色砂質シルト（淡灰色砂少混）
173 暗青灰色粘質砂土
174 暗灰色粘質砂
175 暗灰色シルト質土（淡灰色シルト混）
176 (青)灰色シルト
177 暗灰色砂質シルト（淡褐灰色砂少混）
178 暗灰色砂礫（暗灰色シルト混）
179 黒褐色（砂質）シルト
180 暗灰色シルト質砂
181 淡青灰色粘質細砂（暗灰色粘質細砂縞状混）
182 灰色粗砂礫
183 (淡)灰褐色粗砂（礫混）
184 灰褐色粗砂土（暗灰色粘質砂混）
185 灰色粘質砂（暗灰色細砂質シルト混）
186 黒色シルト（やや粗砂質）
187 褐灰色混礫粘土（茶色粗砂混）



第32図　瓦谷遺跡74番地−B遺構平面図

没している。後者は，激しい流れ堆積で，多くは前者に貫入し，溝底を二次的に掘り下げている。このように，洪水により浸食を受けた腐植土層は，更に２種に分類できる。１つは，植物質が完全に分解され，半ば粘土化した黒色土で最下層に堆積する(B−1)。他の１つは，分解が不完全で，根茎類等の有機物が残留する茶灰色シルト（灰色粗砂・淡青灰色シルト質細砂と互層をなす場合が多い)である(B−2)。これらの河道に伴う遺物は，多くないが，ほぼ布留式併行期の土師器に限られる。出土層位は，茶灰色系腐植土で，摩耗を受け細片化したものが多い。

その他の遺構として，小規模な溝状遺構が数条確認された(31・32bt)が，いずれも砂礫層の単一堆積で搬出遺物がない。河道に後出するものと考えられる。

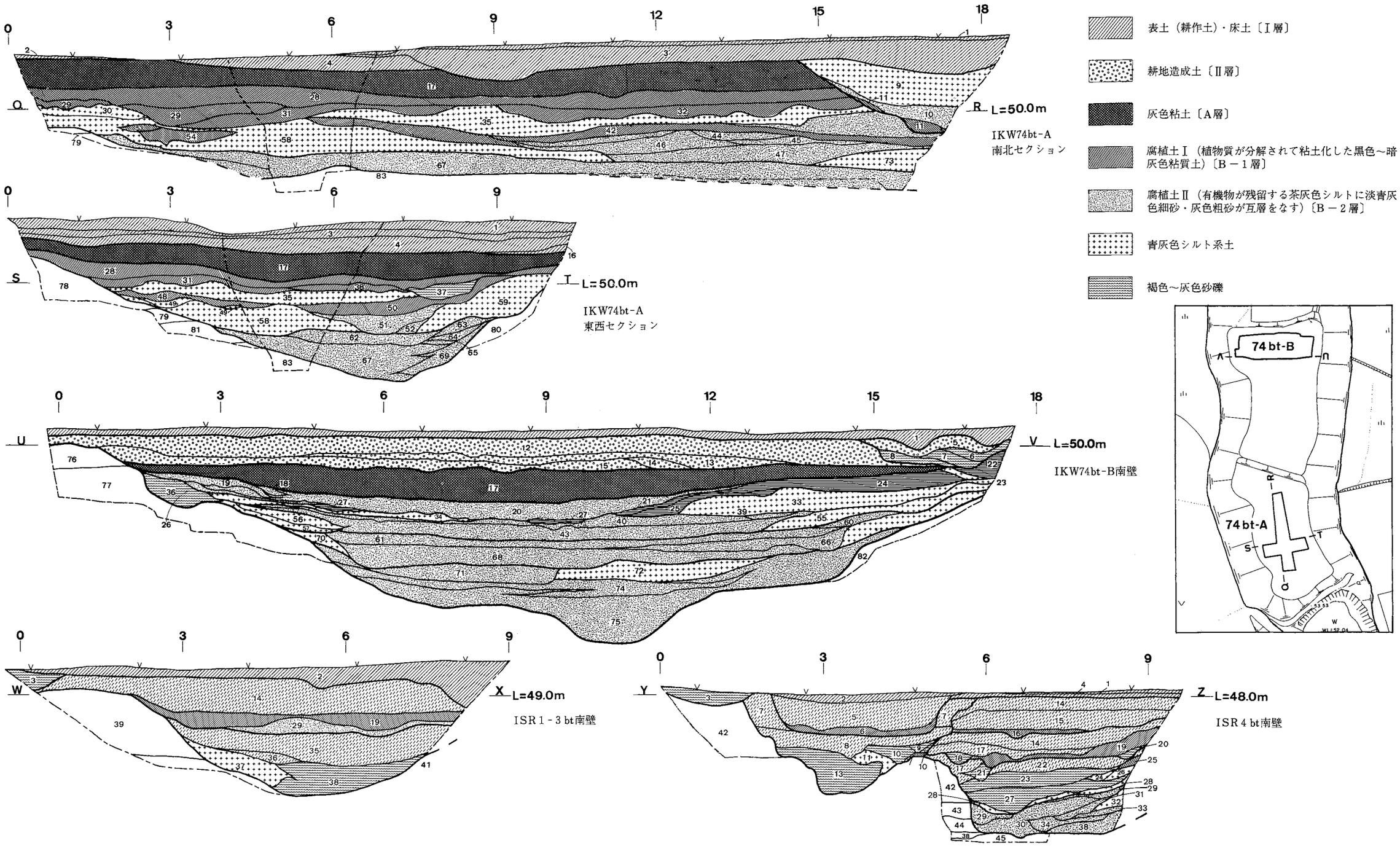
②IKW74bt(第32・33図，図版第13)

この地区では，旧谷地形に堆積する古墳〜奈良時代の遺物包含層及び唐櫃を転用した奈良時代の井戸を検出した。

上人ケ平遺跡の立地する丘陵の北東側は，主軸を南北方向にとる小規模な開析谷によって３筋の尾根に分離される。各々の尾根頂部は広く平坦で，ここに弥生時代後期から奈良時代の遺構が濃密に分布する。この上人ケ平の東尾根と中央尾根に挟まれた谷の奥部に74btが位置する。74btの所在する東谷は，最奥部に土堤を築き溜め池を設け，これより下位の傾斜面を約１mの段差をもって３筆の耕地として造成している。この内，上手２筆が74btとなるが，両者にそれぞれ調査区を設定し，南側からA・Bトレンチと称した(A地区の耕地面の標高51.2m，B地区との比高0.7mを測る)。この地区の基本層序は，谷部の堆積土を除くと，上位からⅠ．耕土，Ⅱ．耕地造成土，Ⅲ．地山となる。この内，Ⅱ層は，B地区にのみ見られ，耕地の水平化のため，周辺の丘陵部の土(地山)を採掘して置き土したもの

であろう。Ⅲ層は，相対的に堅固な土層で，褐色砂質系土と青灰色還元土(グライ土)からなり，前者は，丘陵部の地山と類似し，Bトレンチ東端の丘陵斜面に続くところで確認された。それより下位に見られる青灰色還元土は，谷内堆積土中の還元土と明確に区別し難いが，硬質粘土化している点で基盤層と理解した。遺物包含層を含む旧谷地形堆積土は，Ⅱ層下面(A地区ではⅠ層下面)で検出され，深くⅢ層に達している(Bトレンチでの最大層厚3.2m)。これらの埋土は，基本的にはA・B両地区で共通した堆積状況を示す。すなわち，埋土は，土色・土質によって，A.灰色粘土，B.腐植土，C.青灰色土に大別できる。A層は，やや還元された純粋な粘土層で，地点に関係なく最上層を厚く覆っている(B地区での最大厚60cm)。出土遺物は皆無で，いわゆる池底状堆積と考えられる。B層は，植物質が完全に分解され，シルト化が進んだ黒色土層(B-1層)と，分解が不完全で有機物が残留する泥炭土(B-2層)に容易に区別できる。両者は，互層となって堆積し，谷内埋土の大半を占めるが，前者の黒色土層は，全体として上位に堆積する。一方，泥炭層は，一般に茶灰色腐植シルトを主体とし，これに淡青灰色粘質細砂・灰色粗砂礫が互層として混入し，下位ほど灰色粗砂礫の占める割合が高くなる。C層は，谷の斜面に沿って堆積する還元土で，シルト～砂質シルト状を呈する。その性格は，堆積状況，基盤層との類似などからみて，丘陵斜面の崩壊土(地滑り層)と理解される。遺物は，A・B両地区から出土した。出土層位はB層に限られるが，各層位間で時期的差異が認められる。すなわち，包含層は，上位から24層(B-1)・43層(B-2)が奈良時代の単純層，61層(B-2)はこれに古墳時代の遺物が混入し，66層(B-2)は布留式併行期の単純層となる。各々は，C層が間層として貫入するため比較的容易に分離できる。全体に奈良時代の包含層は，西半部に偏在する傾向があるが，これは丘陵上の遺構を反映したものであろう。遺物の保存状態は，Aトレンチ54層で完形の平瓦が数枚重なって出土したほか，布留式単純層である67層が比較的良好に遺存するが，その他の包含層では摩滅，細片化したものが多い。

Bトレンチで奈良時代の井戸(SE7402)(第34図，図版第14)を1基検出した。唐櫃を井戸側下段に転用した特殊な構造を持つ。旧谷地形の東側斜面に位置し，ここに不整円形の掘形(復原径約2.5m)を設けて構築している。現状では，斜面の崩壊及び谷の再開析によって井戸の本来の成立面が大きく改変されており，井戸側の下段部分を残すにすぎない。但し，この谷地形の東斜面を詳しく観察すると，標高49m付近でわずかに地山の水平なところがあり，あるいは，これが本来の成立面で，そこに人為的なスペースを確保したことが想定される。この場合，井戸の深さ(石敷面まで)は約1.5mを測る。残存する井戸側は，各辺とも基底は元位置を保っている。ただ，東側(丘陵側)では，掘形内壁の崩落による土圧によって，東長側板が上下2枚に半折したうえ内方に大きく倒れ込み，南・北両短側板



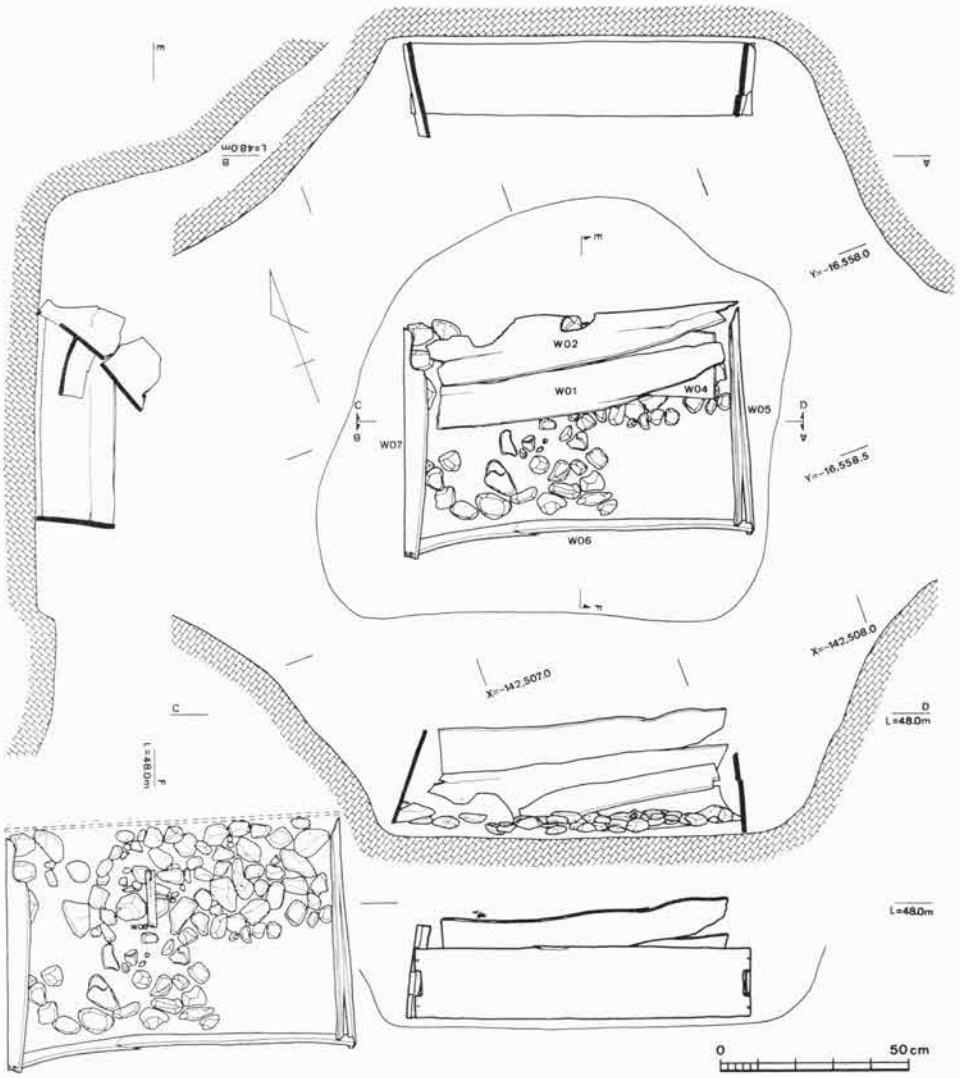
第33図　瓦谷遺跡 IKW74 番地，ISR1-3・4 番地土層断面図

ISR１－３・４bt土層名称

1 暗灰色土
2 暗茶灰色土
3 茶灰色粗砂礫土
4 黄褐色粘質土
5 黄色粘質土
6 暗紫灰色シルト
7 (淡)黄茶色粘質土
8 暗褐灰色粘質土
9 灰褐色(粘質)粗砂
10 淡灰色シルト
11 青灰色砂質シルト
12 淡灰褐色粗砂
13 灰色粗砂礫
14 淡黄灰色粘質土
15 暗褐灰色土
16 黒灰色粘質砂土
17 褐灰色粘質砂土
18 褐灰色粗砂
19 暗灰色粘砂質土
20 灰褐色粘質砂
21 褐灰色粗砂（小礫混）
22 灰色粘質砂土
23 淡褐灰色粗砂
24 青灰色粘質砂土
25 暗灰色砂質土（粗砂質）
26 青灰色粘砂土
27 明茶褐色粗砂礫
28 淡青灰色粗砂土
29 黒色腐植系砂質シルト
30 灰色粗砂礫（29層混入）
31 黒褐色腐植系砂質シルト
32 青灰色砂質シルト土
33 (暗)灰色シルト質砂土
34 暗灰色腐植系粗砂礫土
35 暗灰色硬砂質シルト
36 (暗)灰色硬質砂土
37 青灰色粘質土
38 灰色砂
39 茶褐色粗砂礫
40 淡青灰色シルト（青灰色シルト質砂混）
41 淡青灰色砂質シルト
42 淡灰褐色粘質細砂（褐色粘砂・灰白色シルト縞状混）
43 灰色粘質粗砂土
44 灰色粗砂礫（淡青灰色シルト混）
45 青灰色硬質粘土

IKW74bt土層名称

1 暗灰褐色粘質土
2 暗褐灰色シルト質土
3 灰褐色粘質土
4 黄褐色粘質土
5 黄褐色粘質土（小礫少混）
6 淡黄灰色砂質シルト
7 淡褐灰色シルト質土
8 灰色～褐灰色粗砂礫（やや粘質）
9 淡青灰色砂質シルト（やや硬質）
10 暗茶灰色腐植シルト
11 灰色(砂質)シルト
12 黄褐色粘質土（灰色粘質土・黄灰色シルト質土混）
13 黄褐色シルト（同色粘質土混）
14 灰色～暗灰色腐植シルト（根茎類混）
15 淡黄灰色シルト質土（13より粘質）
16 茶灰色シルト
17 灰色粘土（ややシルト質）
18 暗(茶)灰色粗砂質シルト（礫少混）
19 暗灰色粘質土（黒灰色混砂粘土・淡青灰色砂質シルト・淡褐灰色粘質粗砂混）
20 茶灰色シルト（微粒子）
21 暗灰褐色粘質粗砂土
22 黒灰色シルト（やや砂質）
23 淡青灰色粗砂質シルト
24 黒灰色シルト（やや砂質・礫少混 →**奈良期瓦・土器包含層**）
25 暗灰色粘質土（小礫混）
26 淡(茶)灰色シルト（微粒子）
27 黒褐色粘質土（茶灰色シルト混）
28 暗褐灰色粘質土（小礫少混・やや硬質）
29 黒褐色シルト（腐植土）
30 淡青灰色シルト（やや砂質）
31 暗灰色粘質粗砂土
32 黒灰～暗灰色混礫土(黒色砂質シルト混 →**奈良期の瓦包含**)
33 (淡)灰色砂質シルト（・粘質土）
34 淡青灰色粘質細砂(下半：淡灰色シルト)
35 青灰色砂質シルト（やや硬質．礫少混）
36 灰色粗砂礫（淡灰褐色粗砂礫混）
37 淡褐灰色粘質細砂と褐灰色粗砂礫の互層
38 黒灰～暗灰色土（礫少混）
39 灰色粗砂（やや腐植）
40 淡茶灰色腐植系シルト(淡灰色シルト混)
41 茶灰色粗砂･黒褐色シルト･暗茶褐色シルト(根茎類混)・茶灰色腐植シルトの互層
42 黒褐色粘質シルト（最も暗い色調）
43 黒褐色シルト（肩付近は灰色粗砂に暫移する→**奈良期の瓦・土器を包含**）
44 暗茶灰色腐植系シルト（灰色細砂混→**奈良期の包含層**）
45 淡青灰色粘質細砂(茶灰色シルト縞状混．淡茶灰色粗砂混)
46 褐灰色粗砂（暗灰褐色砂質シルト混）
47 灰色粗砂・暗茶灰色腐植系シルト・淡青灰色粘質細砂の互層（４単位）
48 (暗)灰色粘質土（礫少混．やや腐植）
49 淡青灰色シルト
50 黒褐色粘質シルト・暗茶灰色シルト・暗茶灰色粘質砂の互層(→**奈良期の包含層**)
51 茶灰色粗砂礫・暗茶灰色砂質シルト・灰色細砂の互層（崩落し易い）
52 灰色粘質細砂（やや粘質．≒42層）
53 淡茶灰色粗砂土（暗褐灰色腐植土混）
54 灰色粘砂（礫少混→**奈良期の瓦一括出土層**）
55 (青)灰色粘質粗砂土（33層より粗砂質で僅かに暗い色調）
56 灰色砂質シルト（礫少混）
57 灰色粘質土
58 淡青灰色砂質シルト
59 淡青灰色シルト質砂
60 淡茶灰色シルト質粗砂土（やや腐植）
61 暗茶褐色腐植系シルト（→**奈良期＋布留期の包含層**）
62 黒褐色腐植系シルト（根茎類多い）
63 暗青灰色砂質シルト
64 淡青灰色シルト質(粗)砂
65 淡茶灰色シルト（淡青灰色細砂質シルト縞状混）
66 暗茶褐色腐植系砂質シルト（→**布留期の包含層**≒67層）
67 茶灰色腐植系粗砂質シルト（灰色粗砂・暗茶灰色腐植シルト・淡青灰色粘質細砂混→**布留期の包含層**）
68 暗茶褐色腐植系砂質シルト（灰色粗砂礫混．遺物貧少）
69 暗茶褐色腐植系粗砂礫土
70 灰色シルト質砂土（下位ほど腐植）
71 灰色粗砂礫(暗茶褐色腐植系砂質シルト混)
72 青灰色砂質シルト
73 淡青灰色混礫砂質シルト
74 暗茶褐色腐植系砂質シルト
75 (暗)灰色粗砂礫
76 淡灰褐色粗砂・淡(青)灰色粘質細砂（硬質）の互層（小礫少混．基盤層）
77 淡褐灰色粗砂(やや硬質)・淡灰色細砂質シルト(やや硬質)の互層（基盤層）
78 褐色粗砂礫（灰色砂混）
79 青灰色シルト質細砂（やや硬質）
80 青灰色砂礫
81 灰色粘土・淡青灰色粘質細砂の互層（暗灰色腐植系シルト混）
82 淡緑青灰色硬質シルト（やや砂質）
83 淡青灰色硬砂質シルト（灰色粗砂礫混）



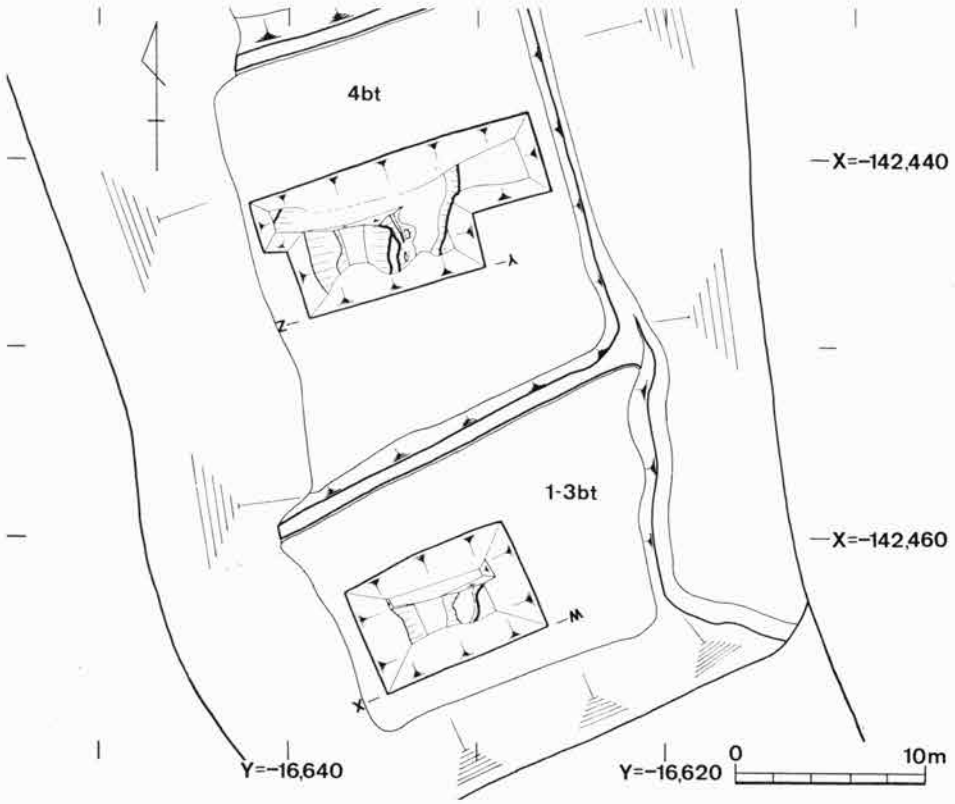
第34図　瓦谷遺跡SE7402(井戸)実測図

も東端が斜めに腐朽して欠失する。井戸枠の敷設に際しては，底板を除いた唐櫃の身の部分を掘形の底(若干の置土をして水平にする)に据える。その後，その内方に拳大の自然石(チャートの亜円礫が主体で，周辺より供給されたもの)を一重に設けて井戸底をつくる。この場合，櫃の四隅の接合部に釘が残っていなかったことから，一端4材の側板に分解した上で，裏込め土を入れながら枘を組み合せて再構成した可能性がある。井戸に伴う遺物はごく少なく，わずかに井戸底敷石直上で短冊状木製品・布目瓦小片各1点が出土したにすぎない。

③ISR1-3・4bt(第33・35図，図版第12)

調査区は，74btの所在する谷と平行して，西側約70mを南北に展開する谷部に位置する。ここは，上人ケ平中央尾根と西尾根に挟まれた幅約35mの狭長な谷地形で，調査前の状況は，東谷同様奥部に溜め池を設け，その下位谷口までを3筆の段状耕地として造成している（比高5m)。隣接する丘陵上には遺構の広がりが確認されており，74btと同じく良好な遺物包含層の存在が予想された。調査は，上手2筆の耕地にそれぞれ調査区を設け，地番をとって南から1-3・4btと名付けた。その結果，重複関係をもつ数条の河道(旧谷地形)を表土直下の地山面で検出した。

SD0401は，両調査区にわたって確認されたが，後出するSD0402は1-3btでは未検出である。この河道内の堆積土は，両者とも近似した様相を呈する。すなわち，上位から，Ⅰ．黄色系土と暗灰色腐植土の互層，Ⅱ．灰～褐色流れ堆積系砂礫，Ⅲ．暗茶灰色腐植シルトと青灰色還元シルトの互層を基本層序とする(但し，Ⅲの腐植シルトは，浸食が深く及ぶ4btのSD0401にのみ顕著にみられる)。遺物の出土量は，相対的に少ないが，SD0401のⅠ層から庄内形甕一個体が，またSD0402のⅡ層から奈良時代の瓦片が出土した。



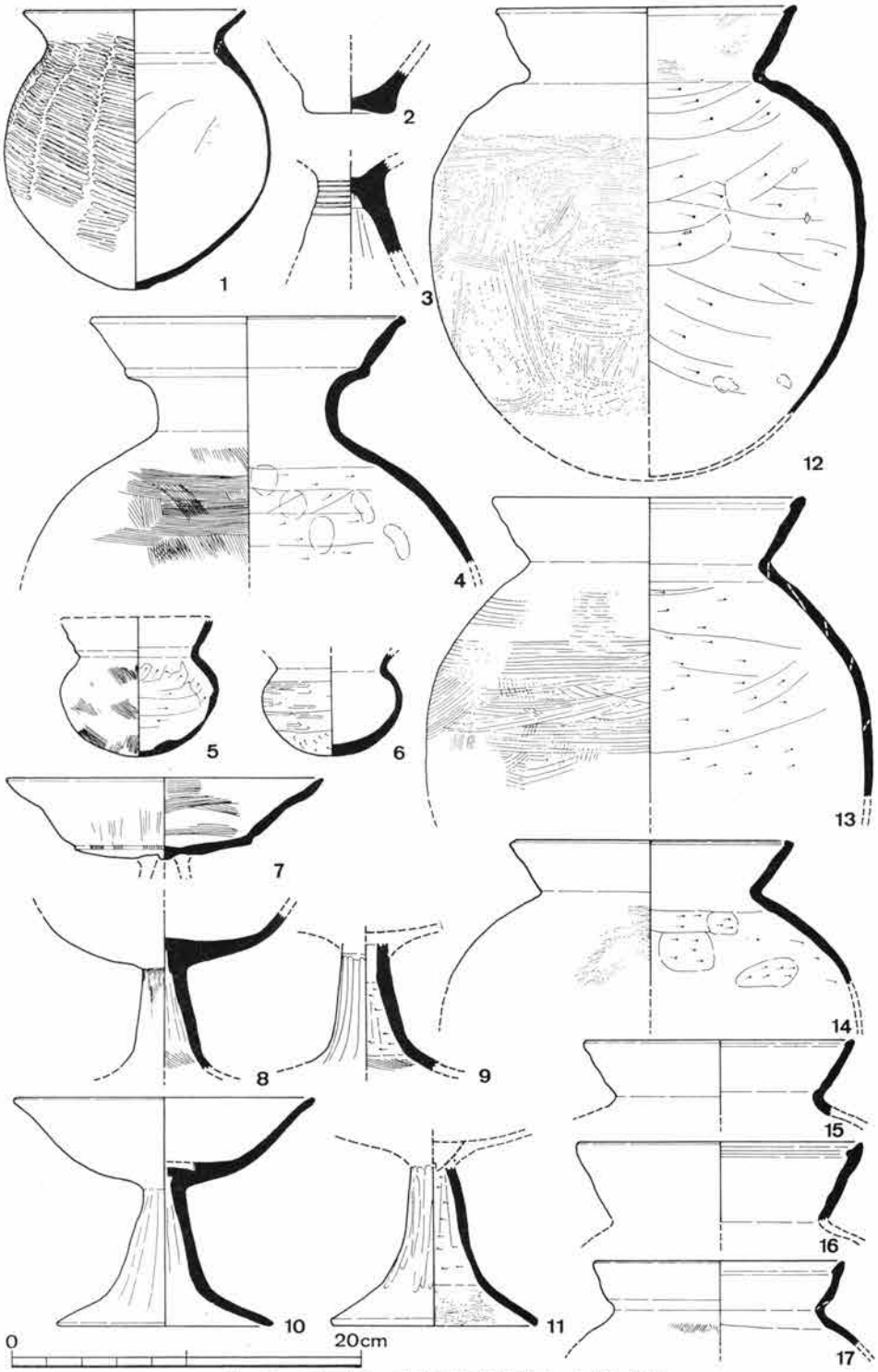
第35図　瓦谷遺跡 ISR1-3・4 番地遺構平面図

3．出 土 遺 物（第36・37図）

今回の調査によって出土した遺物は，ほとんどが河道内堆積土中に包含されており，古墳時代及び奈良時代に属するものが大半を占める。出土量は，74btが全体の8割強で，他の調査区を圧倒的に上回る。いずれも，包含されている土質により多少の差があるが，おおむね良好な遺存状態である。これらのうち，古墳時代の遺物は，いわゆる古式土師器の範疇で捉えられるもので，須恵器を全く伴わない。一方，奈良時代の遺物は，須恵器・土師器・瓦(完形の平瓦を含む)・木器(井戸に転用された唐櫃等)であり，8世紀段階を中心とする。ここでは古式土師器及び唐櫃について簡単に説明を加える。

古式土師器(第36図，図版第26)　甕・高杯・小型丸底壺・壺等の器種が確認できる。

甕は，出土量が最も多く，布留形甕がその大半を占めるが，庄内形甕も存在する。庄内形甕(1)は，ISR1-3btの河道SD0401下層(35層)から出土した。遺存状態は悪いが，ほぼ完形の中型甕である。体部は，最大径が中位にあり(15.4cm)，わずかに長胴ぎみの球形を呈する。「く」の字状に外反する口縁は，直線状にのび(立ち上がり角約97°)，頸部の接合稜線は，比較的シャープである。口唇部は，摩耗によりいくらか原形を失っているが，わずかに上方につまみ上げた痕跡が残る。底部は，尖底ぎみの丸底(口径13.7cm・器高16.0cm)である。体部外面にはスリナデ技法(ハケやナデ)が用いられず，左上がりの細かいタタキ(条痕約5本/cm)が全面に残る。内面は，摩耗により観察困難だが，頸部屈曲部の少し下からヘラケズリして器壁を薄く仕上げる(器厚1～5mm)。以上の諸要素及び胎土から庄内大和形甕に属する。このほか，平底の底部(2)，平行するヘラ描き沈線をもつ高杯脚柱部(3)などが弥生・庄内的な古式の傾向を示す。布留形甕は，74bt包含層中より多量に出土したが，口縁を中心に図化し得たのみで，全形を窺える個体は少ない。体部は，最大径を中位にもつ球形を基本とするが，12のようにやや肩の張ったものがある。平底，尖底を示す破片はない。口径により，15cm前後と17cm前後の2種に分類できる。口縁は，一般に頸部接合部を強くナデるため内方にくびれ，全体として内湾した形状を呈する。口縁端部の形態は，口唇部を内方に肥厚させるものが大半を占める(緩やかに外反する口縁端部を丸くまとめたものが1点ある)。内厚するものは，面をもたず丸く折り返したものと，内傾する面をもつものがほぼ同率である。後者は，さらに内傾面に長短の変化がみられ，中には長い内傾面に段を有するものがある(16)。器面調整は，体部全体→肩部外面→口縁の順になされる。体部外面は，全面にわたり縦基調のハケメを施した後，肩部付近を横ハケする(12・13)。内面には，頸部屈曲線の数cm下位より横方向のケズリが多用される。口縁調整は，細かい条痕が認められる横方向のナデを用いる。これは，内面の頸部屈曲線から外面肩部上半の範囲に及ぶ場合が多い。また，オサエ押捺手法が顕著にみられる底部付近の断片が少なか



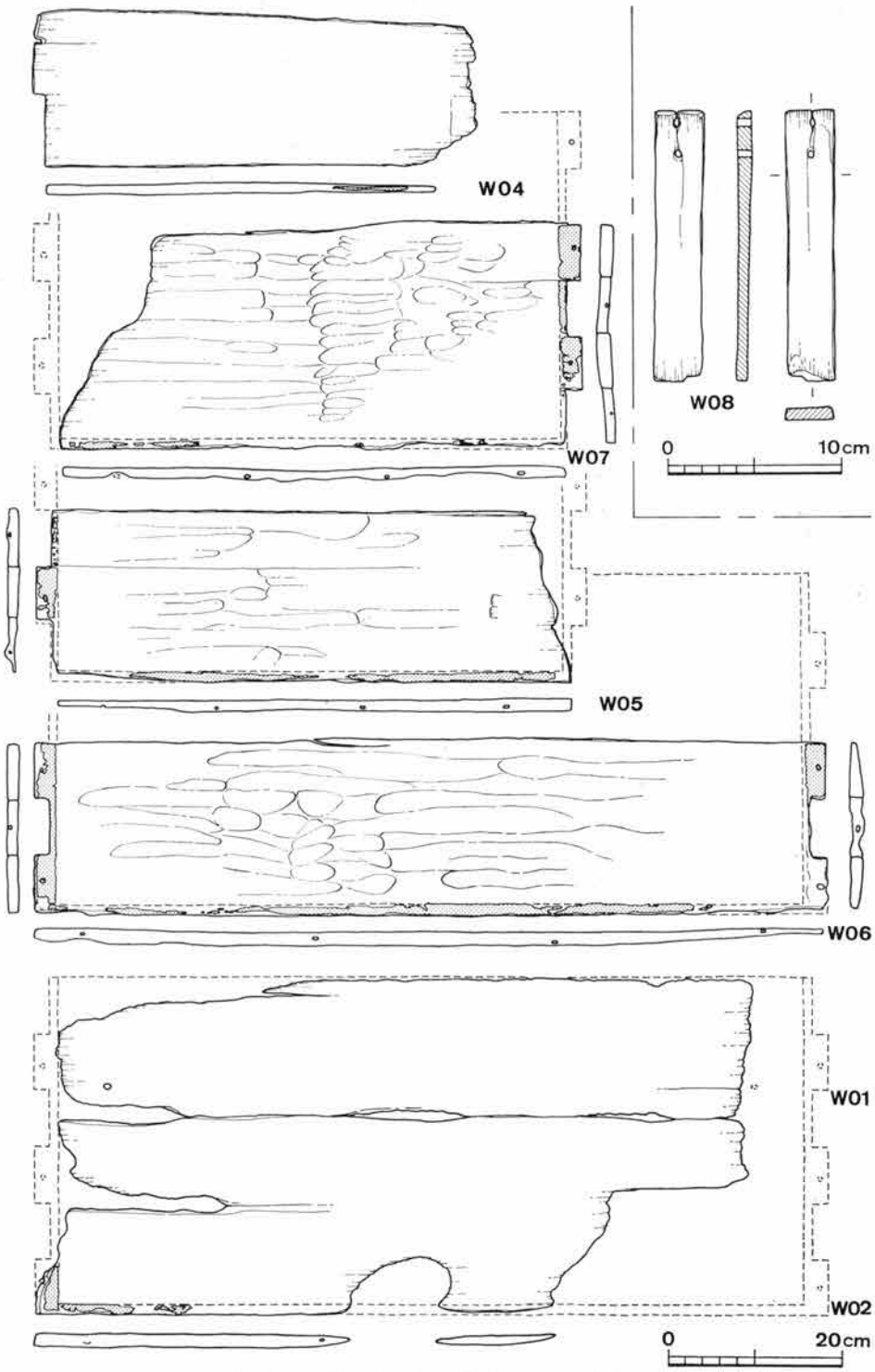
第36図　瓦谷遺跡　出土遺物実測図(1)　古式土師器
1～3：ISR1-3bt，4～17：IKW74bt

らず存在する。このほか，東海系台付甕の「S」字状口縁の破片が存在する。

布留期の高杯は，この時代の遺物の中ではかなり多いが，杯部，裾部を欠失するものが多い。わずかに残る杯部は，いずれも体部から屈曲した口縁が外上方に大きく外反する形状を示す。これは，さらに体部と口縁部との境界が鋭く屈曲して擬口縁状の稜線をなすもの(7)と，その接合稜線が不明瞭で単純に丸く屈曲するもの(8・10)に区別できる。但し，前者の稜線は，突出が低く屈曲部上縁に沈線を巡らす程度に形骸化している。また，前者には，口径24cmのやや大型のものがある。脚柱部は，裾部が屈折して大きく開き，脚部は，直線的あるいは，まれに内湾ぎみに緩やかに広がる。杯部の調整は，ハケメを多用するものとミガキ手法を用いるものがあり，前者が多い。ハケメを用いるものは，多くの場合，底部内外面を放射状に，口縁部内面を縦位または横位に，口縁部外面を縦位に各々ハケメ調整し，その後横ナデ調整で仕上げる。後者は，粗い原体で内外面とも横位に施すが(10)，大型高杯では外面に縦位のミガキがみられる。脚柱部の調整は，脚部外面にほとんど例外なく重複しない縦位のヘラナデ様のミガキが用いられ，不明瞭ながら多角形状の面をなす。脚部内面は，しぼりの痕跡が残る(未調整)ものと，不完全ではあるが，回転ヘラケズリを加えるものがある。杯部と脚柱部の接合は，すでに完成した脚柱部に杯部を加えるように造り足して整形し，接合部の周囲を粘土で補強する。

小型丸底壺は，数個体相当分を確認したが，口縁部を欠くものが多い。残存率の高い体部の形態は，一般に最大径が上位にあり肩がやや張る扁球形を呈する。頸部の屈曲は，強い横ナデにより明確な稜線をもたない。口縁部は，5ではやや内湾ぎみに外傾し，口径は体部最大径を大きく上回らない。調整技法は，口縁部内外を最終的に横ナデする点は，各個体とも共通するが，体部の製作技法の違いから2種に分けられる。1つは，外面下半をヘラケズリし上半にミガキを加えるもの(6)である。ケズリは，体部高の1/2〜1/3までを横位または縦位に施し，その後横ナデ調整する。ミガキ手法は，幅数mm前後の施工幅をもつ原体を用い横位にやや粗雑に施す。内面は，ていねいなナデにより平滑に仕上げる。他の1つは，外面にハケメを多用する(5)。ハケメは細かい原体を用い底部を不整方向に，体部を縦基調(ナナメ)にていねいに施す。中には，肩部に幅の狭い横ハケを加えたり，体部上半を横ナデして先行するハケメを消すものがある。この類型は，例外なく内面をヘラケズリする。ケズリは，横方向に用いるが，5のように上半のみ不整方向に削り，下半に指オサエを残すものがある。

壺には，二重口縁壺と直口壺がある。二重口縁壺には，二次口縁が大きく外反するもの(4)と，直立あるいはやや内傾するものがある。前者は，頸部が直立ぎみに立ち上がり，緩やかに外反するが，水平になることはなく外傾する二次口縁につながる形態を示す。二重



第37図　瓦谷遺跡　出土遺物実測図 (2)　木製品

口縁部接合部には，丸味を帯びた断面三角形の低い突出が残る。口唇部は内外に肥厚させて丸くおさめる。調整は，甕の場合と同様，体部外面を縦ハケした後，肩部を横ハケ調整する。体部内面は，横位のヘラケズリを用い，最後に口頸部内外を条痕を留める横ナデで調整する。器面にススが付着し，煮沸に供せられたものである。後者は，口径25cm前後の大型品で，いわゆる山陰系の二重口縁壺である。二次口縁の接合部外面には断面三角形の低い突出が残り，また内傾面をもって肥厚する口唇部を有するものがある。

唐櫃(第37図，図版第26)

出土唐櫃は，底辺が91cm×63cm。深さ38.6cmが残存しており，板の厚さ1.8cmを測る。これに底板の厚さを仮に1.8cmとして加えると，91cm×63cm×42.6cmの唐櫃の身が復原できる。

残存している部材を観察すると，いずれの板も柾目材を用い，側板を底板の上面に当て，底板下面より長辺・短辺とも4本の釘を打ち固定している。側板の組み手は6枚組み接ぎで，各6本の釘を打ち固定している。また，各稜の角四周には，幅3cmの蔭切(黒色の漆で縁取りを施すこと)を施している。

長側板の上寄りには，横に配した少し大きめの穴が穿たれている。これにより，横桟を取り付けた唐櫃であることが判明する。

現存する唐櫃は，正倉院に伝世されたものと，法隆寺で昭和60年に「昭和の資材帳作り」調査が行われた際に発見されたものがある。

遺跡出土品としては，昭和52年，長岡京で縦桟型式の白木脚が出土している。(注4)

横桟型式の唐櫃としては今回が初の出土資料となる。

4．小　　結

瓦谷遺跡における今回の調査成果を簡単に列挙すると，以下の諸点に要約できる。

(1)IKW31・32・34・35btで検出された河道は，古墳時代に機能し，現在の水田化されている扇状地のほぼ中央部に当該期の河道の一つが存在したことが判明した。これが61年度検出の古墳時代の遺物を多量に包含した河道(IKW39・48bt)の延長部である可能性は高い。(注5) ただ，両者を比較した場合，今回の河道は，遺物の出土量が比較にならないほど少なく，摩耗したものが多いこと，さらに，急激な流れを示す砂礫の堆積が相対的に多いことなどが指摘できる。また，この扇状地の主たる水源である南東方にのびる谷に発する流路の延長部の可能性も残る。

(2)谷部の包含層中の遺物は，比較的出土量が多く，良好な保存状態にあることから，隣接する上人ケ平遺跡の性格を解明する手がかりとなる資料である。すなわち，この地区で

出土する遺物は，木製品も含めローリングによる摩耗が少なく，包含層の堆積状況が激しい流れを示さないことから，洪水などで遠方から運搬されたとは考えられず，むしろ隣接した最寄りの丘陵部からもたらされた可能性が高い。このことは，出土遺物の内容と，近接する丘陵上の遺構の時期が概ね併行することからも裏付けられる。以下，各地区の遺物の内容を簡単に検討する。74btの布留式併行期の資料は，東尾根の集落遺構と密接に関連するものであろう。甕の個体数が多いことも集落との関わりを示す傍証となる。これらは，各器種とも若干の形式差をもつ個体が混在している。ただ，それを層位的に区別することは困難である。具体的な時期設定については，土器の特徴から布留期の中段階でもやや古式の様相を示す。以下，布留の中段階を定点とし，形式変遷の指標となる新旧の要素を列挙する。甕では，①口唇部を内側に丸く肥厚させるもの(古相)と，肥厚して長い内傾面をもたせるもの(新相)が同率をなすこと。②肩部外面に横位ハケが顕著にみられること(古相)。③肩部に竹管文を施すものがある点(古相)等が挙げられる。高杯は，①体部と口縁部の接合稜線が不明瞭な形式の占有率が高いこと(新相)。②接合稜線をもつ形式の突帯が形骸化している点(新相)。③脚柱部外面調整に縦方向のミガキが用いられること(新相)等を主な要素として摘出し得る。小型丸底壺では，体部外面にケズリ・ミガキ，内面にナデ調整を用いる形式(古相)と外面にハケメ，内面にケズリを多用する形式(新相)の２相に明確に分類できる。このほか，二次口縁が外反する二重口縁壺は，布留中段階で消失する形式だが，その最も新しい段階に属し，また，山陰系二重口縁壺は，同段階に盛期をもつ形式である。以上の土器のもつ諸要素を総合し，既存の編年に照合すれば，これらは，大和地域の編年であるが寺沢編年の布留1〜3式の幅で捉えられる資料といえる。(注6) 一方，当地区の奈良時代の遺物は，谷部の西半に偏在する傾向があるが，これは西側に接する丘陵上に当該期の遺構が集中することに起因するものであろう。また，1-3btで出土した庄内大和形甕については，①球形に近い体部をもち，②尖底ぎみだが丸底であること(以上新相)。③口唇部をつまみ上げた痕跡を残すこと(中相)。④タタキの後のスリナデの省略(古相？)等の特徴から庄内期でも新しい要素を備えた資料といえる(寺沢編年庄内３式)。

⑶74bt-B 地区で検出された井戸は，奈良時代の井戸そのものが瓦谷遺跡周辺では初めての検出であるだけでなく，井戸枠に唐櫃を転用する特異な構造をもつ点は，全国的にも他に例を見ない。奈良時代の遺構・遺物は，丘陵上の上人ケ平遺跡で多数検出されており，瓦生産に付随する施設・遺物と考えている。今回検出された井戸は，伴出遺物からは帰属時期を特定することはできない。ただ，谷部包含層との層位関係及び唐櫃そのものの形態・構造から奈良時代の可能性が高く，また用材の年輪年代測定の結果もこれを否定するものではない。したがって，上記奈良時代遺構群の一施設として理解するのが妥当であろ

う。ところで，奈良時代の唐櫃は，現在東大寺正倉院に伝承されたものを除けばほとんどなく，発掘された例はこの資料以外はないに等しい。そういう意味で，今回の井戸の検出は，奈良時代の唐櫃の形態・構造を知る上で好資料を提供するとともに，このような井戸を構築し得た瓦谷・上人ケ平遺跡の性格を究明する上で貴重な資料といえる。(伊賀高弘)

(3) 瀬 後 谷 遺 跡

1．はじめに

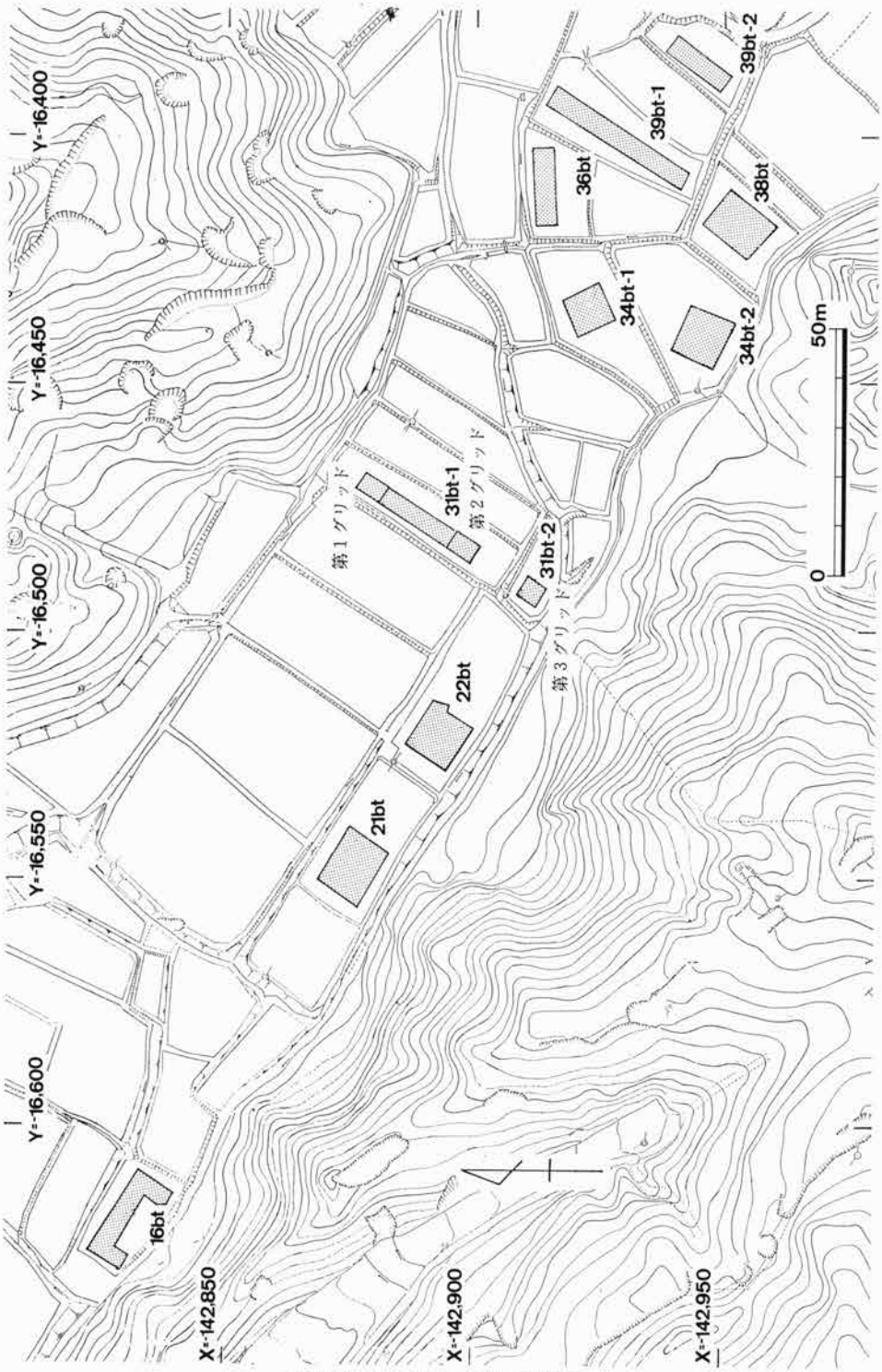
瀬後谷遺跡は，市坂地区の南端で，上人ケ平遺跡の尾根ひとつ南に位置する標高約60mから50m・幅60m・長さ500mほどの北西に開く谷部に位置する遺跡である。瀬後谷の南で，東から西にのびる丘陵は奈良県と接し，東西に長い谷部全体が奈良時代の土器や瓦の散布地として知られている。この谷は現在，水田や畑地として土地利用されており，谷の中央で低くなり，南北の両側で一段高い棚田の様相を呈している。水路は，丘陵裾部に設けられているが，各水田域の伏水は多い。

遺跡の周辺には，北側に平城宮大膳職所用瓦窯である市坂瓦窯，その北から東にかけて市坂瓦窯の工房跡と考えられる上人ケ平遺跡が分布する。また，この遺跡では，古墳時代中期に造営された上人ケ平1・5号墳が古くから知られており，近年の調査によって新たに弥生時代から古墳時代にかけて断続的に営まれた集落や墓域が確認されている。このようにこの地域及びその周辺部には，弥生時代から奈良時代にかけての集落・墓域・生産遺跡がかなり存在することが判明している。

瀬後谷遺跡の調査は，今年度が最初である。現地調査は，調査対象地域内で耕作が行われてたため，夏期と冬期の2期に分けて行った。夏期の調査は，昭和62年7月24日～昭和62年9月1日にわたり休耕田の多い上流域で実施した。冬期の調査は耕作の終わるのを待って，昭和62年10月17日～昭和63年1月23日の期間で中流域と下流域に試掘トレンチ及びグリッドを設定した。トレンチ，グリッドの設定はすべて畔を切らない任意の地点とし，測量は公団の設置した測量杭を使用した。調査面積は，のべ1,020m^{2}に及んだ。

2．調査概要

今年度は，この地域での最初の調査になるため，遺物包蔵地の範囲確認とその状況を確認することに主眼を置き，谷部の中央付近で一段高いテラス状の部分(34・36・38・39bt)，その下流で一段低くなる部分(21・22・31bt)，さらに下流地域(16bt)の3区域で計11か所のトレンチを設定して実施した。以下，基本的な土層の状況と，調査の結果を調査の順を



第38図　瀬後谷遺跡調査区配置図

おって概述する。

層位(第40図)

瀬後谷の土層を，大きく分けると下から，奈良期以前の川の流れによる砂礫(第18・19層以下)・粘土の互層，青灰色砂質粘土，中世の湿地化によるよどみ堆積の青灰白色粘土(第11層)，青灰色粘土シルト質(第10層)となる。地山については周辺丘陵が大阪層群に代表される沖積層で，小面積の調査では川の堆積との判別は困難であり即断はできない。また，床土に使われる鉄分を含む黄橙色の粘土に布目瓦が含まれる場合があり，この粘土の採取した場所に遺構が存在すると考えられる。

①34・36・38・39bt(第38図，図版第15-1)

隣接する各トレンチ間でそれぞれ繋がりの想定できる上流からの氾濫堆積を確認した。4bt南トレンチの断ち割りで，奈良時代の須恵器・布目瓦片が出土した。他のトレンチでは，遺物包含層を確認するには至らなかった。氾濫堆積によって削り取られたか，もしくはさらに下層に存在すると考えられる。

②21・22・31bt(第38・39図，図版第15-2・16-1)

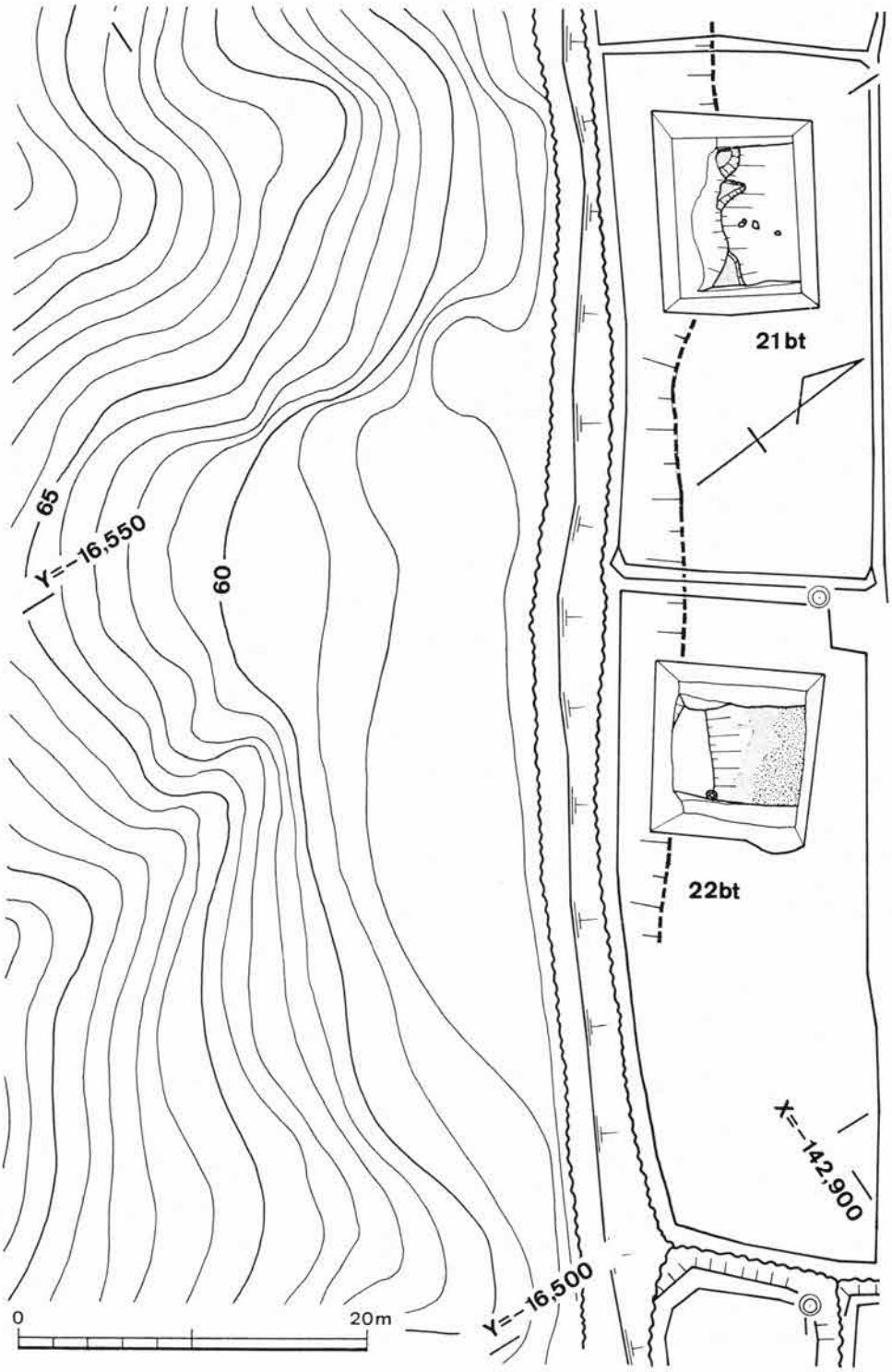
21・22btトレンチでは，南の丘陵に平行する旧河道とそれに伴う各期の堤を確認した。

21bt

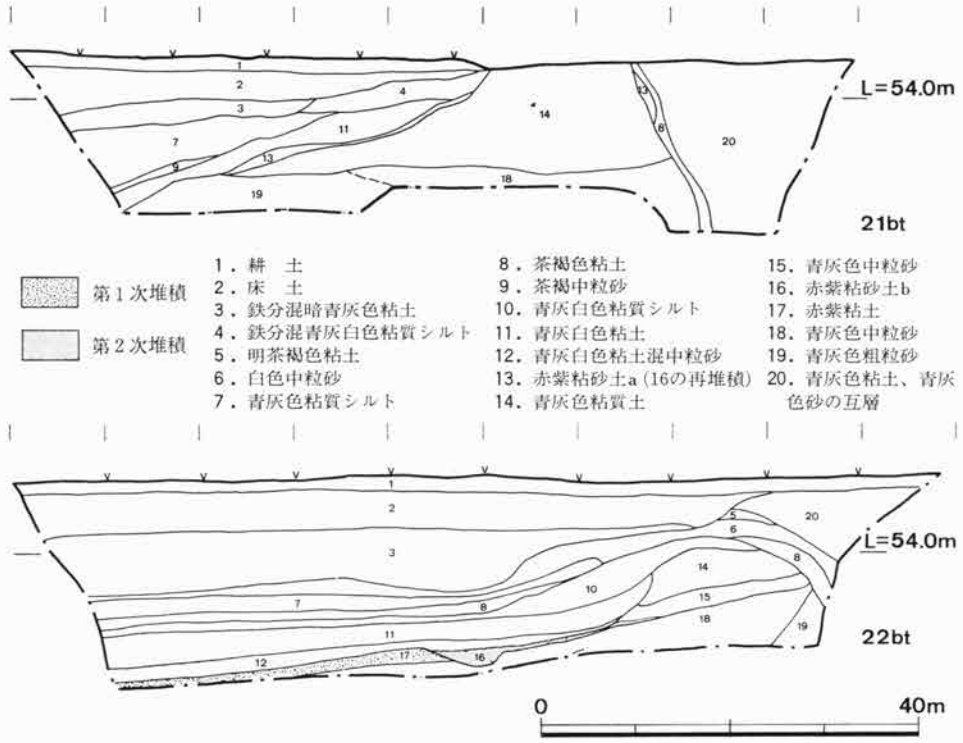
10m×11mのトレンチを設定した。耕土，床土を除去したところ，床土直下から南側の山筋と平行する土手状の高まりを検出した。谷側の土手直上に堆積した青灰白色粘土は31btの青灰白色粘土と同一層と考えられ，中世遺物を含み，下面で奈良時代の須恵器・瓦等が出土した。土手は，砂質粘土の盛り土と地山の切り出しによって造られ，幾度かの修理も行われている。この作業は溝状，あるいは鱗状に堆積する盛り土からうかがえる。この鱗状堆積からは，中世土師器皿，奈良時代の布目瓦・須恵器が出土した。また赤紫色粘土層からサヌカイト製スクレイパーを採集した。

22bt

21btの調査結果より，土手の延長上に10m×10mのトレンチを設定した。耕土，床土を除去した後，東と西端に断ち割りを入れ，土手を確認し，その掘り下げに着手した。土手の谷側で，青灰白色粘土層の下層に中世，奈良時代の遺物を包含する赤紫色砂層の流れ堆積，それを除去すると奈良時代の須恵器・瓦等を多量に包含する赤紫色粘土層を検出した。この包含層は，検出状況から灰原と推定される。特に，東壁崩落土の赤紫色粘土中より，興福寺式の軒平瓦が出土したのは注目される。また，この層は土手状高まり盛り土の基底部より下に出現することからも，21・22btで出土した奈良時代の遺物は，この灰原からの流出と判断できる。



第39図　瀬後谷遺跡　21・22番地遺構平面図

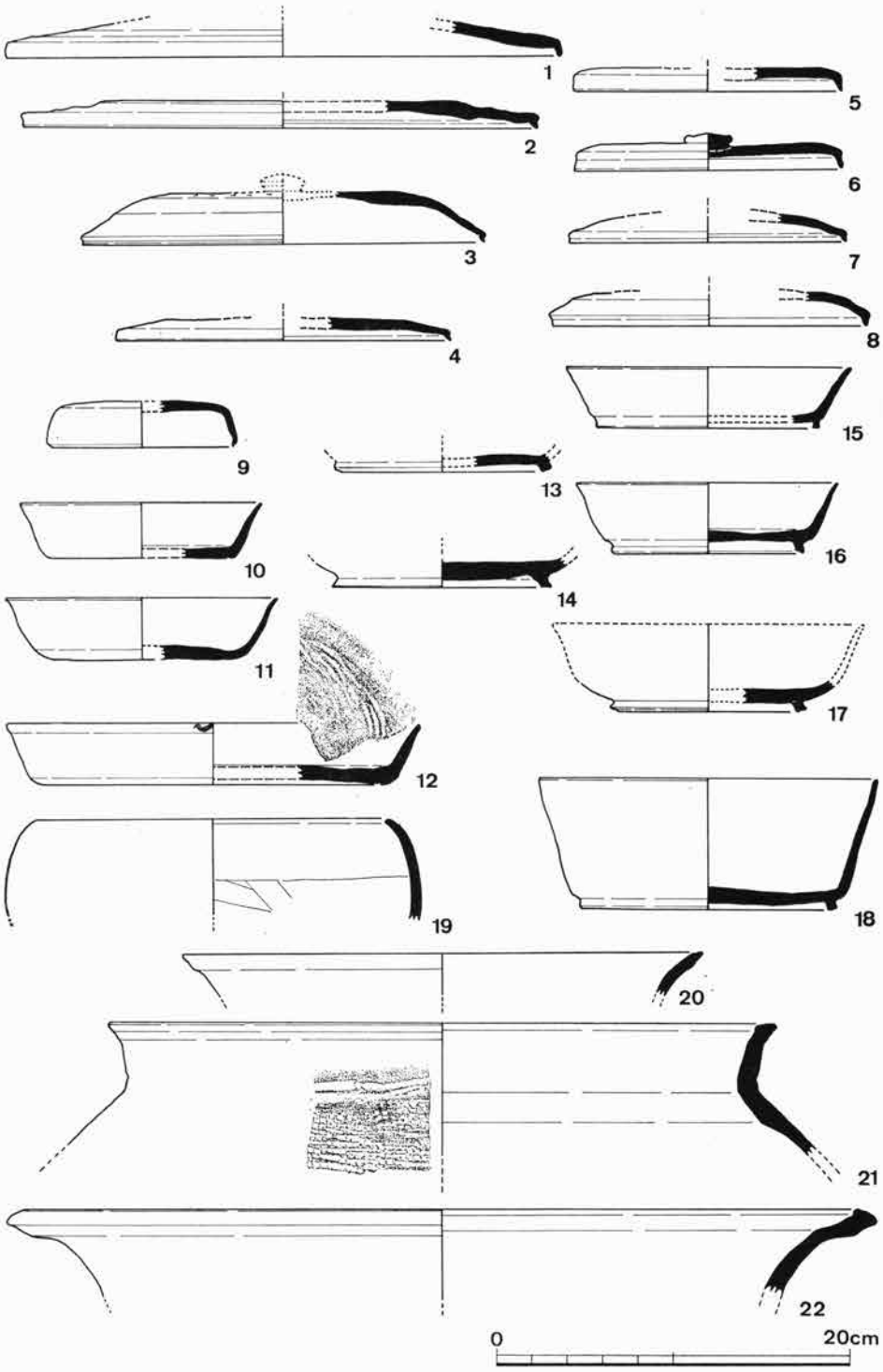


第40図　瀬後谷遺跡　土層断面図(東壁)

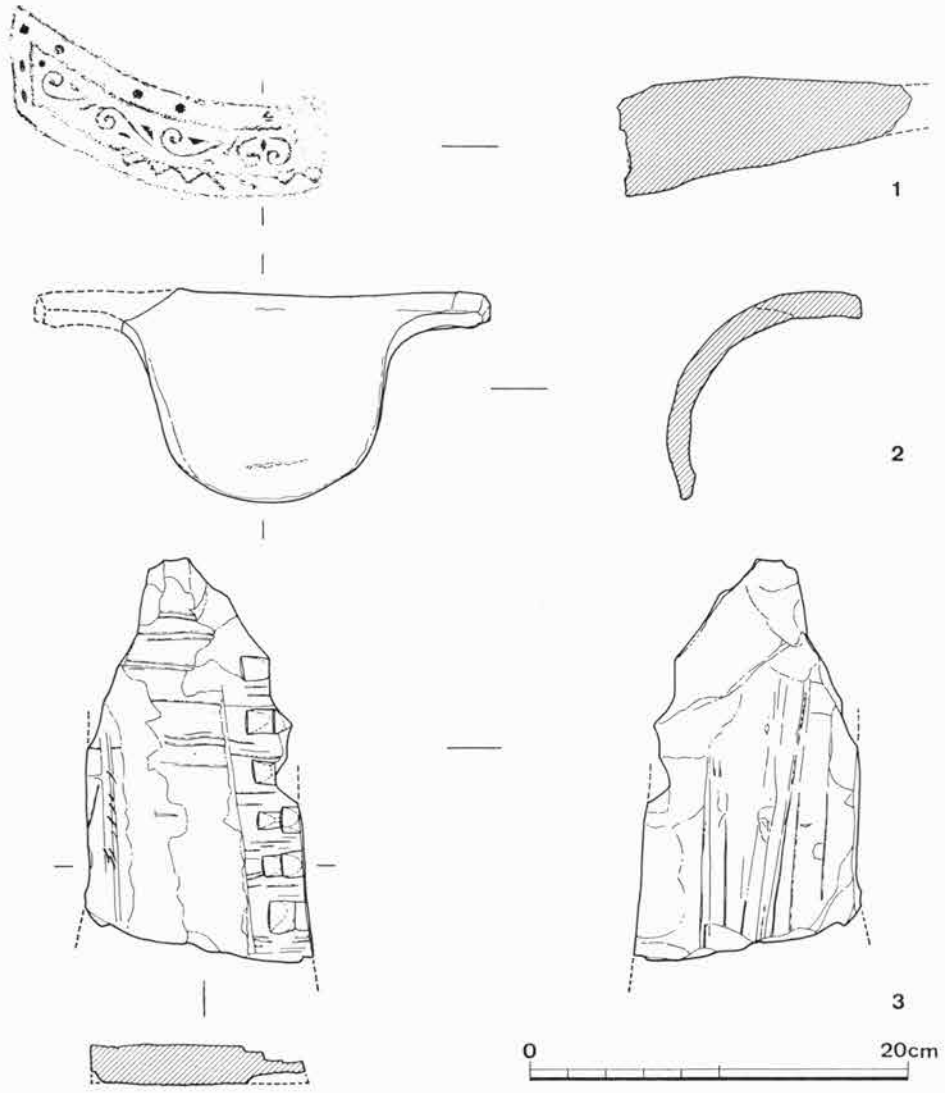
谷の中央部で開けた31bt のグリッドでは，前記同様の状況により，遺物包含層を確認することはできなかった。調査は，５m×８m・５m×９m・５m×５mの３グリッドを谷を横断する形で設定し，北から第１・第２・第３グリッドとした。第１グリッドは最終的に2.5mまで掘り下げ，土層の観察をした。耕土，床土，床土直下の前代の耕作土層が認められる。以下の層では，すべて洪水などによる自然堆積と考えられる砂礫層を確認した。特に，６層目からは青灰色粘土と砂礫が数cmから数十cmの間隔で堆積しており，多量の湧水により文化面は確認できなかった。第２グリッドは2.3m まで掘り下げた。堆積状況は第１グリッドと同様であるが，６層目からの堆積に，粘土が厚くなる傾向がみられた。第３グリッドは，耕土・床土の直下より砂礫層がはじまり，湧水と崩落が激しいため土層の堆積状況を記録することができなかった。観察では３m内に粘土の厚い堆積はみとめられなかった。

③ **16bt**(第38図，図版第16-2)

谷方向に長い18m×８mの「コ」字のトレンチを設定した。耕土，床土を除去したのち，床土直下から，南側に山筋と平行する赤紫色のラインを検出した。トレンチの東と西端と



第41図　瀬後谷遺跡　出土遺物実測図 (1)
（1・14～17・20・22：22bt，2～11・13・18・19：21bt，12・21：34-2bt）



第42図　瀬後谷遺跡　出土遺物実測図 (2)

を断ち割ったところ，この地層は土手状の高まりを覆う旧地表層であることが判明した。土手を境に山側と谷側では，堆積状況が大きく異なっている。すなわち，山側では，砂礫主体の互層，谷側は粘土主体の互層で覆われている。これらの状況により，南の丘陵に平行する堤と丘陵寄りが旧河道であることを確認した。流路から遺物は検出していないが，河道を埋めた土砂礫の中から布目瓦数点が出土した。これらの遺物は，上流からの流れ込みで，本来，上流(21・22bt付近と考えられる)に埋蔵されていたものが水路の開設に伴い露頭し，洗い流されてこの地域に及んだと考えられる。トレンチの南西隅を土質調査坑を

兼ねて，約３mまで掘り下げたが，湧水と崩落が激しいため流路の底面は確認できず，土層の堆積状況は2.4mまでを記録した。地表下約３mで地山と思われる堅く緻密な青灰色粘土を検出した。

３．出土遺物(第41・42図，図版第27)

調査で出土した遺物には，須恵器杯・杯蓋・甕，軒平瓦・面戸瓦・平瓦・丸瓦・不明瓦などがある。須恵器杯蓋には，口径が22～31cmの大型の一群と15～19cmの小型の一群がある。また，端部の形状はいずれも段をもたずにおわるものばかりで構成される。これは，上人ヶ平遺跡出土の須恵器杯蓋の一群よりも古い様相を示している。特徴的な遺物として，須恵器杯Ａの内面にタタキを施したものが認められる(12)。

第42図１は，均整唐草文軒平瓦で，上から下へ巻き込む中心葉で中心飾りを囲み，３回反転の均整唐草文を左右に配する。上外区には円形珠文，脇区に楕円形珠文をおき，下外区には線鋸歯文をおく。以上の特徴によって，この軒平瓦は，奈良国立文化財研究所設定の平城宮式6671-Ⅰ形式にあたる。この型式の瓦は，奈良興福寺の創建時の瓦の系統を引き，出土例としては平城京左京八条三坊が知られている。２は，面戸瓦である。丸瓦を利用して製作されており，焼成前にていねいにヘラ削りによって整形している。３は，不明瓦である。板造りで，端部側面に６か所棒状の工具によって押捺した跡が窺える。鴟尾の一部であろうか。

４．小　　結

今年度は，最初の瀬後谷遺跡の調査であり，範囲確認と，その遺物包含層の状況の確認とに主眼をおいて谷部の調査を実施した。その結果，各地区で上記のような成果を得ることができた。特に21･22bt トレンチの下層から，奈良時代の土師器・須恵器・布目瓦などが出土し，軒平瓦の瓦当から興福寺系の瓦と考えられる資料を得たことは，この地域で初出例であり，興福寺系の瓦を生産した瓦窯が周辺部に存在することがうかがえる貴重な資料といえる。今後，谷部の南側での調査が重要と考えられる。　　(戸原和人)

(4) 西 山 遺 跡

1. は じ め に

西山遺跡は，上人ヶ平遺跡・瓦谷遺跡が所在する丘陵の北端に位置し，木津川の沖積地や対岸の丘陵が一望できる。標高は75mを測り，比較的平坦な地形が広がっている。西山遺跡の南方には西山塚古墳があり，周辺一帯に古墳が点在する可能性が指摘されている。今回の調査でも，関連する遺構・遺物の検出が予想されていた。以下，各トレンチの概観を記述する。

2. 遺　　構

①98・99bt(第43図)

調査地内で最南端に設定したトレンチである。地形的には北方へのびる平坦な尾根の基部であり，西山塚古墳とは谷を挟んだ部分にあたる。地表下40cmで大阪層群の地山を検出したが，地境の溝以外は確認できなかった。出土遺物には，近代の陶磁器・瓦などがある。明確な遺構・遺物を検出できない要因としては，尾根の基部にあたることと，複雑に谷が入り込んでいることをあげることができる。

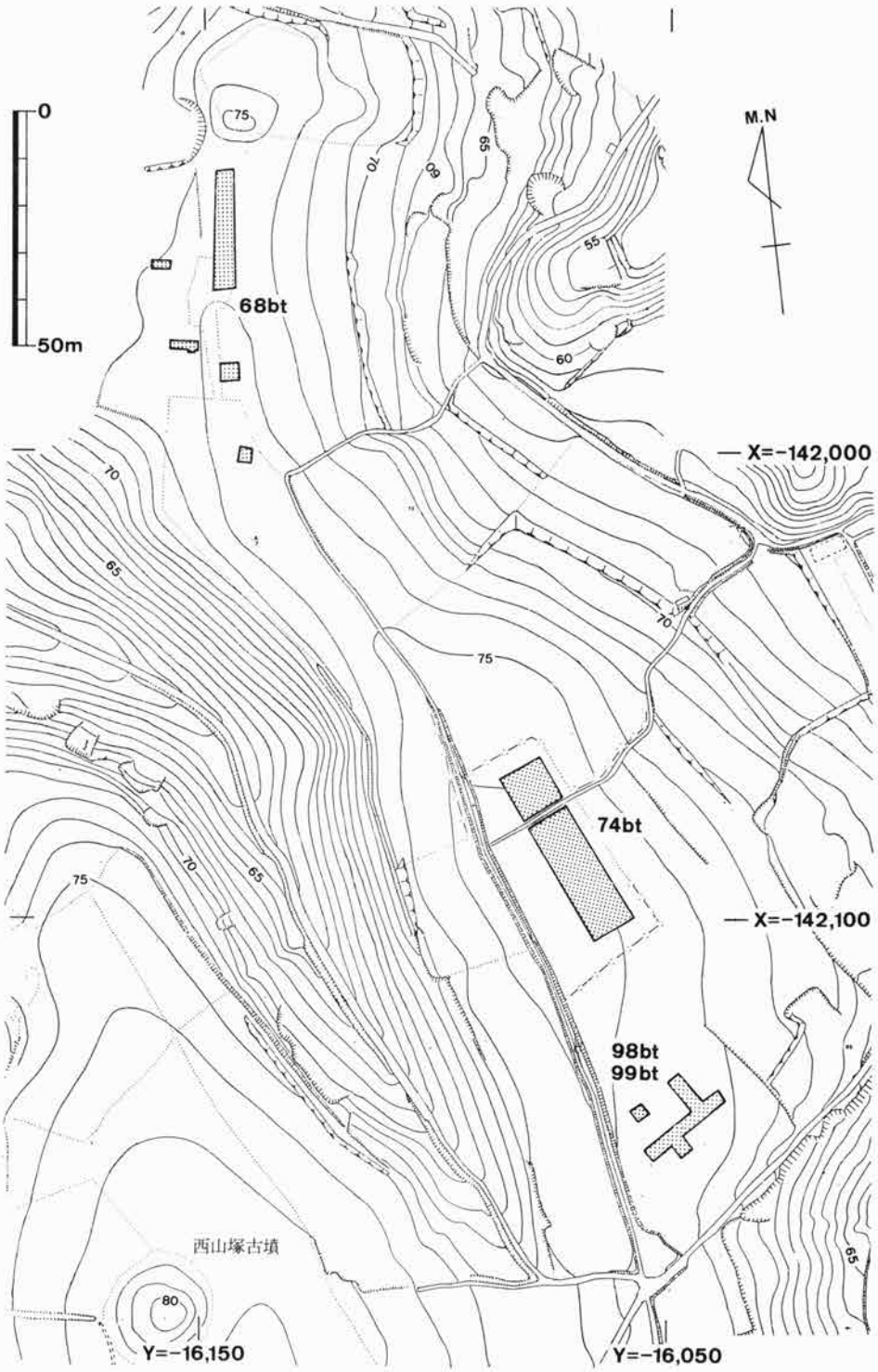
②74bt(第43図)

調査地の中央に位置し，東方へ傾斜する地勢を呈している。トレンチ西側には農道が南北に走っており，この農道とトレンチ設定部分の表土高を比較すると，農道が70cm程度高くなっている。農道部分が旧地形の高さを表している可能性が高いと予想し，尾根に平行した部分にトレンチを設定するにとどめた。地山面は，耕作土直下で確認した。部分的に黒色土の落ち込みを検出したが，遺物の出土はなく，時期設定・性格については不明な点が多い。トレンチ中央部分では，古墳時代前期の甕の底部(第46図-3)を埋置した土坑を検出した。甕の胴部以上は削平のため残存しないが，底部は，土坑中央部に位置し，埋納を目的にした土坑であったと考えられる。その他，大半が削平された土坑があるが，これらの遺構は，古墳時代前期の墓か祭祀ピットの可能性も指摘できる。

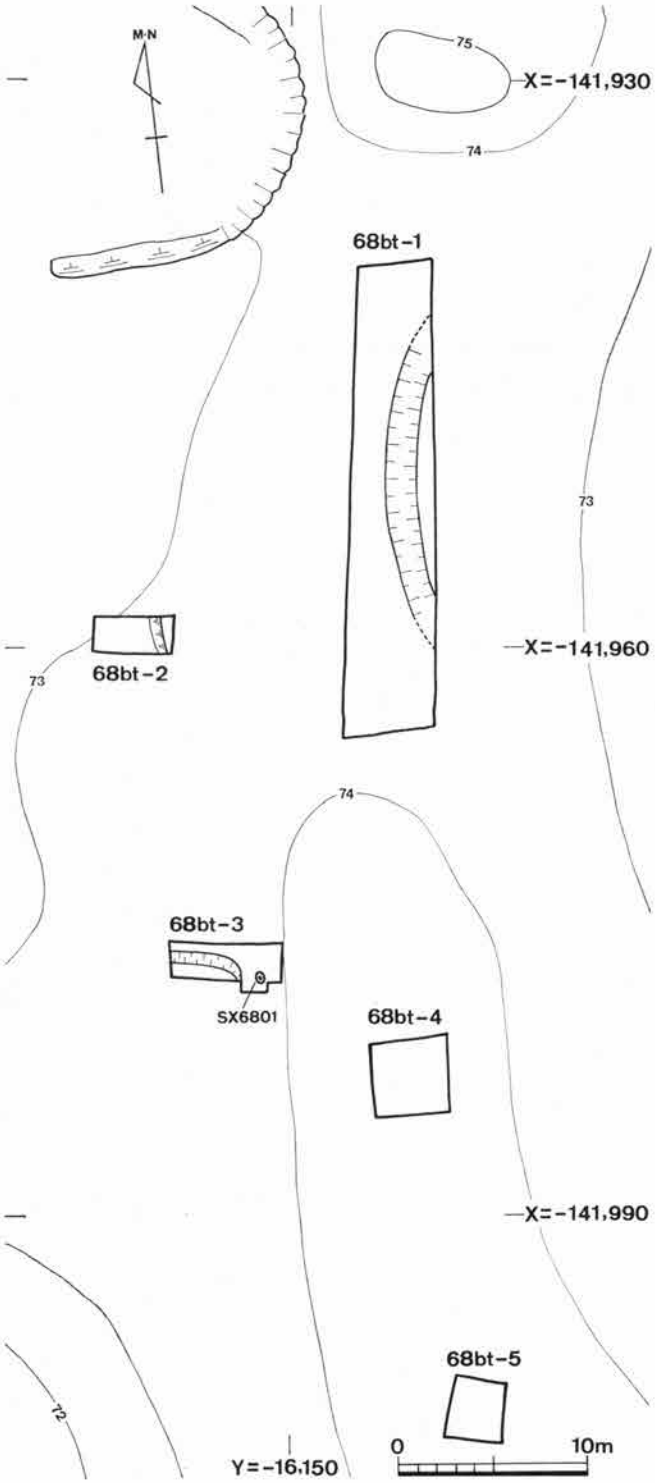
このトレンチは，大半が削平されており，遺構の残存状態は悪いが，古墳時代には何らかの土地利用があったと言える。東方へのびる傾斜地に同様の遺構・遺物が広がっている可能性も大きい。

③68bt(第44・45図，図版第17)

調査地内の最北部に位置し，丘陵の先端部に5か所のトレンチを設定した。68bt-1は，



第43図　西山遺跡調査区配置図



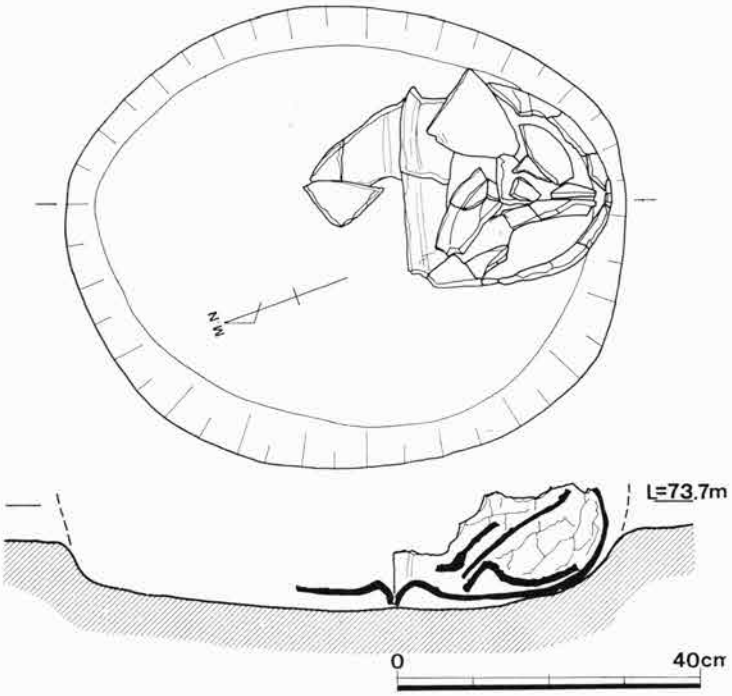
第44図　西山遺跡68番地遺構平面図

尾根の主軸に平行したトレンチで，東側で幅2mの円形を描く溝を検出した。円弧は不整形であり，方形に穿たれた溝の一辺である可能性もある。溝の深さは40cmを測り，遺物はほとんど含んでおらず，その性格は不明であるが，土師器(第46図-4)が上層から出土している。68bt-2は，傾斜面に設定したトレンチである。現地表では，平坦な地形を呈しているが，旧地形は，西方に激しく傾斜しており，人為的に尾根上部を平坦化し，上面を広げたと考えられる。68bt-4は，地表下30cmで地山面を検出した。基本的には，平坦であるが，部分的に凹凸があり，68bt-2で確認した尾根上面の平坦化と関連がある可能性も指摘できる。68bt-5は，東西方向に落ち込んでいる谷部の上縁に位置している。トレンチは，先述した68bt-4と同じ状況である。68bt-3は，地形的には，傾斜面と平坦面の変換線に位置しており，西半部は概して堆積が厚い。他のトレンチでは，

明確な遺構を検出していないが，南端部分で甕棺墓を１基検出した。甕棺墓(SX6801)は，長軸74cm・短軸60cmの楕円形を呈し，深さは10cmである。土坑底部は，平坦に掘られ削平が著しいが，ほぼ直立する壁を有している。甕の埋納位置は，土坑の中央ではなく，南東側に寄っている。甕と甕の合わせ部分は，一部，黄褐色粘土で補塡している。甕内部には，上部破片が落ち込んでおり，甕棺墓が造られた直後に土圧で崩落した可能性が高い。甕内からの遺物は出土しておらず，副葬品は当初からなかったと考えられる。甕棺墓を検出した部分は，西方へ傾斜しており，墓壙底部を水平になるように掘り込んでいる。墓壙の上層には，尾根の平坦部分を削り込んだ砂利が堆積しており，尾根の平坦化は，甕棺墓の示す年代(古墳時代後期)以降に行われたと考えてよい。68bt-1で検出した溝は，この平坦化された面に掘り込まれており，溝の年代設定の上で重要な根拠となる。

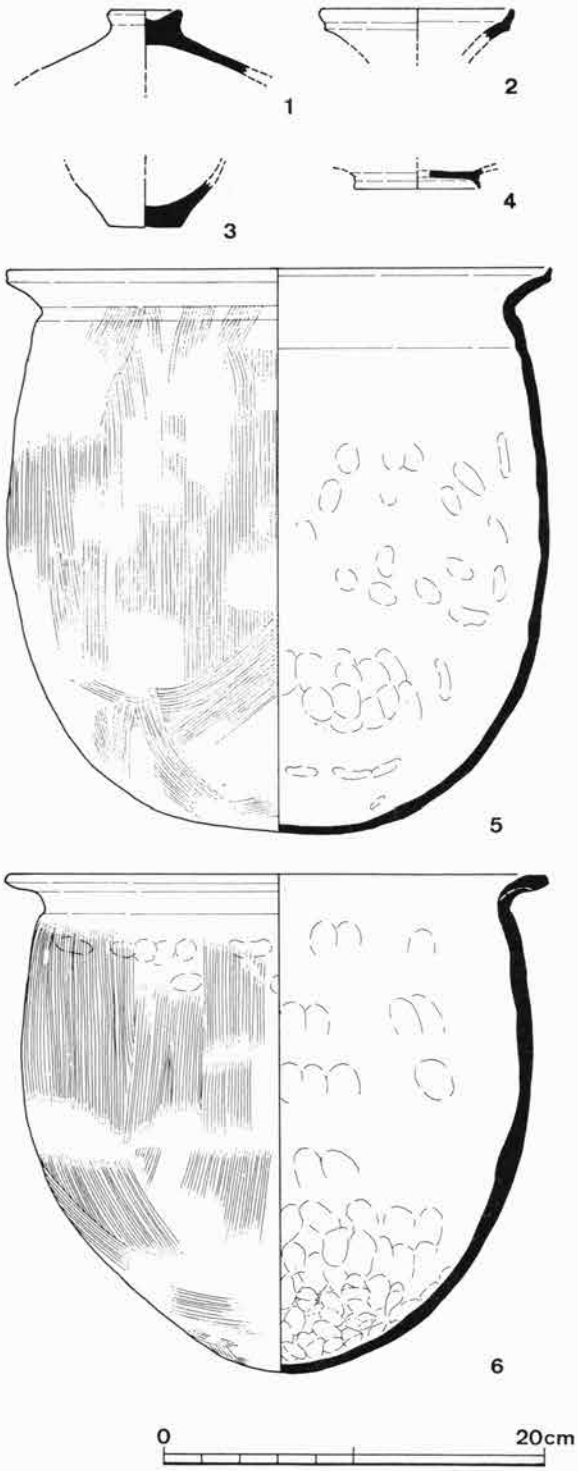
3．出土遺物（第46図，図版第27）

土師器・蓋１は，つまみ上縁部直径が3.6cmを測る。欠損部が多く，全体の形状は不明であるが，凹状つまみから内側へ屈曲し，ほぼ直接的に広がる蓋部をもつと考えられる。調整は，ていねいなナデで仕上げている。



第45図　西山遺跡SX6801実測図

土師器・器台２は，口縁部径が10.4cm，口縁部下段の屈曲部径が9.6cmを測る。口縁部外面には，１条の退化した凹線がある。内面は，内傾したのち屈曲し，体部に至っており，残存部分から判断して受け部面は，貫通したものと考えられる。



第46図　西山遺跡　出土遺物実測図
（1～4：24bt，5・6：SX6801）

土師器・甕3は，底径1.8cmを測る。底部外面はていねいにナデており，体部外面には，一部にタタキ痕がある。

土師器・杯4は，高台径6.6cmを測る。高台は，杯底部から外方へ短くのび，薄くつくられている。

土師器・甕5は，口縁部径28.8cm・頸径25cm・体部最大径28.4cm・器高29.6cmを測る。肩の張らない体部から頸部で屈曲し外湾する口縁部をもつ。口唇部は，短く直立し尖頭状に仕上げる。外面は，体部外面が縦ハケで調整しているが，体部下半は，不整方向のハケで調整している。内面は，指頭圧痕が残るが，ていねいにナデで仕上げている。

土師器・甕6は，口縁部径28.8cm・頸径24.6cm・胴部最大径27.2cm・器高26.4cmを測る。尖頭状の底部で，肩の張らない体部から頸部で屈曲し，鋭く外反する口縁部をもつ。口唇部には面をもち，少し肥厚させている。外面は，指圧痕が残存するが，縦ハケで調整している。内面は，指頭圧痕が残存している。

これらの土器は1～3が古

墳時代前期に比定できる資料であり，５・６は古墳時代後期の中でも後半に比定できる資料である。

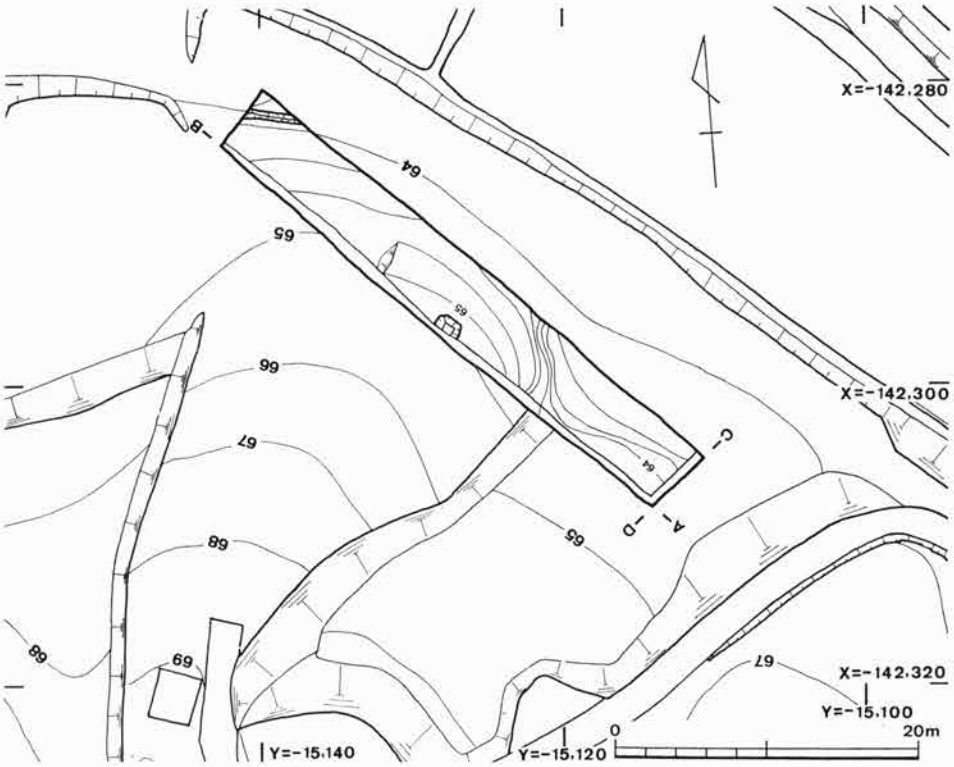
４．小　　結

今回の調査では，遺跡の大略の範囲確認ができたと言える。特に，68btでは甕棺墓を１基検出しており，周辺に同種の遺構が存在する可能性は極めて高いと言えよう。今後，周辺の遺跡の成立時期との関連で各遺構・遺物を考える必要がある。　　（小池　寛）

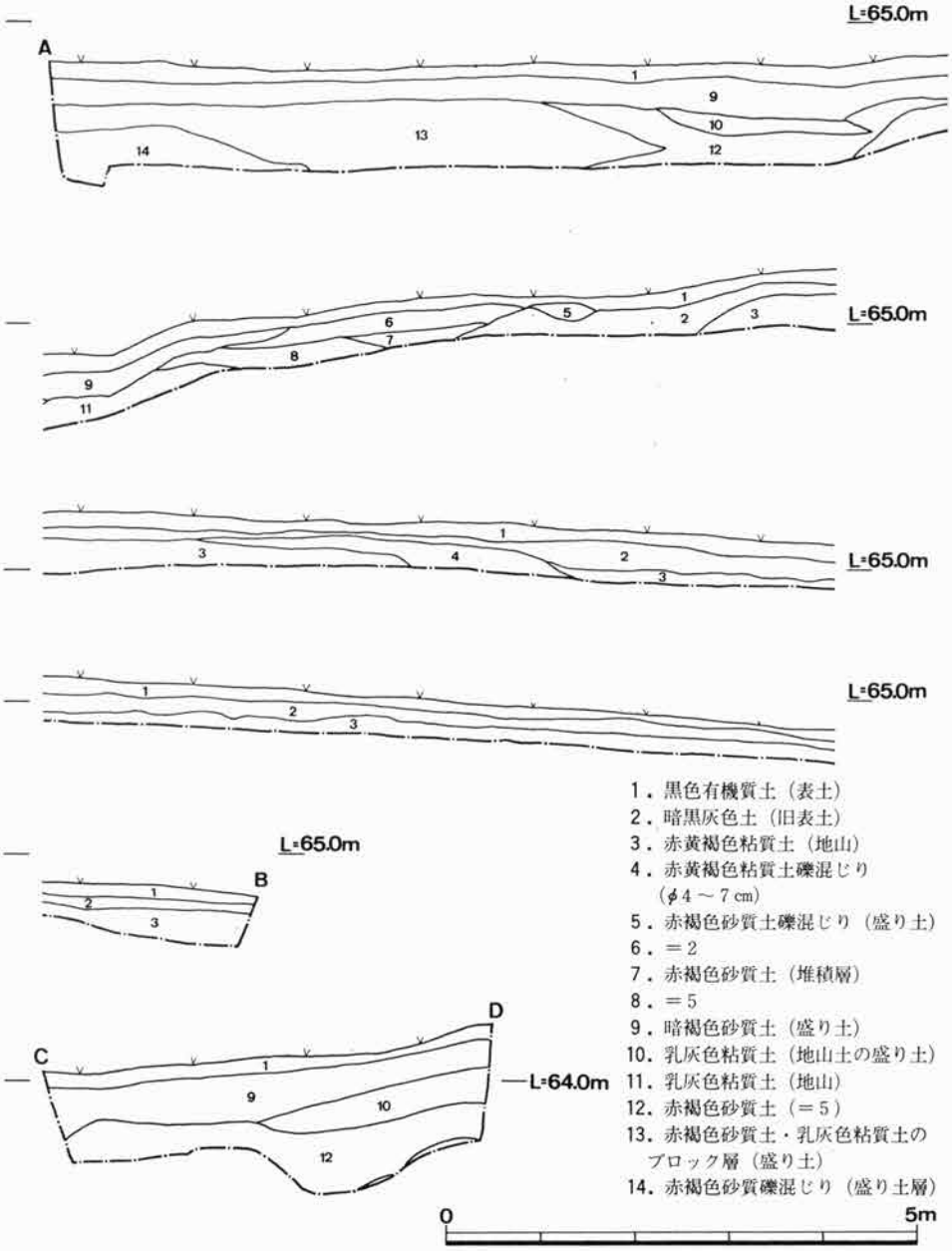
(5) 菩 提 遺 跡

１．は じ め に

菩提遺跡は，京都府相楽郡木津町市坂菩提に所在し，木津町の南東から北西の市街に流入する井関川で形成された沖積地の南岸の微高地上に立地している。墓や住居を造営するうえで好条件な，広く安定した河岸段丘を形成している。この遺跡では，過去，昭和60年



第47図　菩提遺跡　調査地平面図



1．黒色有機質土（表土）
2．暗黒灰色土（旧表土）
3．赤黄褐色粘質土（地山）
4．赤黄褐色粘質土礫混じり（φ4～7㎝）
5．赤褐色砂質土礫混じり（盛り土）
6．＝2
7．赤褐色砂質土（堆積層）
8．＝5
9．暗褐色砂質土（盛り土）
10．乳灰色粘質土（地山土の盛り土）
11．乳灰色粘質土（地山）
12．赤褐色砂質土（＝5）
13．赤褐色砂質土・乳灰色粘質土のブロック層（盛り土）
14．赤褐色砂質礫混じり（盛り土層）

第48図　菩提遺跡　トレンチ断面図

度に周辺部で一度調査を行っている。今回の調査は，北面する丘陵の裾部で実施した。調査に要した期間は，昭和63年２月19日～３月５日で，調査面積は190m²である。

２．調査概要(第47・48図，図版第18)

調査は，なだらかな丘陵の先端部と隣接する谷地形にまたがって５m×38mの調査トレンチを設定し，地層と遺物包含層の状況の把握につとめた。

３．小　　結

今回の調査では，近世以降に構築された野井戸状の遺構のほかは，丘陵裾部と，谷部の地形を確認したのみで，出土した遺物も近世以降のものばかりであった。この結果から，遺跡の中心は開発対象地域外に広がるテラス部であると考えられる結果を得た。

(戸原和人)

お わ り に

市坂地区における発掘調査は昭和59年度から開始され，昭和60年度の梅谷地区の調査を経て，昭和61年・62年と３年目となった。この間，各遺跡ごとに試掘調査・発掘調査を進め，それぞれの遺跡の性格や範囲が次第に明らかになりつつある。

上人ケ平遺跡は，木津町東部丘陵の中でも最も平野部に突き出した丘陵上に位置し，平野部や対岸の丘陵が一望できる立地を備えている。隣接した遺跡としては，平城宮大膳職で使用する瓦を焼いた市坂瓦窯が古くから知られている。昭和59年度の調査では，奈良時代の遺構・遺物を検出し，昭和61年度の調査では，古墳時代の竪穴式住居跡・土坑などを確認した。今年度は，昭和61年度の成果にもとづき合計10か所で調査を行った。ここに報告した遺構は，遺跡の全体像をわかりやすくするために，昭和61年度検出分も合わせ報告することとした。

上人ケ平遺跡の奈良時代遺構群は，西に開く小さな谷に営まれた市坂瓦窯とともに，平城京の造営のための瓦の生産地としての性格が明らかとなりつつある。掘立柱建物や溝などは真北に規制された区画を示し，官の工房の様相を呈している。また，瓦谷遺跡の範囲に入る瓦谷74btでは，同時代と考えられる井戸１基も検出した。

調査地内の各所で市坂瓦窯で焼成されたことが確認できる軒丸瓦や軒平瓦が出土している。昭和59年度の調査では，軒丸瓦で，6133Ａ型式と，6235Ａ型式が出土し，平城宮Ⅳ式Ｂ型式の鬼面文瓦が出土している。昭和60年度の調査では，軒丸瓦で新たに6133Ｃ型式が

確認された。さらに，今回の調査で，軒丸瓦で6133A(b)・6133B，軒平瓦で6718A・6725B(b)・6732C型式と6725型式系の軒平瓦が追加確認された。これらの瓦の構成と比率は，平城宮で出土する瓦の構成に近い。このことは，天平17(745)年の平城京還都以後，市坂瓦窯で焼かれたものが一括して持ち込まれたことを示すものとして注目できる。

今年度までの試掘調査で，瓦生産及び操業に係わる作業場が谷部及び台地上に広がっていたことを確認した。昭和63年度以降，上人ケ平遺跡については遺跡の全体に対する本格的な調査が必要になったといえる。上人ケ平遺跡の全体像が明らかになることによって奈良時代の瓦生産の構造も明らかになるであろう。

瀬後谷遺跡の調査では，興福寺式の軒平瓦6671-Ⅰ型式の瓦当があげられる。6671型式の瓦当の文様は，下外区に鋸歯文，脇外区及び上外区に楕円珠文を配し，内区蓮弁文を他の瓦と逆に配置するという特異な瓦である。今回出土した瓦当は，6671-Ⅰ型式の範疇に入るものである。6671-Ⅰ型式は，6671型式のうちでも，上外区の楕円珠文を円形珠文とする特徴をもつ。さらに，今回の資料は，内区唐草文の外端の子葉「＼」を彫り直し，円形珠文にするという特徴をもち，この地域で初出例であり，興福寺系の瓦(6671-Ⅰ系)を生産した瓦窯が周辺部に存在することがうかがえる貴重な資料といえる。

瓦谷遺跡の調査では，井戸の検出は，この地域では初出例であり，貴重な資料といえる。また，今年度までの調査で，遺跡の中心は，瓦谷古墳とその周辺の丘陵上，さらにその南に開く谷部付近と考えられるようになった。　(戸原和人)

注1　調査参加者（順不同・敬称略）
石田真一・伊藤英樹・井上直樹・大内一徳・大倉伸也・大谷健二・鎌田敏史・北川年彦・金家真由美・小泉裕司・江　介也・斎藤和久・佐藤正之・滋井秀明・白石由香・鈴村裕司・田中達也・中井英策・中塚　等・橋本錦児・樋上和恵・藤本忠嗣・松本英昭・丸田晃弘・宮本純二・向井　斎・山本　力・湯浅研史・吉川啓太・乾　祥子・木下町子・木村絹子・坂田千晶・島原みどり・新谷二三代・谷口ゆかり・玉置真弓・辻　道子・早川和子・林　恵子・平岡佳代子・藤井理絵・三谷育代・吉永清美

注2　田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」(『研究論集』第10号　平安学園考古学クラブ) 1966

注3　戸原和人，荒川　史，伊賀高弘「4．木津地区所在遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第26冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注4　高橋美久二他「1．長岡京跡左京第13次(7ANESH地区)発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第4集　向日市教育委員会) 1978，町田　章他『木器集成図録』近畿古代篇　奈良国立文化財研究所　1985，戸原和人「長岡京出土の古櫃の復元」(『京都考古』43) 1986

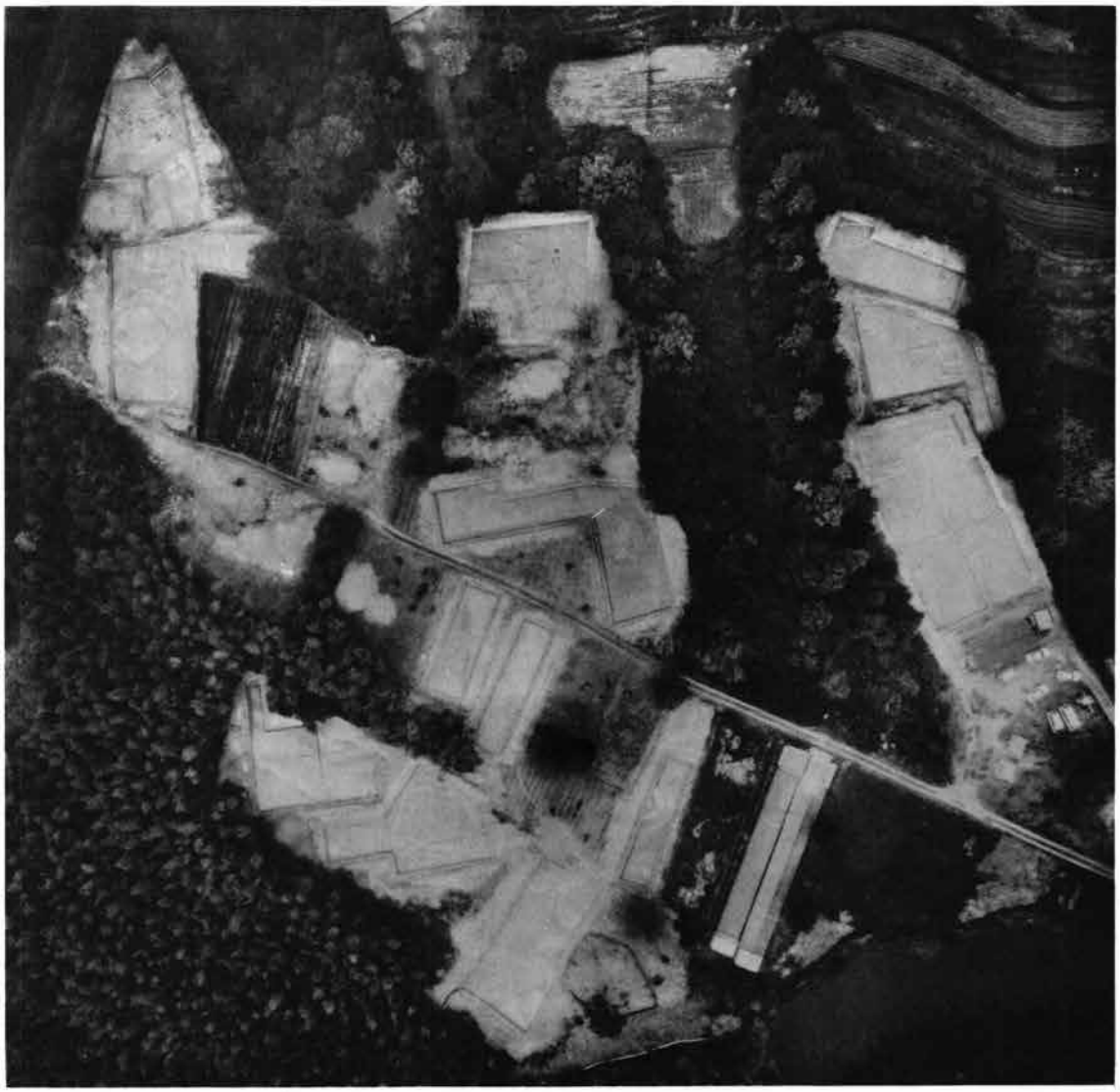
注5　注3に同じ

注6　寺沢　薫他「矢部遺跡」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊　奈良県立橿原考古学研究所) 1986

図　　版

図版第1　上人ケ平遺跡

(1) 調査地全景（空中写真、南東から）



(2) 調査地全景（空中写真、上が北）

図版第2　上人ケ平遺跡

(1)　ISR3・8bt全景（南から）

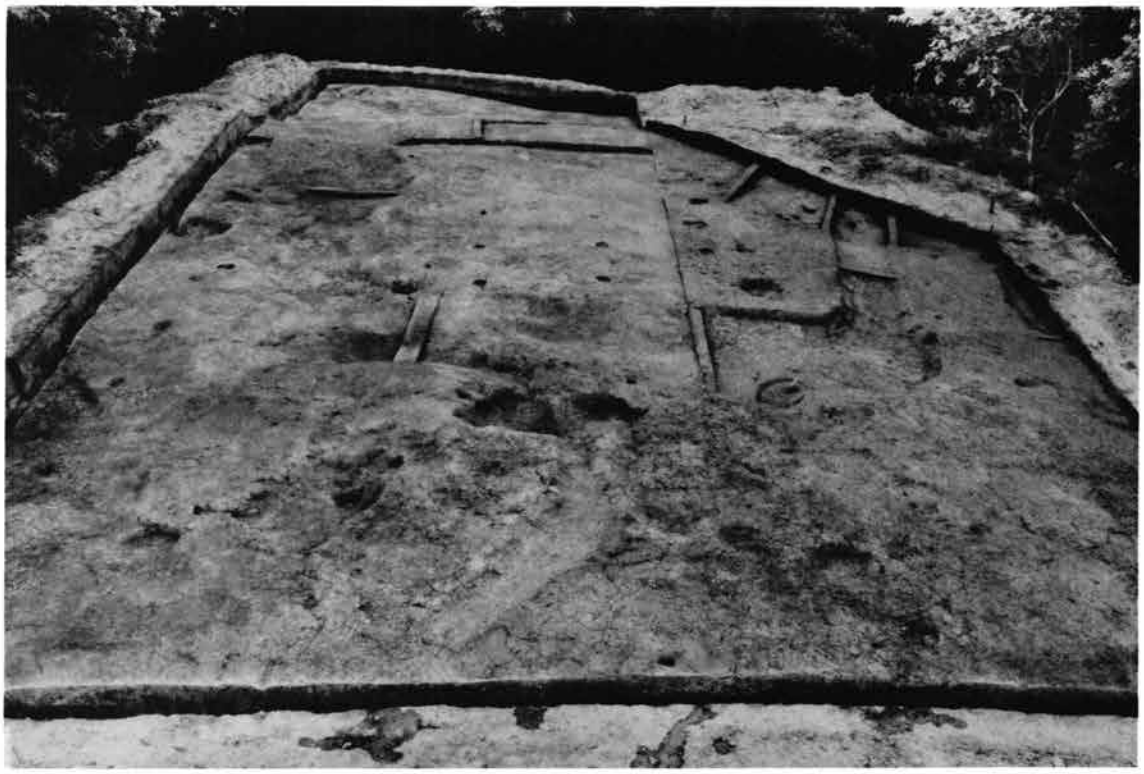
(2)　SK0301遺物出土状況（南東から）

図版第3　上人ケ平遺跡

(1)　SH0305全景（南西から）

(2)　SH0305遺物検出状況（北東から）

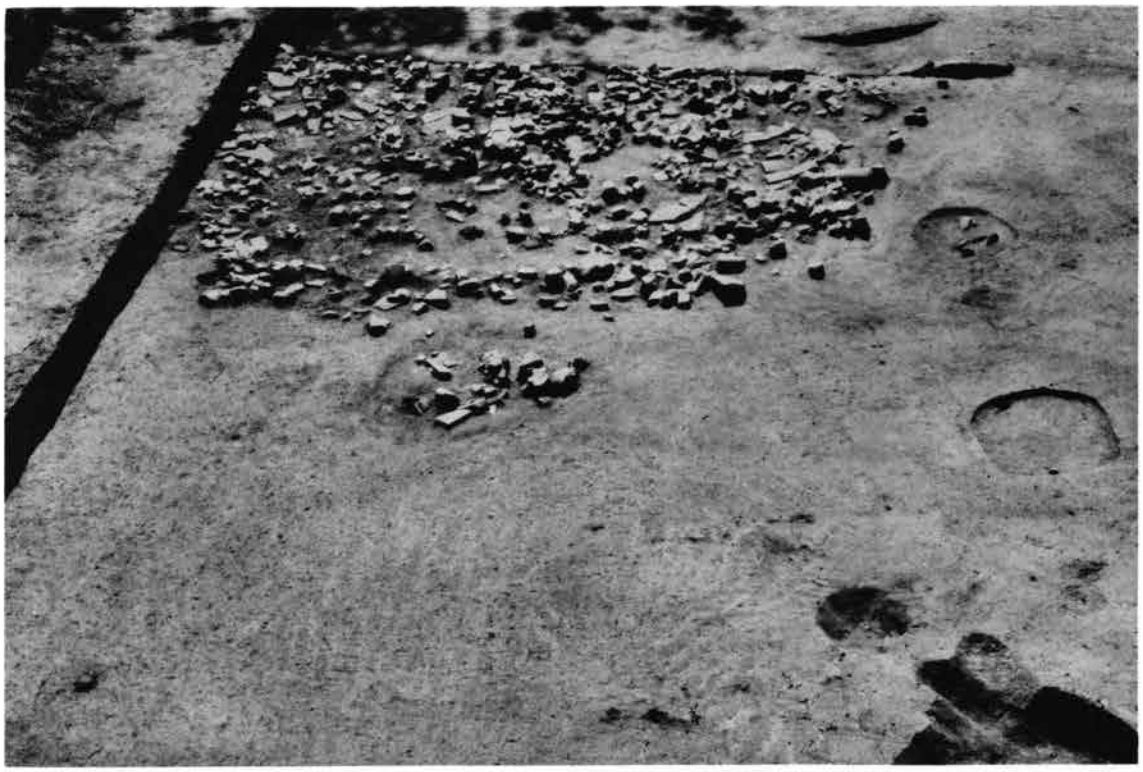
図版第 4　上人ケ平遺跡



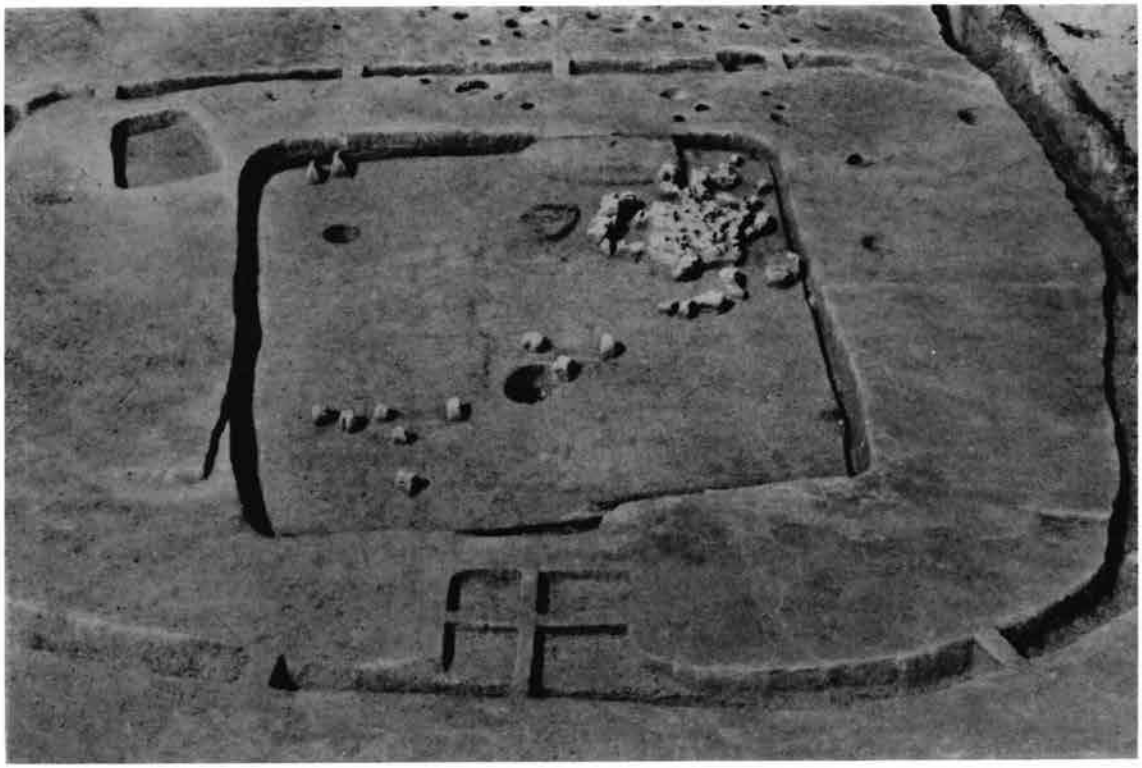
(1)　ISR 6 bt全景（南から）

(2)　ISR19bt全景（南から）

図版第 5　上人ケ平遺跡

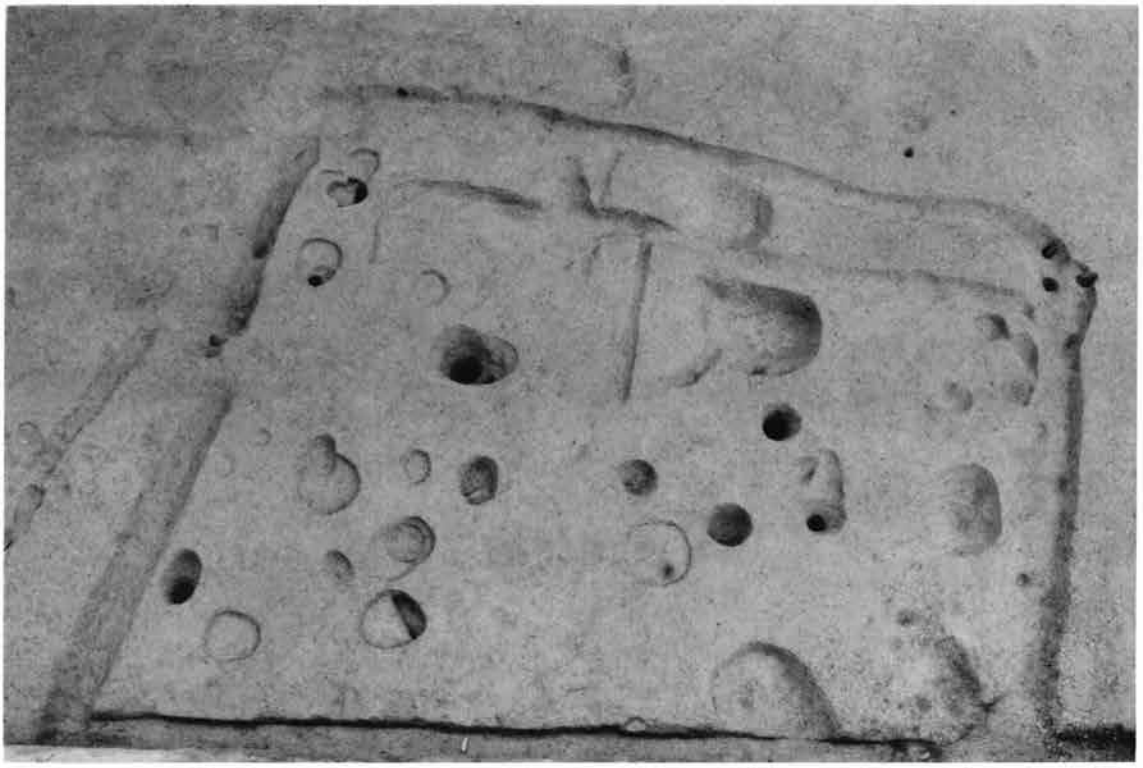


(1)　SK1909（東から）



(2)　SH3620遺物出土状況（南から）

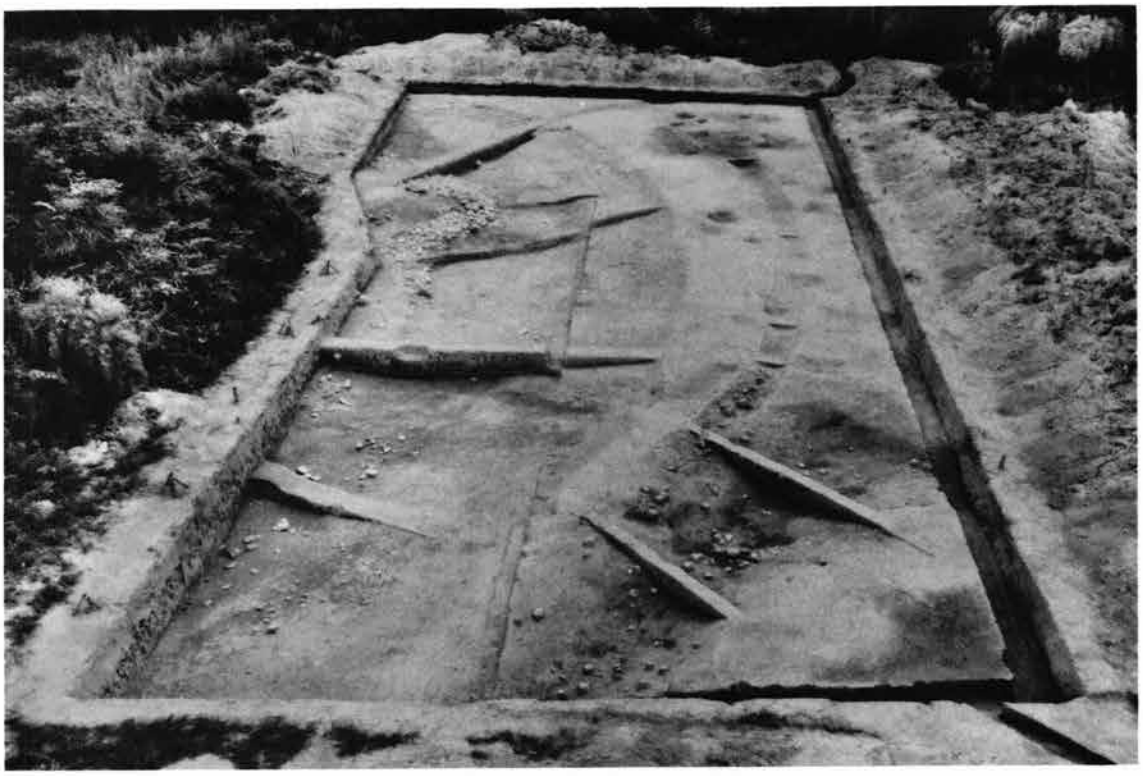
図版第6　上人ケ平遺跡



(1)　ISR36bt　SH3608全景（西から）

(2)　上人ケ平6号墳検出状況（南東から）

図版第7　上人ケ平遺跡



(1)　ISR21bt-3全景（北東から）

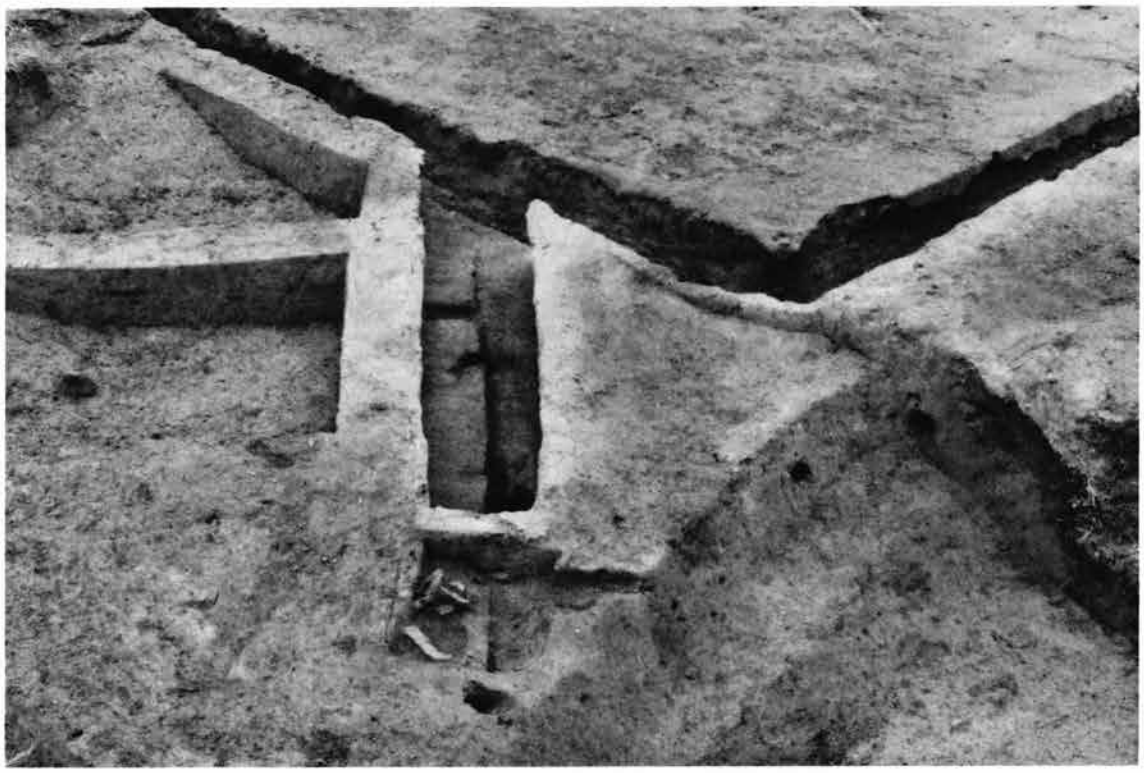
(2)　上人ケ平5号墳造り出し埴輪検出状況（西から）

図版第 8　上人ケ平遺跡

(1)　上人ケ平 5 号墳造り出し鶏形埴輪(頭部)出土状況（西から）

(2)　上人ケ平 7 号墳周溝内遺物出土状況（東から）

図版第 9　上人ケ平遺跡



(1)　上人ケ平７号墳埋葬主体部遺物出土状況（北から）

(2)　上人ケ平７号墳遺物埋納壙検出状況（北から）

図版第10　瓦谷遺跡

(1)　IKW34bt全景（北から）

(2)　IKW31bt河道検出状況（東から）

図版第11　瓦谷遺跡

(2)　IK W35bt河道検出状況（西から）

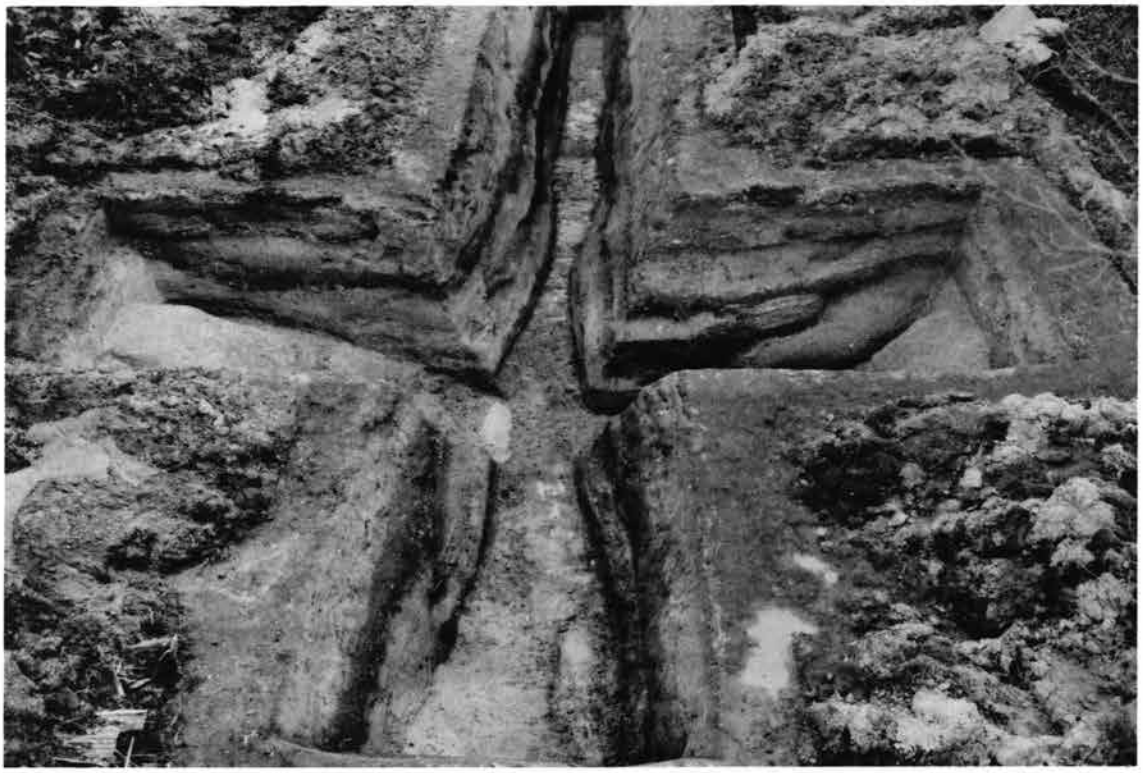
(1)　IK W32bt全景（東から）

図版第12　瓦谷遺跡

(1)　ISR 1 - 3 bt全景（東から）

(2)　ISR 4 bt全景（北から）

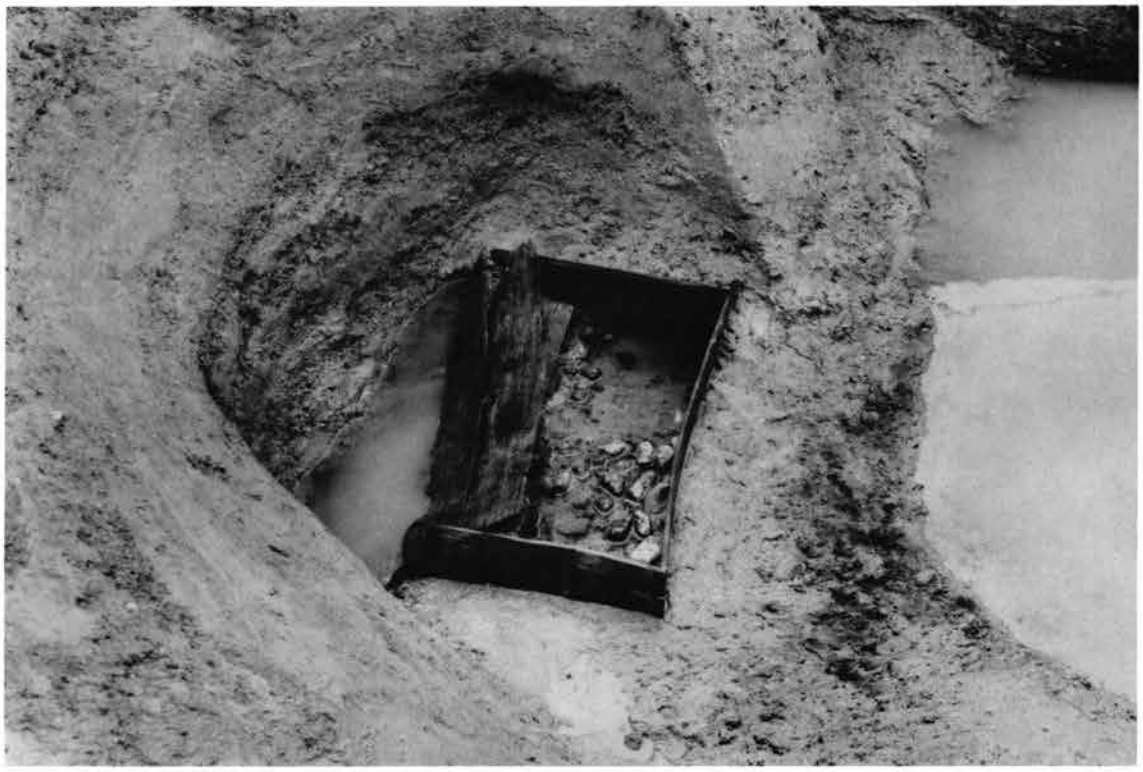
図版第13　瓦谷遺跡



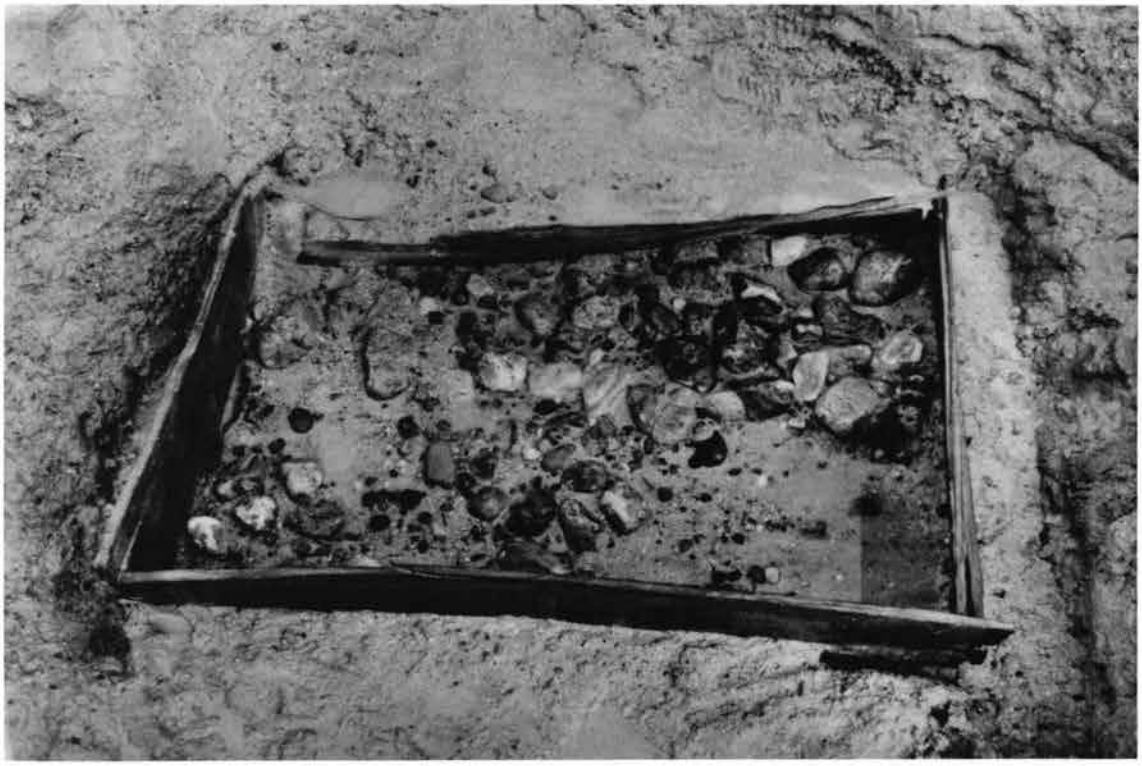
(1)　IKW74bt-A全景（南から）

(2)　IKW74bt-B全景（北東から）

図版第14　瓦谷遺跡

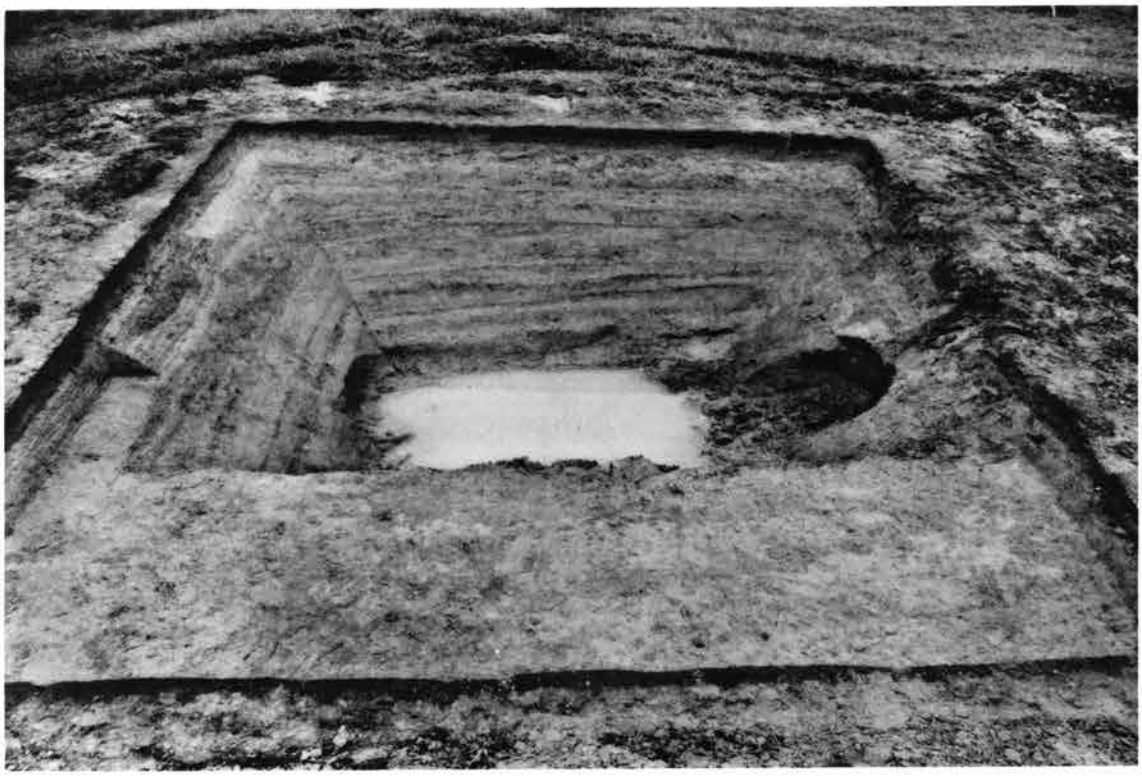


(1)　IKW74bt-B　SE7402検出状況（北から）



(2)　IKW74bt-B　SE7402石敷の検出状況（西から）

図版第15　瀬後谷遺跡

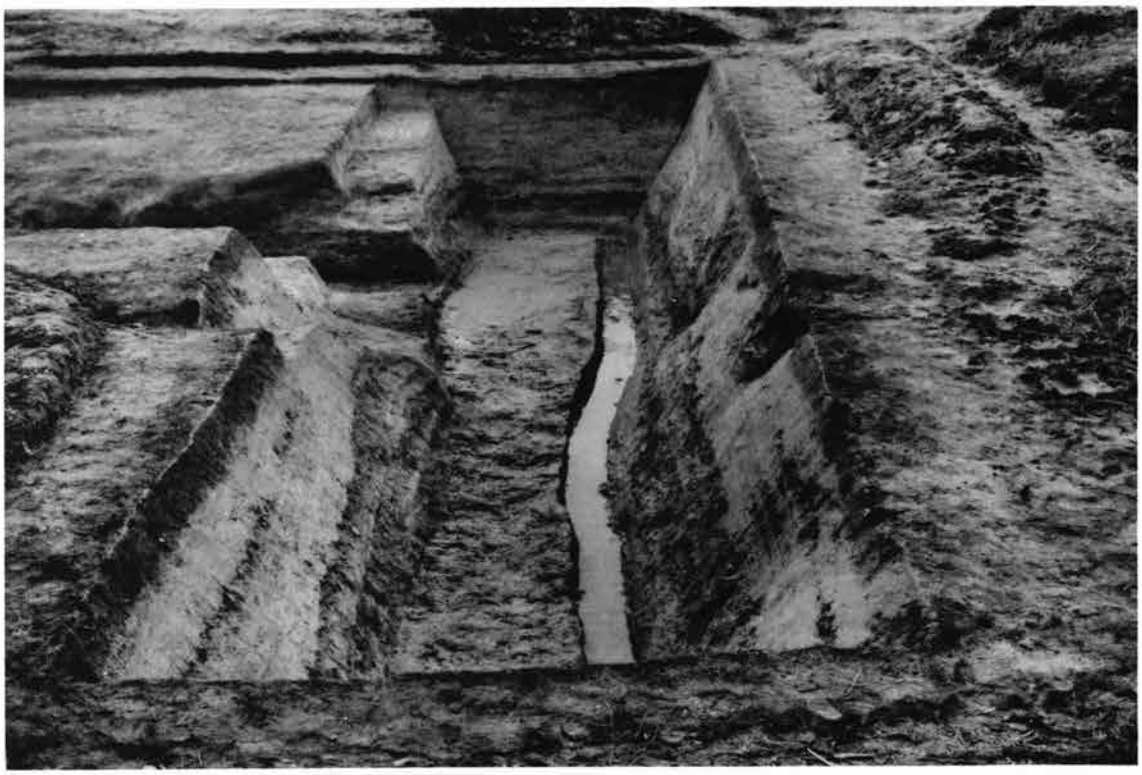


(1)　ISN34bt-1全景（南東から）

(2)　ISN21bt全景（西から）

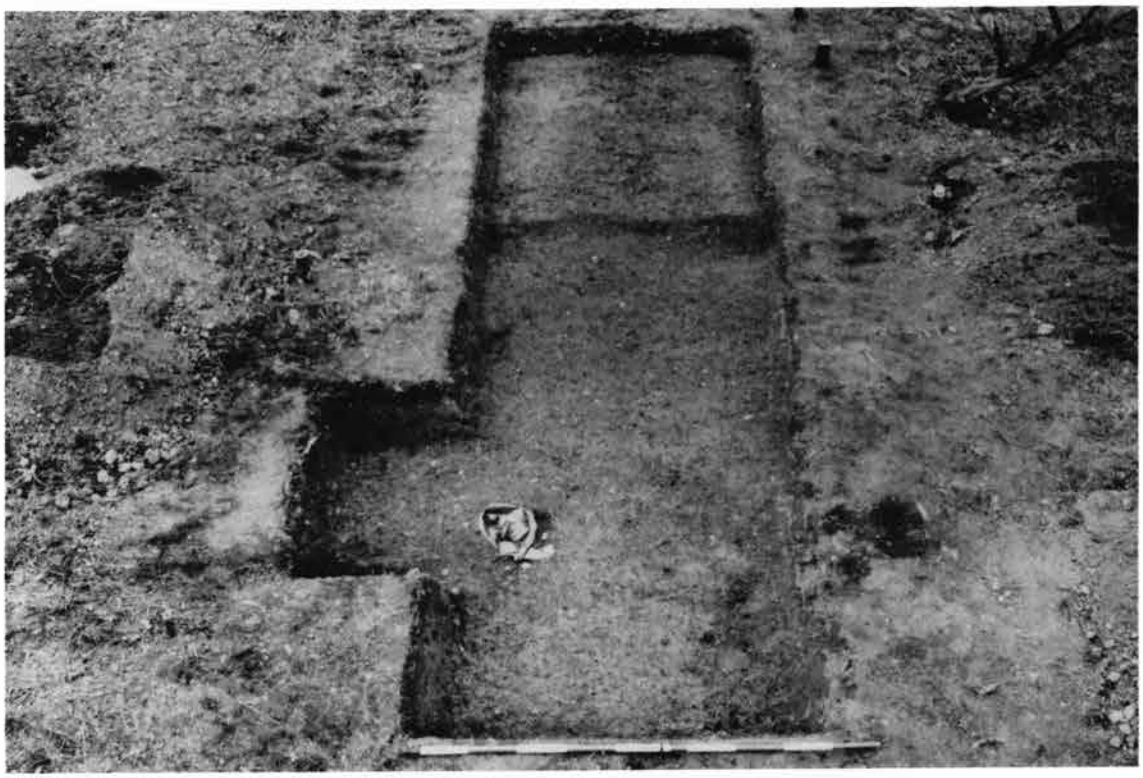
図版第16　瀬後谷遺跡

(1)　ISN22bt全景（西から）



(2)　ISN16bt全景（南から）

図版第17　西山遺跡

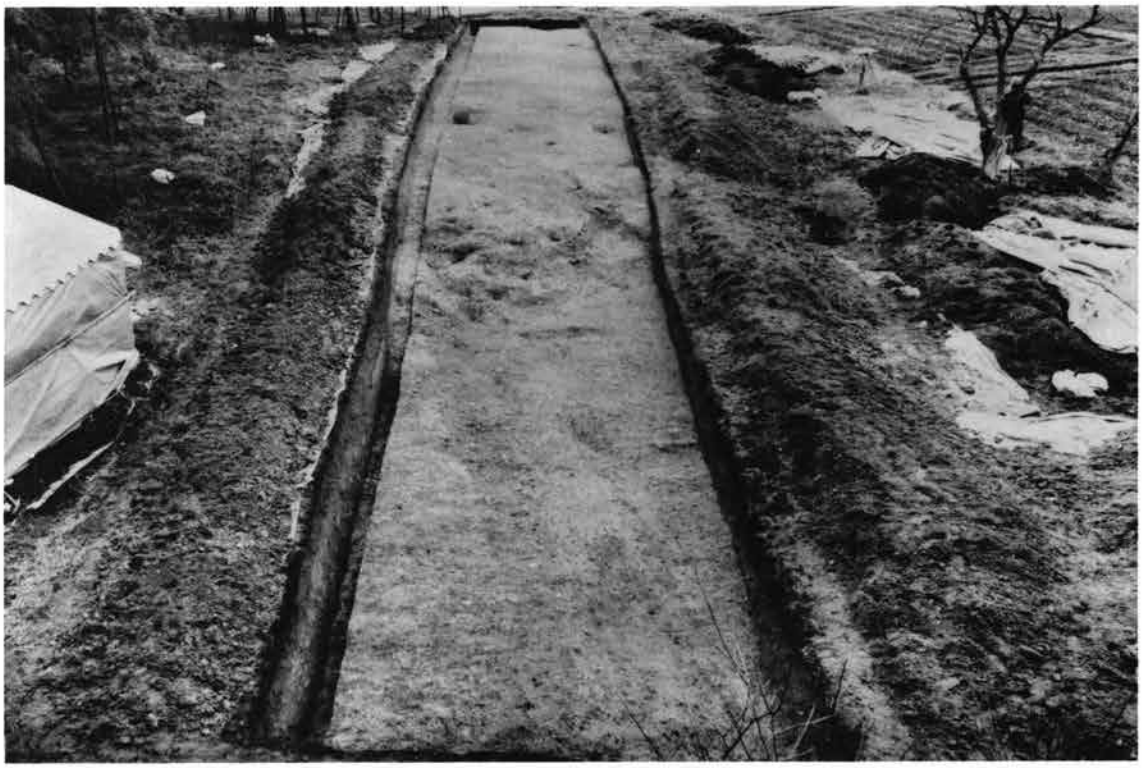


(1)　INM68bt-3全景（東から）

(2)　INM68bt-3　SX6801検出状況（西から）

図版第18　菩提遺跡

(1)　調査区遠景（北から）



(2)　IBI103bt全景（南東から）

11-3

11-2

11-6

11-1

11-5

11-7

出土遺物(1)

図 版 第 20　上人ケ平遺跡

12-4

13-1

13-3

12-5

13-4

13-7

13-8

13-9

出土遺物(2)

図 版 第 21　上人ケ平遺跡

14-2

14-1

14-7

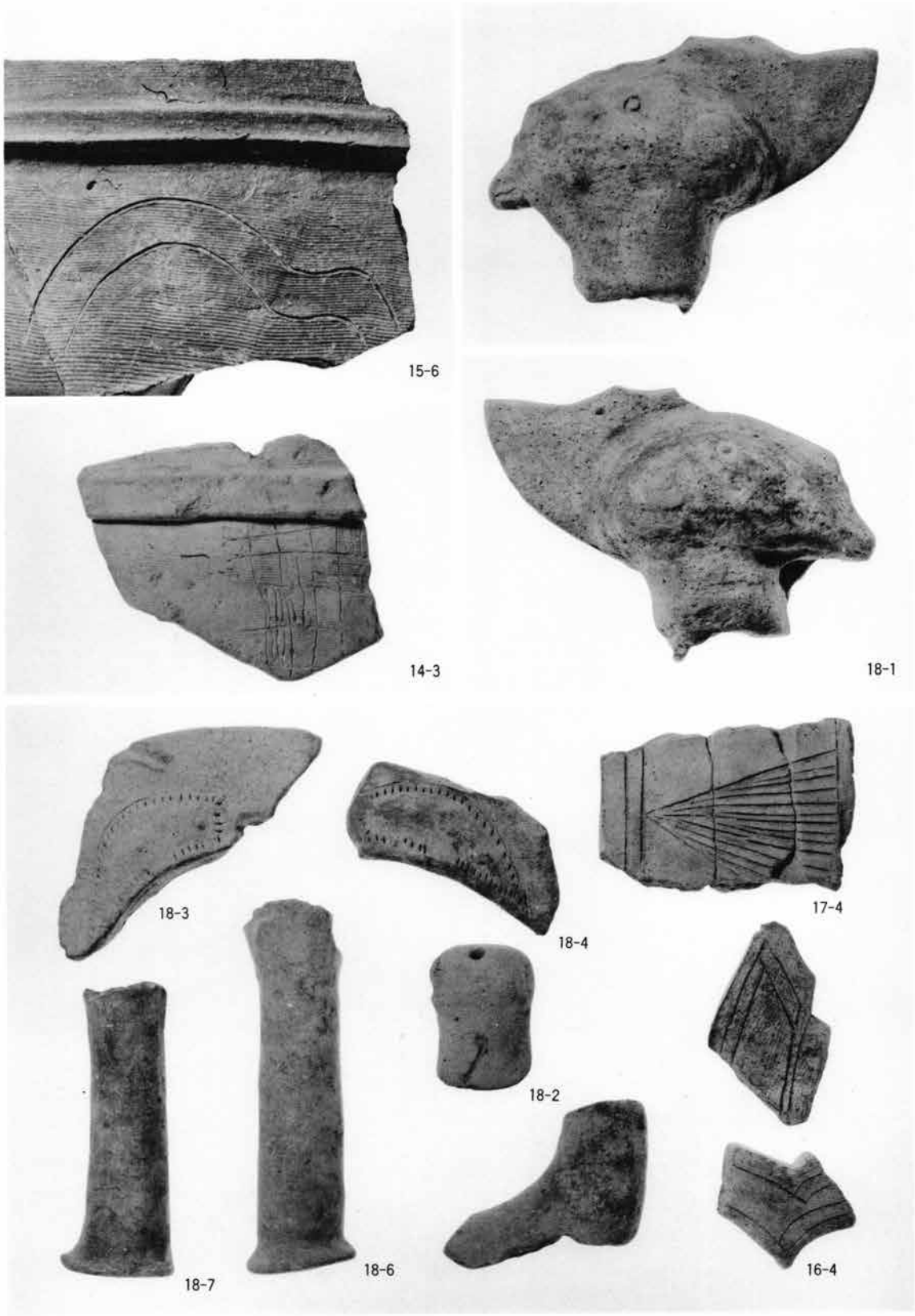
15-5

15-1

15-3

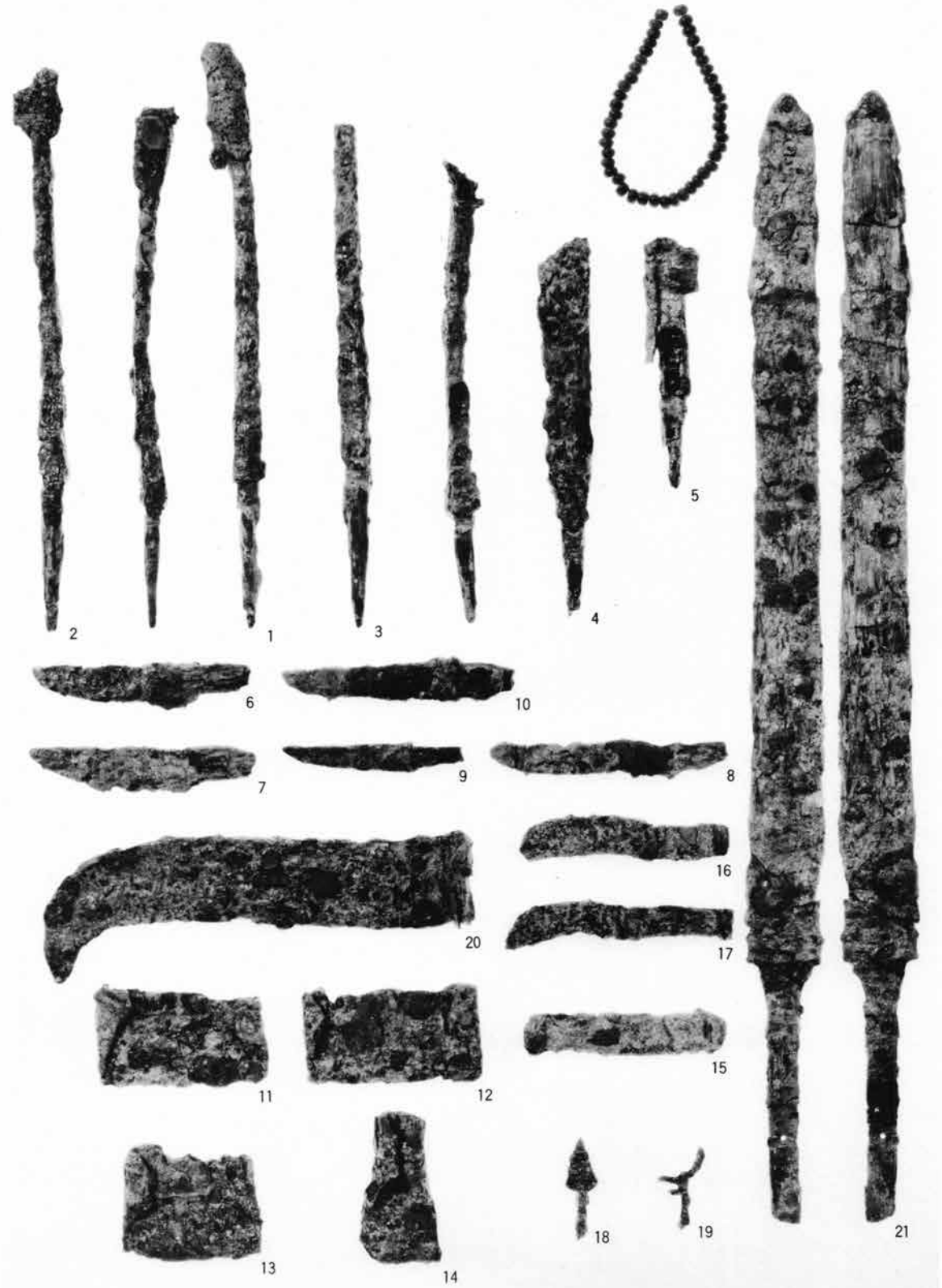
出土遺物(3)

図 版 第 22　上人ケ平遺跡



出土遺物(4)

図版第23　上人ケ平遺跡



出土遺物(5)

図 版 第 24　上人ケ平遺跡

21-1

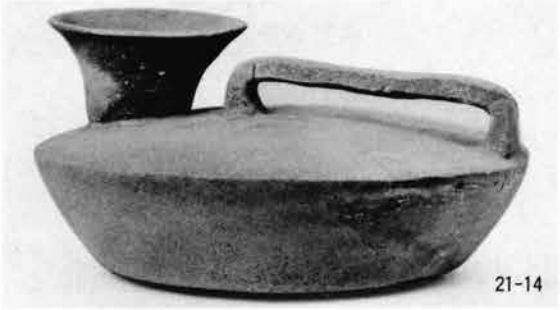
21-2

SK1909

21-6

20-10

23-2


21-14

20-12

21-15

20-16

21-16

出土遺物(6)

図 版 第 25　上人ケ平遺跡

24-1

25-1

24-4

25-3

26-2

26-4

26-1

出土遺物(7)

図版第26　瓦谷遺跡

36-5

36-10

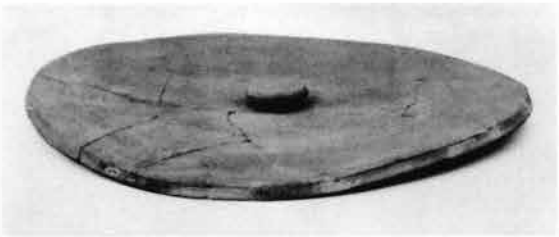
36-4

36-7

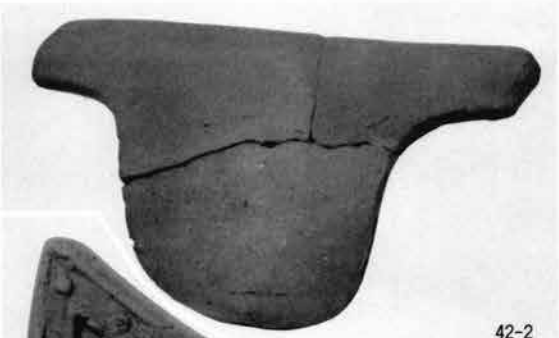
36-8

37

出土遺物(8)



46-5



42-2

42-1

46-6

出土遺物(9)

京都府遺跡調査概報 第32冊

平成元年3月25日

発行　(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷　有限会社　真　陽　社
〒600 京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL (075)351-6034